

大阪朝日新聞社

76

2111

大日本  
新聞社

76-244



人物畫傳



序

大阪朝日新聞編輯局の一隅、不等邊三角形の一卓子あり、同人の常に最も珍とする所、而して日々之に凭るものは即ち畫傳子なり。  
人物畫傳は蓋し此の卓子上の産物なり、而して其の觀察亦自ら不等邊三角形的なるは面白からずや。  
圓く、若くは等邊なる卓子は世に珍らじからず、同人が夫の卓子を以て珍となす所以は即ち其の不等邊三角形なるに在り。  
今此の人物畫傳の人物畫傳たる所以、亦蓋し其の不等邊三角形的觀察にあらんか。  
三角形の角度は圓形若くは四角形の角度よりも鋭し、況んや其の不等邊なるに於てをや。  
鋭きものは人を動かすこと亦鋭し是れ吾人が不等邊三角形的觀察を以てしたる人物畫傳を、敢て世に推奨せんとする所以なり。

明治四十年七月一日

凡例

- 一 本書は本年一月中旬より五月初旬に亘り大阪朝日新聞に連載したるものなり。
- 一 書傳中の人物は、世に顯れたる人を擧ぐるを旨とせず、精神界物質界の各種の階級に亘り、其の経歴性行の、以て後進を資すべきものあるを主意としたり。
- 一 世間廣し、人物何ぞ之に限らんや、今は百人を以て一先筆を擱く、他日更に載すべくして載せざるを補ふの機もあらん。
- 一 書傳は現代の人物を主としたり、朱元璋、白石、蕃山、セシルローズの如き、篇中五六の故人を交へたるは、其の人物の特に慕ふべきものあればなり。
- 一 篇中伊集院中將の如き、梅澤少將の如き、其米國に向つて發するの目を以て記述したり、今一冊となすに及び、特に改めず。
- 一 書傳の肖像は、概ね最近の寫眞を取りたり、唯現閣臣のみは、書伯中村不折氏に託して、其の顔面の特長を描き、是れを寫眞版にせしもの（齋藤海相を除く）、傳も亦此の畫に隨ふ。
- 一 書傳固一冊として刊行するの意あらず、只連載中より四方讀者の、輯めて一冊とせよとの要求あり、今や完結に及んで更に其の需頻々、即ち其意に従ふ而已。

人物畫傳目次

- (一) 西園寺公望
- (二) 後藤新平
- (三) 朱元璋
- (四) 田尻稻次郎
- (五) ヘーゼラ
- (六) 齋藤實
- (七) レオトルストイ
- (八) 清浦奎吾
- (九) ハースト
- (十) 高橋是清
- (十一) ウキルヘルム二世

- (十二) 寺内正毅
- (十三) 山川健次郎
- (十四) ローズウエルト
- (十五) 高峰護吉
- (十六) 下田歌子
- (十七) コイベル
- (十八) 板垣退助
- (十九) 木下廣次
- (二十) ヒュース
- (二十一) 原敬
- (二十二) 熊澤蕃山

(二十三) 雨宮敬次郎  
 (二十四) モルトケ  
 (二十五) 阪谷芳郎  
 (二十六) 大谷光瑞  
 (二十七) 下瀬雅允  
 (二十八) 田能村直入  
 (二十九) 牧野伸顯  
 (三十) 安川敬一郎  
 (三十一) 木村駿吉  
 (三十二) 西原清東  
 (三十三) アブデル、アジズ

(三十四) 犬養毅  
 (三十五) 淺野總一郎  
 (三十六) 有坂成章  
 (三十七) 内田康哉  
 (三十八) ラッポ  
 (三十九) 藤原忠一郎  
 (四十) 美當一調  
 (四十一) セシル、ローズ  
 (四十二) 伊集院五郎  
 (四十三) 島田蕃根  
 (四十四) 山縣伊三郎

(四十五) 狩野亨吉  
 (四十六) 北村美那子  
 (四十七) 新渡戸稻造  
 (四十八) 伊藤博文  
 (四十九) 矢島楫子  
 (五十) 西太后  
 (五十一) 松田正久  
 (五十二) 中村不折  
 (五十三) 藤田傳三郎  
 (五十四) 山本權兵衛  
 (五十五) 山葉寅楠

(五十六) ハンナ、リッデル  
 (五十七) 林董  
 (五十八) 兼松房次郎  
 (五十九) 山内滿壽治  
 (六十) 二見金助  
 (六十一) 小村壽太郎  
 (六十二) 大谷光演  
 (六十三) 頭山滿  
 (六十四) 島川文八郎  
 (六十五) 森村市左衛門  
 (六十六) 尾崎行雄

- (六十七) ロックフェラー
- (六十八) 新井白石
- (六十九) 幸田延子
- (七十) ブー
- (七十一) 平瀬與一郎
- (七十二) 澤柳政太郎
- (七十三) 月山貞一
- (七十四) 貝島太助
- (七十五) 梅澤道治
- (七十六) 柴田幸三郎
- (七十七) 石井十次

- (七十八) ハッパ
- (七十九) 土倉庄三郎
- (八十) 大石正巳
- (八十一) 桃中軒雲右衛門
- (八十二) 田中正造
- (八十三) 川崎芳太郎
- (八十四) 臼井六郎
- (八十五) 三宅雄二郎
- (八十六) 石川素童
- (八十七) 島村速雄
- (八十八) 上山英一郎

四

- (八十九) 曾少卿

- (九十) 式田喜平
- (九十一) 田村又吉
- (九十二) 岡松參太郎
- (九十三) 井上偃水
- (九十四) 加藤高明
- (九十五) 内田銀藏
- (九十六) 島田孫市
- (九十七) 棚橋絢子
- (九十八) 吳錦堂
- (九十九) 芳野世經

人物畫傳目次

(百) 常陸山谷右衛門

畫傳餘錄目次

- 獨帝の平生
- 田尻博士言行
- 直入翁逸事
- 藤原忠一郎氏の言行
- 島田蕃根翁逸話
- 狩野亨吉氏逸話
- 式田老農の篤行
- 女浪人零丁奇談

五

人物畫傳目次終

人物畫傳

大阪朝日新聞社編

(一) 西園寺住職公望卿



疑問の裡に政友會を受取り、疑問の裡に内閣を受取り、甘く政友會を率ゐ了うせ、内閣を持ち續くるは西園寺侯なり、侯は華胄の生れにして、平民主義なり、一時は新聞記者として民権自由の説を唱へた、其當時は、誠に謀叛人の一人の如くして、政體を危くする者の如くに思はれた、時勢は一轉再轉し、侯も一轉再轉し、時に文部大臣ともなり、樞密院議長ともなり、伊藤侯の藥籠中に入たが、時に鴨立庵の宗匠となりて、茶坊主の如き生活を營む、人は觀て以て恬澹無爲の人となす、政治の如きは其長所にあらず、又冀望にあらずとなす、所が政治も甘く遣り、又多少の執

人物畫傳





愛知縣醫學校長兼病院院長に抜擢され、幾多の古顔を眼下に見て、三面六臂に切り廻したが、君ごしては牛刀を以て鶏を割くの類であつたらう、遂に明治十六年内務省准奏仕御用掛として上京を命ぜられ、ここに君が中央舞臺に敏腕を試むる機会を得た、同年君が私淑する安場保和氏の二女と結婚し十九年には内務技師に昇任し、二十三年には獨逸留學を命ぜられ、二十五年には衛生局長に任せられるといふトン／＼拍子、相馬事件の一蹶で、九天の嶺より奈落の底に沈淪したが、これぞ君に取ての試金石、いよく天下政界の大立物たる、花々しき幕はこの時より開かれたのである。

此より石黒男に推されて、陸軍検査部事務官長となり、再び衛生局長となり、中央衛生會幹事となり、遂に故兒玉男に知られて、臺灣總督府民政長官となつたが、這は宛かも嶋を負ふ虎を四面開瀾の廣野に放つたやうなもので、君の豪放瀟灑な氣象は財政の十年計畫となり、三大事業の設計となり、阿片の專賣制度となり、土匪の討滅となり、以て殖民政策の成功者として男爵を授けらるゝに至り、更に猛虎の慾望は増大し、一躍、二億萬圓の大會社を踏まへて、無名の新殖民地總督となり濟まじたは、何處迄運命の寵兒であらうか。

醫に三種類あり、上醫は國家を治療し、中醫は醫師を治療し、下醫は病人を治療す、若し病人すら治療する能はざる者は醫の數に入らず、卒業生諸君は是れより病人を治療する下醫となるにて、諸君を教へし先生は中醫にして、我が輩の如きは國家を治療する上醫なりとは、君が衛生局長時代に、慈惠醫院醫學校の卒業式に臨んでの演説だが、この傲岸なる言は、今日の君に於て果して實現せられた、その代り君のやうな人にヒを取られては堪るまい。

### (三) 鼻下長の太祖朱元璋

馬鹿か、豪傑か、頗る怪異の相なり。此の容貌の持主を、誰れぞか爲す、曰く明の太祖朱元璋。



長頸鳥喙とある、是れも醜男に違ひない、而も皆豪傑である、して見れば、明の太祖

も容貌で天下を取つたかも知れぬ、人間怪異の相を有するもの、宜しく支那に行くべしだ。  
 此の肖像は南京城外の鐘山といふ所にある肖像の寫しで、何か必ず據りどころあるものに違ひない、  
 唇の突出したる所は丸で化物で、其の鼻下長といふものは、大概な連中は及ばない、宜しく之を鼻  
 下長の太祖と呼ぶべしだ。  
 朱元璋が天下を取つたは我が後村上天皇の正平十二年で、日本では楠正儀の出で居る時代である、  
 今を距る實に五百三十九年前、在位三十一年、壽七十一にして死す、屍を南京城外の孝陵に葬る、  
 後二百五十年にして清朝に亡ぼされ、其の墓今は荒れ果て、雉子や兎の棲家となる、人事興亡亦果な  
 い哉。

(四) 會計検査院長田尻稻次郎君



北雷博士と云へば、何人も法學博士田尻稻次郎君の事たるを知る、北雷は北夕立の雷  
 といふ譯でなく、衣物も何も着たなりと  
 いふ意味である。

博士の奇言奇行は本欄の盡くす所でない、然れど其の奇言奇行は一体和尚の奇言奇行と同じく、心裡透明、脱俗高遠、幾んど聖域に達し居るので、其の奇言奇行の裡、幾多の眞理、幾多の教訓、幾多の熱情を含んで居る、外冷かなる如きも、中炎々として性情の燃ゆるあり、古人も性は誠なりと言ひ、博士は此の誠を得、性を見るのである。

博士をして今少し學者ならざらざらめば、俗人ならしめば、大臣たるは勿論なれど、心  
 人物畫傳  
 七

事高遠に過ぎ、他と釣合取れず、俗物政治家と調子を合はする能はず、又博士の心中、大臣などの虚榮虚位を有せず遂に會計検査院にクスぼつて居る所以、併し博士の面目は官人生活にあらずして、教育方面にあり、如何に其の人を教ゆるの真摯にして熱誠なるよ、大學に出ても決して生徒より後れたることなく、夏はカーキ色のツメ襟で、生徒よりも必ず前に出て居る、是れは風雨天變をも厭はぬのだ、又生徒が既に卒業し、名譽ある學士となつても、博士の講義残りあれば、卒業後に尙盛夏の候をも厭はず、大學に出て講義するといふので、生徒はイヤ／＼ながらも先生の熱心に對し、出席するといふ工合。

博士は鹿兒島の人なり、然れど實際の生地は京都なり、山紫水明の境、此の哲人を出す、學者を出す、實に明治年間の珍なり、其の有益なる言行は本欄を以て限るを好まず、別に載録して自他研鑽、奮勉の資に充つ。

(五) 獨逸元帥ヘーゼラー伯

日本の乃木大將、獨逸のヘーゼラー元帥は、正に是れ東西軍人の好一對。



ヘーゼラー元帥は武骨一遍の人、所謂軍人中の軍人にて、平時には寧ろ無用の人、普佛戰爭後メッツの城守は最も重要の人を要し、ヘーゼラー元帥は新組織の第十六軍團長として、一八九〇年此の任を命ぜられた、當時は尙中將である、ヘーゼラー中將がメッツを守り、佛國境上を壓して居る間は、逆も佛國の復讐戦は出来ぬと、怨み骨隨に徹して居る流石の佛國人も匙を投げたこの事である。

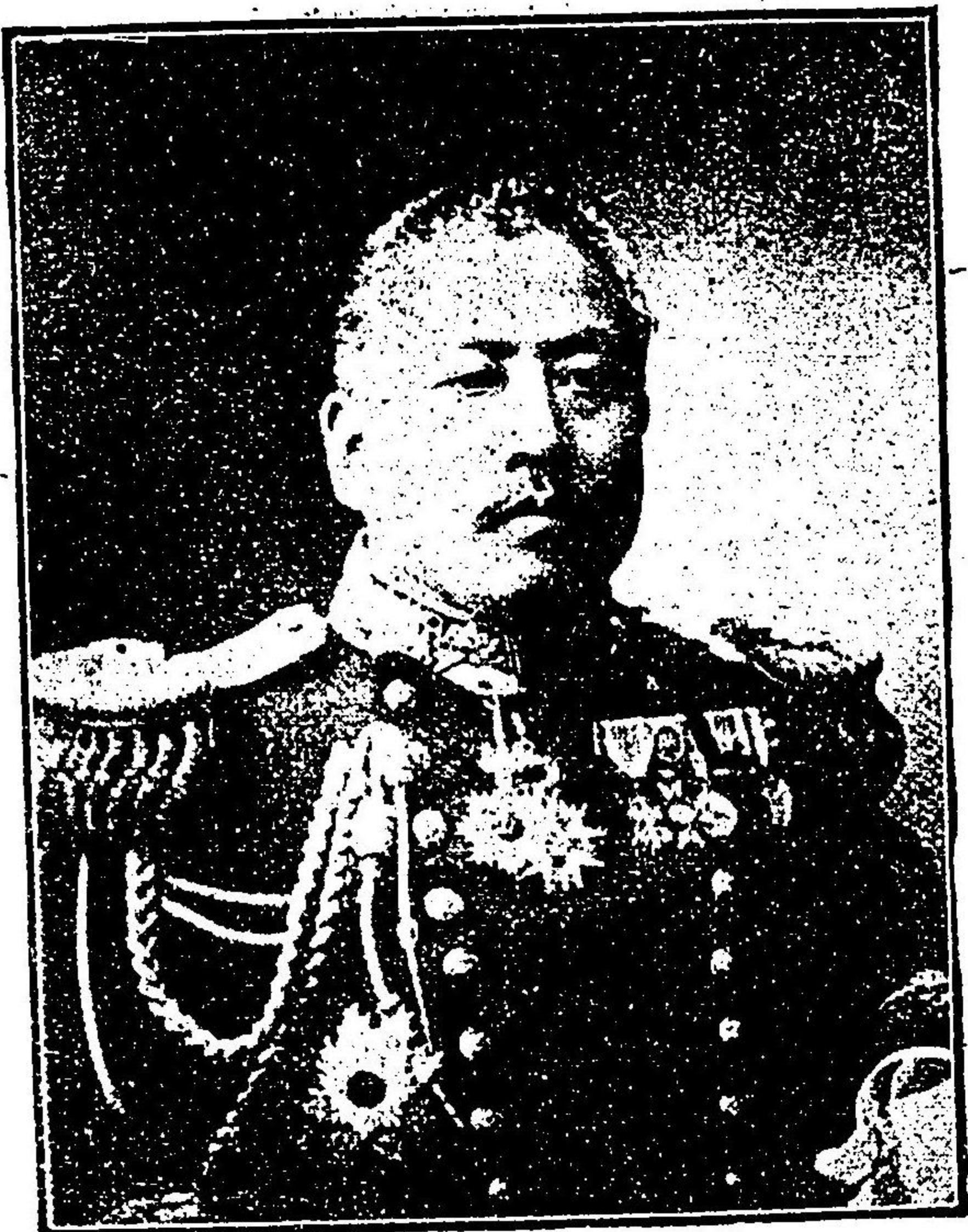
がら、軍人たるものは屍を戰場に曝らすを以て本義とせねばならぬといふので、獨身

生活を營んだ、其の家居も亦頗る質素で、家の中央に一箇の卓子、其の上に地圖を擴げ、壁間に二三英雄の肖像ある外、他に裝飾品とては何もない、其の代り馬には何時でも鞍置いて、深夜にも飛び出すといふ有様である、『戰闘準備』の四字、これぞ將軍座右の銘で、何事も此の寸法より割り出し來る、年末年頭に公暇あれば、己れの領地に歸り、小作人の田五兵衛どもを集め、土産物を配り、或は農作の話ども爲すを樂みとす、將軍は斯く無邪氣の半面を有すると同時に、半面は峻嚴にして犯すべからず、其の無將にして口元の緊りたる所は、故モルトケ元帥にも肖たり、平時の軍人、或は追従を習ひ、或は風采を主とし、人多くして勢を成す、此間に獨り將軍は軍人精神を擁護し、古武士の典型を守るを以て、時にハイカラ軍人に嫌忌せられ、或る場合には敬遠せらるゝの意味ありしか、或る年の大演習に、獨逸皇帝之が中止を命す、若し之を繼續するに於ては四十萬馬克（我が二十萬圓）の經費を要し、而も議會の協賛を経るの邊なかりしが、將軍は皇帝の命をも聽かず、演習は實戰の心得なかるべからず、經費の如きは臣自ら辨すべしと申出でしことは、有名な話なり、今や高齡に際し、現職を免せらる、其の際皇帝の優詔の如きは、尙日露戰爭前休職にありし乃木大將が、開戦と同時に直に重用せられしと同じ、獨逸皇帝の優詔に云く。

國家有事の日は直に起ちて朕の軍を率ゐる朕と國家とを護れよ

### (六) 海軍大臣齋藤實氏

成功といふ語は近時の流行語である、昔は少年が二三人も集まると、武士道を談じたものだが、今の少年は寄ると隙ると成功を語る、思潮の變化は争はれぬものである、



即ち君が紛ふ方なき一本道黨の告白である。

人物畫傳

同じ成功でも、野中の一本道を傍目も觸らずに徑行するものもある、此處の谷川、彼處の山間、羊腸たる道を、くねりくねり行くのもある、今の海軍大臣齋藤實君の如きは、其一本道黨の成功者であらう、君が人の其成功を問ふに答へて、予は只予の従事せる道に向ひて、常に予が全力を傾注したりこのみ、と言ひしが如きは、

勤人として給仕ほど下級はない、海軍大臣として一世に時めく君は、伊澤縣給仕の出身である、給仕蓋し悔るべからず、當時伊澤縣の給仕には二人の英物があつた、その一人は滿鐵總裁として、飛ぶ鳥も落さんばかりの後藤新平君で、他の一人は即ち君である、而も篤厚忠實なる齋藤給仕は、倜儻不羈なる後藤給仕の爲に、常に苛ぢめられて居た、此二人の給仕が、三十年後に今日あらんとは、誰も想及せざりし事ならん、其の後君は東京に出で、海軍兵學寮に入學したが、當時我が國、海軍草創の際とて、白髮銀の如き人、乳臭小兒の如き人、教場に入り亂れて頗る奇觀を呈した、君は亦乳臭派の一人であつたが、其の成績は優に老士官を凌いだのである、明治十七年海軍中尉に任せられたのが君の人並に世の中に出た初めで、間もなく擢んでられて米國留學を命ぜられ、十九年歸朝後は海軍參謀本部出仕となり、高雄砲術長となり、常備艦隊參謀となり、侍從武官となり、富士回航委員となり、秋津洲艦長となり、嚴島艦長となり、一段又一段、遂に三十年の十二月に至つて海軍次官に昇り、日露の戦役を経て、三十九年一月西園寺内閣の成立に際し、入て海相の位置を贏ち得た、運命もあらう、がその運命の牡丹餅、それは棚から落ちて來るものではない。

(七) レオ、トルストイ伯



此の頃病氣危篤との報傳はりしトルストイ伯は、抑如何なる人ぞ、之を知るものは自由思想を有するものなり、否或る意味に於ては病的思想を有するものなり。

伯はヤスナヤ、ポリヤナの田園に隱棲して、自ら耕し、自ら衣食せるものなり、伯が戎衣を脱ぎ、劍を擲つて、自由と平和との爲に、舌を爛らし、筆を秃にすること五十年、而して爛々たる其の眼、鬚髮たる其の髯、老齡且八十に近く、其の勢力あるが如く、勢力なきが如き所、丸で我が板垣伯に似たり、板垣伯を信じて自由宗を奉せしものあるが如くトルスト

イ宗の信者も、亦甚だ多く、遠く我が日本より順禮したるものもある。

伯の主義は幾何の感化力を有するか、其の家庭に於て、伯は農夫の賤衣を纏ひ、跣足なるに反し、夫人の生活は善美を極め、伯が社會主義の理想を實行すべく、自家所有の土地を農民に分與せんとせし時、陰に廻りて資産の散逸を禦ぎし者は夫人なり、伯が其の著作を公刊するに方つて、密かに其の版權を收め置きたるも、亦夫人なり、子女八人のうち、一女を除くの外、悉く伯の主義には正反對の者なり、是れを之れ世間は絶対自由主義の結果、其の夫人及び子女をも強ゆる能はざるに因るこいふ。伯は蓋し露國の産なり、露國に庸無黨若くは社會主義者を特産する如く、伯も亦露國政體の特産する所なり、之を直に日本に移し、其の思想を鼓吹せんこと、病を診ずして藥を與ふるに似たり、察せざるべけんや。

### (八) 男爵清浦奎吾君

明治卅一年、山縣系の政治界にては、重鎮白根專一君を失へり、而して其後同系の政治的側面を代表しつゝあるは、男爵清浦奎吾君である、彼今こそ男爵たれ、元



は熊本田舎某寺の小僧である、然れど俊髦群を抜き、年十七、出で廣瀬淡窓翁の咸宜園に學び、塾中の都講に擧げられた、都講は塾生の首領で、將來有望を以て目せらるゝのである、明治五年埼玉縣にて小學教員を勤め、後學務課に奉職し、月給七八圓を貰つたのが、抑も彼の官人たるの始めで、爾後司法省に入り、内務省に入り、警保局長、司法次官を経て、躍司法大臣となり、後貴族院議員として

研究会を率ひ、三十六年桂氏の内閣を組織するに當り、又入つて法相兼農相となりしのみならず、桂内閣の智囊、小山縣内閣の柱石を以て推され、三十年の官人的經歷は、こゝに一回の圓輪を廻轉し了つた、され、彼れは望多き將來を有する一個老練の政治家である、彼れの今閑雲野鶴を友とするは、伊藤系の竊に恐れを懐く所であらう。

彼れ頭腦明晰、辯説暢達、態度亦悠揚なり、明治六年、第一第二大學區の聯合會が、東京舊聖堂に開かれたことがある、此の際三番席を占めた、埼玉縣選出の一學務委員の辯説は、優に議堂を壓し、三番席なる語は、當時夫の學務委員を呼ぶの代名詞となつた位である、この三番席こそ、紛ふ方なき彼れであつた、又彼れは初期議會に政府委員として議場に立つたが、さしほに喧しかりし集會政社法改正案提出者の一人たる、故末廣重恭氏をして、現行法維持の爲に言説を費したる彼の説明に對して、満足の意を表せしめたるが如き、其辯説には一種の魔力を有して居る、年方に五十七、請ふ加餐せよ。

(九) 新聞王ハースト氏

米國は新人物、成功の人物を出すことが多い、新聞王ハースト氏の如きも其の一人である。



人民に對し、其の主義政見を語りつゝあると揚言してゐる、其の四天王の隨一たる主



筆に、大統領と同じ額の年俸を與ふるを見ても、如何に氏が大手腕家であるかと知れやう、新聞王の稱、必ずしも借とすべからず。

ブライアン氏が第二回大統領候補者たりし時分より、氏も亦政治的野心を起し、當時は氏の新聞を以て、一意ブライアン氏を助けしめたが、今や却て自から大統領候補者たらんとし、爲に同黨内のブライアン氏に少からざる影響を與へた、先に紐育市長をマックレランと争ひて失敗し、更に其の後紐育州知事をヒュースと争ひて、これ又敗北した、されば大統領候補者としては一層奮闘すべく、彼が前途は大に着目に値すべし、人格品位の點に至ては、或は難すべきものなきに非ざるも、其の堅忍力行と、其の伎倆の非凡とは確かに新興國に於ける現代の一大人物たるを失はず、長顔明眸、英氣颯爽たる彼は、齡方に四十四。

(十) 日本銀行副總裁 正金銀行頭取 高橋是清君

十八箇月間に十億七千五百萬圓の外債を募集した、經濟的戦場の勇士たる君に接するもの、誰か當年亞米利加に於ける、一介



落魄の書生たる君を想ふものぞ、君は末松謙澄君と宿を同うし、歐米の新聞雜誌を讀んで其の旨を説き、謙澄君筆を執つて之を文とし、若干の原稿料を得て、互に未來の運命を卜した時代もあつた、一たび大學南校助教に擧げられながら、幾干もなく其の大學に自ら一學生となり嘗ては門弟たりし人々と、机を并べた時代もある、文部省の備外國人モーレーより外國特許に關する説話を聴き、我國

二〇  
繹繹の身とならんとしたる事もある、要するに君の今日に至る経歴は多難多艱、頗る小説的の處があるが、君の性格に特に認むべきは、身を挺して難境に進み、一刀兩断の處置を爲すに在ると共に、危然たる大漢、傲然として人に對するのが千金の價打であらう、君今や我が國に於ける一大銀行に兩脚を置き、居然として金融界の重鎮たり、人の君を評して疾風といひ、洪水と稱する、亦以なきにあらず。

### (十一) 獨逸皇帝ウヰルヘルム二世陛下

『朕が上には全能の神の外何者も在らず』と宣ひて、全世界の視線を一身に引き給へ



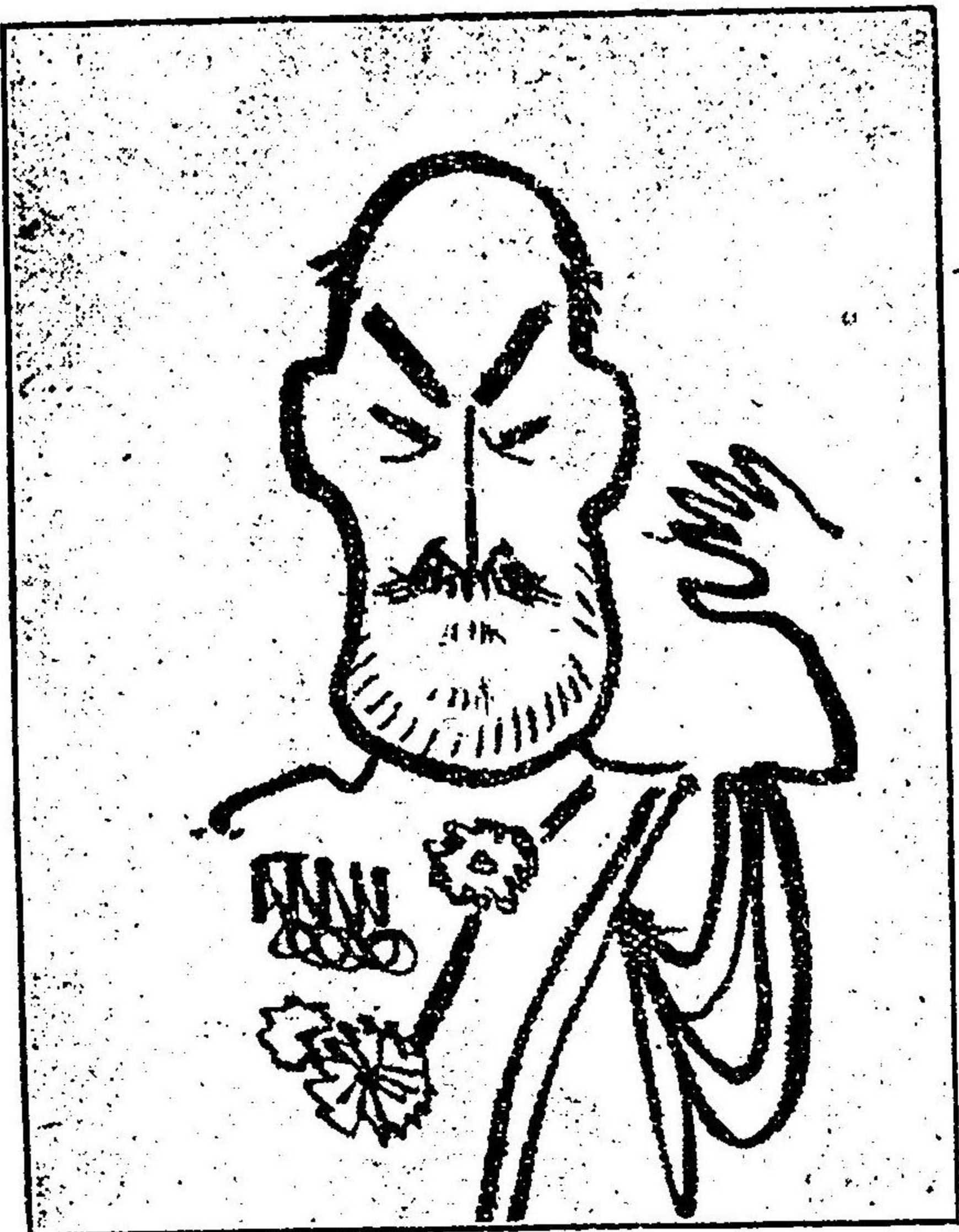
るカイゼル、ウヰルヘルム陛下は、實に四十八年前の今月今日(一月廿七日)に生れ給ふたのである。

即ち今日は陛下の御誕辰で、獨逸では盛に祝ひ、又全世界に擴がれる陛下の臣民も、陛下の與國民も、此の盛辰を祝ふのである、陛下は御年僅に四十八、卓絶の御才智と御聰明とは、人をして端倪に遑あらずらじめ、世界をして時に大に賑かこむ、或るもの曰く『此の皇帝の存在する間は新聞の種に窮する事なし、ウヰルヘルム二世陛下の一舉手一投足、否一呼吸は皆新聞種として面白きものなればなり』、

實に然り、其の通りで 東洋にまでイタづらを爲給ひ、誠に油断のならぬ御方である、其れも其の筈、左しにも頑強無比、世に鐵血宰相の名を取りたる老ビスマルクをも即位匆々、一本の小指にて刎ね除け給ふ程の御手並あればなり、陛下の位に即き給ひしは今より十九前前、御年僅に二十九の時にて、父君は踐祚四箇月にて崩じ給ひ、謂はゞ九十の老帝ウキルヘルム一世陛下より、直に獨逸帝國を譲り受け給ひし様なもの、而も御手並の鋭さは、第一に露國皇帝を訪ひ、次第に歐洲各帝王を訪ひ給ふ、是等の事皆ビスマルクの危む所で、次第に御仲悪く、遂に迫つて詰腹を切らせ給ふ、比公の遺憾謂ふべく、然れど皇帝が『朕は自ら朕の宰相たらざるべからず』と宣ふを知らば、比公如何に頑強るも仕方なきにあらずや。

皇室は至極御圓滿、ウキクトリア皇后陛下との御間には、既に六皇子一皇女在りまして、皇太子御結婚後、既に一皇孫をも擧げ給ふ、蘇斯の御慶出たきこと限りなく、茲に陛下の萬壽を祝し奉つる。

(十二) 陸軍大臣寺内正毅君



學者は學者らしく、詩人は詩人らしく、女は女らしい所に旨味が存する、この見地よりすれば、君の如きは軍人らしい軍人ではない、君は陣頭に立て三軍を叱咤する勇將に在らず、謀を帷幄の裡に廻らす謀將にも在らず、然れども日清戦争起るや、野戦運輸通信部長として二十萬の大軍を海外に送り、日露戦端を開くや、陸軍大臣として百萬の兵を動かした手腕に顧みれば、彼は決して凡物ではない、武辨一介の軍人仲間には喜ばれまいが、其喜ばれぬ所に彼の長所は發揮されて居る時として小刀に陥る弊はありとも、軍政

こいふ細工にかけては、兒玉大將歿後恐らく君の右に出るものはなからう。

君の性格既に此の如し、士官學校長といひ、教育總監といひ、陸軍次官といひ、參謀次長といひ、事務的方面にかけては、何れも相應の成功をして居るが、實戦に於けるの君は、只一の記念を遺すの外は、殆んど無經歷といつてよい、記念とは何ぞ、明治十年西南役の當時、君は二十六七の若年士官、中隊長として出征したが、兩三日で直ぐ右の手を撃たれ、戦争の終る比まで入院して居つた、爾來右の手が利かず、陛下の御前に於ても、特に左手の敬禮を許されてゐる。

君は頭に特徴がある、禿の三角頭といへば、直に君を聯想する、本年度の豫算編成で、阪谷藏相と大衝突をしたのは、其三角頭の仕業である、一時は此が爲に内閣の瓦解をさへ傳へられたが、問もなく調和が出来たは、その禿頭の滑りである、君の人物が巧に其の標榜する頭に於て説明せられて居るのは頗る妙でないか、畫傳子は君に軍人らしき旨味を求めず、益頭で働く事務家たらんことを望むのである。

(十三) 理學博士山川健次郎君

帝國大學、名を聞けば立派なり、赤門の學府、外見は誠に美事なり、一と舞臺廻はさば、尻の穴の隘まい薄士、馬鹿士が、曲



學阿世の暗闘場、其の暗闘が菊池大麓氏の總長時代に於て殆んど極に達し、所謂菊池の縁者最負となつた、菊池氏の後を受けて大學總長となつたは山川健次郎君である、在職四年、大學總長の辭職に破天荒の例を遺したも君である、君は前總長菊池氏に比すれば才氣に劣り、後總長濱尾氏に比すれば寛厚の點に於て及ばず之と同時に君は菊池氏よりは遙に重厚で濱尾氏よりは遙に剛直である、菊池氏を

文部に送つて、新に君を理科より迎へた當時の角帽先生は、大學創始以來の良總長

二六  
として并舞雀躍し、人格に於ても前後總長中第一等にして、久しく官學の弊竇に、痛嘆せる學界の有志は、大學の革新以て待つべしと愁眉を開いたが、只私に此に由つて子ボチズム倒るべしと憂へた連中も少くはなかつたらしい。

果して君は良總長であつた、大學獨立の聲は即ち君の時代に呱呱の聲を上げたのである、而して君は戸水博士休職事件といふ、新生兒に取ての一大難病の爲に、潔よく其の身を犠牲にしてしまつた、君の辭職は決して無益ではないが、怨を言へば前總長が文部大臣となつた如く、後總長が嘗て又總長から文部大臣となつた如く、君をして文相の椅子に倚らしめ、一たび其の剛直の手腕を振はしたかつたのである。

君は會津の士で、資質風采共に古武士の型がある、君の兄には故山川將軍あり、其の姉には山川二葉子あり、山川操子あり、其の妹には大山夫人捨松子あり、何れも當代の名流たり、蓋し盤梯の山秀、日橋の川靈、精を君が一門に萃めしものか、かう考へて來ると山川の姓も又偶然ではないやうに思はれる、君今や安川氏に聘せられて、其の高等工業學校に長たらんとす、九州の育英蓋し是より大に見るべきものあらん。

(十四) 米國大統領ローズヴェルト氏  
餘り知れ過ぎたる人物、今更ら少々陳腐なれど、尙くも人物畫傳をものするに於て、



ち彼れであること云つた事がある、其の品性、其の氣宇、其の才幹、其の技倆、斯る稀代の偉人を現代に下す、天の攝理、實に不思議とすべきでないか。

大人物の眞價は時と處を問はずして常にあるものより認めらる、米西戦争前海軍次官として作戦の樞機に参したる彼れは、其の戦争中『荒乗り』と稱せられたる義勇騎兵を率ゐて、玖巴のサン、ジュアンの險を陥れた彼れであつた、其軍にかけても専門の武將に引けを取らぬ彼れは、即ち正義、人道の戦士として知らる彼れである、紐育州知事として幾多の積弊を打破し、地方行政官の典型と稱せられたる彼れは、即ち推されて副統領となり、マツキンレー大統領の兇變に遭ふや、直に大統領となり、今日理想の大統領と稱せらるる彼れである、千九百年の改選に何の苦もなく再選せられたるは寧ろ當然である、年方に五十、尙多くの未來を有して居る。

彼れはハーヴァード大學の出身で、エール、コロンビア等諸大學の名譽大博士を有し、學者としても決して人後に落つるものではない、殊に其の文才は雄大なる思想を綴るに適し、其毎年發表する教書の如きは、堂々乎として天下の大文章と稱せられて居る、著書も少からず『亞米利加人の思想』、『奮闘的生涯』等は、最も彼れの思想を見るに足る。

彼れ平生オリバー、クロムウエルに私淑して居るさうなが、クロムウエルも後世に斯る偉大なる好知己を得たのを喜んで居るだらう、昨年来例の桑港學童問題に於ける、彼れの高明正大なる處置振りは世界の均しく認むる所、彼れありて幸ひに未だ全く『亞米利加魂』死せず、米國に彼れの現存するは、以て米人の感謝に値すべく、彼れの現代に存するは、以て現代の誇とすべし。

(十五) 工學博士高峰讓吉君

タカチアスターゼと言へば何人も知らぬものはない、タカチアスターゼが世界に廣ま



れると共に、高峰博士の名も亦世界に治し、博士が酒類醸造の改良に心を潜め、麥の皮から取る麴を以て、アルコール醸造の原料とする一大發明を携へて渡米したの明治廿三年である、爾後博士は茫茫たる他國の山野を友として、獨力奮闘、高峰醸造會社を設立したが、剛らざりき三千三百萬弗の大資本を有するアルコール、トラスト會社の爲に大妨害を蒙り、株主職工等よりは生命を絶つと迄迫られ試験工場は火災に罹りて全部を失ひ、加之博士は肝臟病を發して半歳に彌り、數年の苦心一朝にして水泡に歸するの大逆境

に陥つたが、これを却て博士をして今日あらじめた基で、博士は四面楚歌の間に立ちつゝ幾干もなく其の寂寞たる實驗室の中より、タカチアスターゼの發明を爲して、世界の醫學并に藥學社會を驚かした、これより博士の名聲隆々として米國を歴すると共に、博士の實驗室中よりは、更に外科手術に必要なるアドレナリンの神藥を出し、世界の醫學社會をして再び吃驚せしめたのである。

博士今や巨萬の富を重ね、紐育市に堂々たる私設實驗所を有し、近郊メーリー、ウオールドには日本風の別荘を設け、歐米の交際社會より尊敬を拂はれて居る、夫人カロリンは南北戦争の老將軍ヒッチ大佐の二女で、内助の功ある賢婦人、二男あり、長を讓吉氏といひ、紐育高等中學の級頭として、高峰氏後ありと噂されて居る、博士五十三、髪は霜の如しと雖も、顔は渥丹の如く、元氣甚だ盛んである。

(十六) 學習院女學部長下田歌子女史



婦人のエライと云ふ標準は、いかなる點から割出すべきかは一寸疑問であるが、其の地位、其の學問、其の才識、其の風姿の點から、兎に角我國でエライ婦人と云へば、先づ指を下田歌子女史に屈する、女史は舊美濃岩村藩の醫學平尾録藏氏の女おせきさんと稱ばれて居たが、子供の中から學問好きで、二三日本を讀み字を書くことをしなかつた爲に病氣になつた位で、七歳にして能く歌を詠んだと云ふから、確に一種の天才であつたに相違ない。

八田翁に見込まれ、十五の年に八田翁の勸めによつて宮内省に出仕することとなつた、

之が抑も出世の初めで、是れより英、佛學を研究し、才華は益現れ、畏くも 皇后陛下のお相手を奉つり、殊の外の御寵遇を辱うし、特に歌子の名を賜はるに至つたのである。  
 明治十二年女史が廿六の時、許嫁であつた岩村藩の劍客下田猛雄氏と結婚し、宮内省を辭し、桃天家塾と云ふのを開いて和歌などを教へて居たが、其家庭を造ること僅に四年にして、不幸良人猛雄氏の死に遭ひ、又亦宮内省出仕を命ぜられ、次で命婦となり、華族女學校の創立に際し、擢んでられて其の學監となつた、其の良人への貞順及び病氣看護の美談など傳ふべきものが多い、後二十六年女子教育取調の爲め英國に遊び、緋の袴で英女皇に謁見し、其の態度の見事なりしことなど世間に傳はる、二十八年歸朝し以て今日に至つたのである。  
 現に學習院女學部長の外、常宮周宮兩内親王殿下の御用掛で、大日本女學會會長、實踐女學校長である、婦孺妬まれ易く、女史に就ても各種の風評を傳ふるものあれど、多くは取るに足らず、和歌はお手のもので、其の文章は實に天品と云つてよい、世或は明治の紫式部と稱するが、其の實紫式部以上かも知れぬ、今年五十四。

(十七) 東京文科大學教官コイベル博士

理窟を擅廻す學者、詩歌を捻練る文人は、雲の如くに輩出したれども、さて品性の崇高、以て一世の師表たるべき哲人、門下生を溶鑄陶冶し得るの碩學高德に至りては、トント拂底の世の中に、こは珍之又珍、東京帝國大學の御雇教師中に、「先生は人間にあらず」と神の如くに敬慕されつゝある白髮童顔の一翁あり、文科大學哲學科教師ラツフェール、フオン、コイベル博士、すなはち是れ。



來りし一人の甥と與に居住し、大學の講義に行く外は交友を求めず、旅行を爲さず、



唯垂籠めて書籍と親むのみ、而して人に語りて曰く『日本程好き國はなし』と、抱への車夫は有れども雨天または疲勞せざる限り、俾に乗ることなし、車夫は多く博士の後方より隨從するのみ、時に乗車するも、走るには及ばずとて、疾走するを制す、車夫感泣常に人に語りて『旦那は何うしても人間ぢや無一ア』と。

曾て外國雇教師聯合して物價騰貴を名とし、政府に増俸を請はんことを圖り、博士を訪ひしに、博士曰く『余は別に現在の給料にて敢て不足を感せず、衣食して尙餘あり、余は日本の學生が余の講義を聴き呉れるを以て無上の名譽、無上の報酬と思ひ居れば、何日迄も唯此の儘にてあらんことを望む』と、何ぞ其れ心情の純潔なる。

博士の試験を行ふや、問題を書終れば、教場を出で、自分の控室に去るか、或は庭園に出で、散歩するを常とす、而も試験場内、他學校に屢次行はると聞く下劣の行動を敢てする學生一人もなし、博士の徳化や思ふべし、博士は常に哲學、美學、宗教の諸學科に精通せるのみならず、音樂の嗜あり而して其嗜や下手の横笛の道樂にあらず、博士がピアノを弾するや一種獨特の妙音を發す、東都春秋の音樂會に、内外貴紳淑女の嘆賞して息まざるは、到底學んで得べからざるものあればなり、蓋し此の人間を超越せる人間にして、初めて所謂入神の域に到ることを得たるならん乎。

博士の生國は波蘭(國籍は露國にあり)、長じて獨逸に遊學し、ハイデルベルヒ大學の出身なり、齡古稀に近きも妻を迎へず、唯一人の甥と車夫とは其の家族。

### (十八) 一代華族主張の板垣退助伯

板垣死すとも自由は死せず、伯爵板垣退助君の精神は長へに此の一語に遺れり、君今や耳順を超ゆ、健在なりといへども殘命



若干ぞ、されども現在政治上に死して、纔に社會改良といふ女性的事業を以てその一代を終らんとする君が、此の一語の爲に世人の記憶より去らざる如く、君の形骸土に化した後も、君は萬年に其精神の壽命を保つであらう、嘗て伊藤侯が故陸奥伯の獻策を入れて、舊自由黨と提携せんとするに當り、先づ君に會して曰く、足下は國會開設の主唱者なり、余は憲法の立案者なり、立憲政治の責任は繁

て足下と予とに在り、こは當時伊藤侯が君を欺くの甘言なりしやを知るべからずと

雖も、其言には千古不拔の精神が籠つて居る、日本の國民は、伊藤侯が策略より割出せる、この一時  
的の言を以て、誠心誠意、永久に傳へずばなるまい。

君が伊藤侯の如く順境の成功を爲さず、又大隈伯の如く逆境の成功あらざるは、君の人格があまりに  
正直で、あまりに謹嚴なる故である、君には霸氣あり、然れども其の霸氣は隈伯の如き霸氣に非ずし  
て、義人的の霸氣なり、君には潤達の資あり然れども其の潤達は、藤侯の如き潤達にあらずして、志  
士の潤達なり、而もこの性質ありてこそ、能く自由民権の説を成立して、立憲政治の口火を切つた  
所以である、國民は君が憲政の主唱者として自から責任の地位に立ち、憲政有終の美を濟すを望むこ  
ころから、義人の末路甚だ振はずの感を懐くが、一は世が君をして振はざるの餘儀なくせしめたので  
ある、君頃者一代華族制を主張し、嗣子と共に出願に及んだ、君の眞意は辭爵にあるのだが、辭爵は  
御聽許にならぬので、一代華族制の先鞭を附けて、人をして之に倣はしめんとの意である、ここに至  
て半ごろ死した君は再び復活した、不幸にして憲政有終の美は遂に君の濟す所ではなかつたが、板垣  
伯の一代は、ここに於て能く始有り、終有りといふことが出来やう。



### (十九) 京都大學總長木下廣次君

東に山川あり、西に木下ありとて、一時大學總長の聯璧と稱し、一は質實を以て聞え、  
一は氣格を以て鳴る、世人此の兩總長を

得、大に心を強うした。

然るに山川總長は曩に其の職を辭し、木  
下總長は亦病氣の故を以て其の職を辭せ  
んとすと傳ふ、左れど吾人の聞く所を以  
てすれば、木下氏の病も漸次輕快に赴き、  
辭職の説の如きは全くの無根なりと、是  
れ大に喜ぶべし、畢竟其の人を惜むの餘  
り、病氣も重く傳へられ、果ては辭職の  
説も傳はりしならんか、氏は肥後木下韮  
村先生の長子なり、學者二代なことは世  
に傳ふる所なるが、氏は名門に生れ、而も秀才絶倫、夙に闔藩に推され、明治三年貢

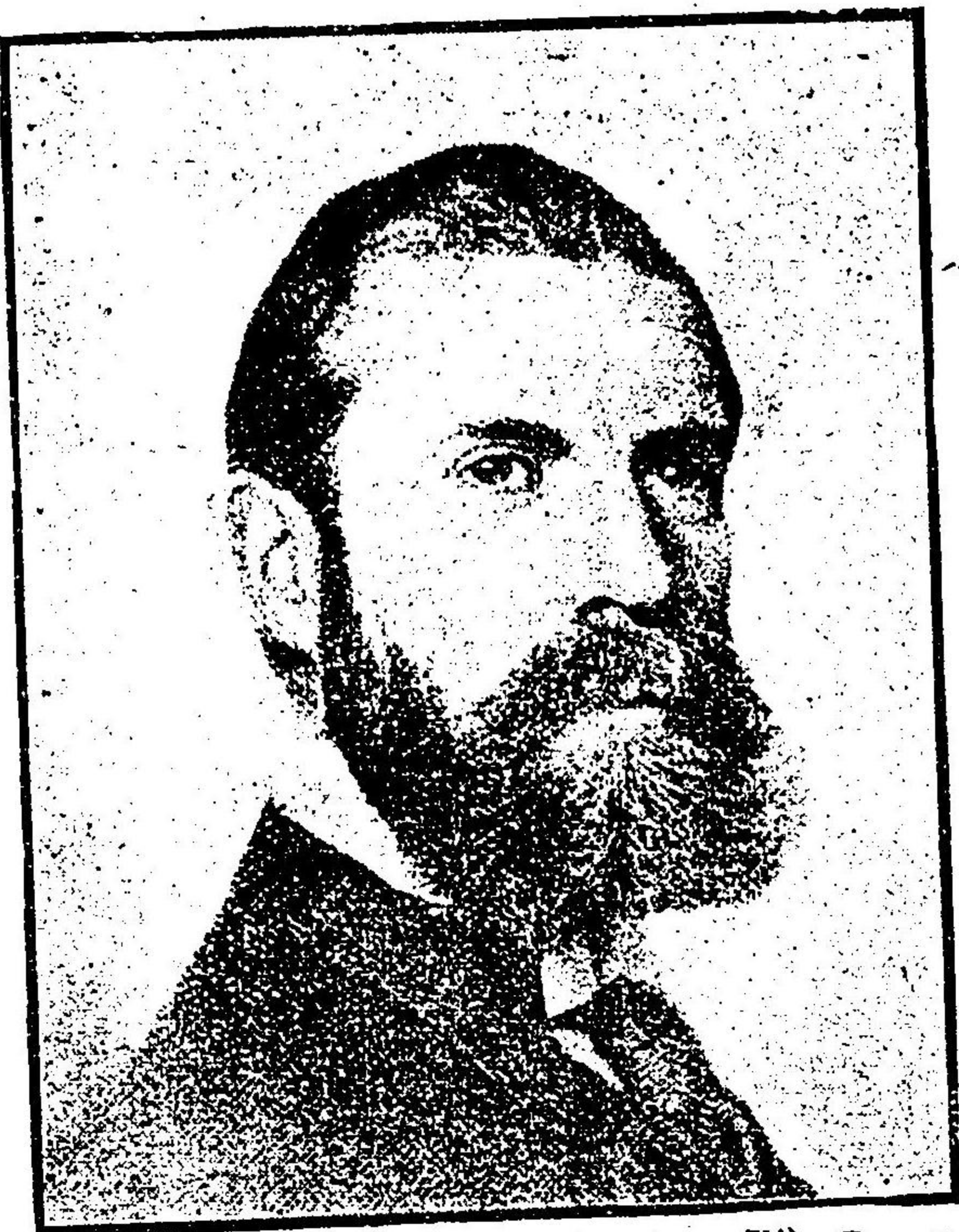
進生として大學南校に入る、八年拔擢せられて佛國に留學し、歸後大學に教鞭を取り、第一高等學校長となるに及んで、校紀大に振ひ、一新紀元を爲す、氏の京都大學總長となるや、亦一種の校風をもち、學生を自するに紳士を以てし、自信自重の念を厚からしむ、京都大學の毅然として、一種の風氣あるは、全く氏の教化なり。

氏は武士道を唱説すること多く、肥後神風連の如きは、氏の口を極めて稱揚する所なり、神風連、識足らず、精神餘りあり、遂に暴發して盡く自刃す、全く武士道の變的結晶なり、氏は學問あり、見識あり、氣骨あり、若し評し得べくんば洋製神風黨か。

今文部樞要の地にある澤柳次官も、福原局長も、皆木下氏第一高等中學校長たりし時の學生なり、氏の門、人物を出す多く、教育界に於ける全く現時の耆宿なり、精神的人物の少き今日、偏に加養自重を望む。

(二十) 紐育州知事ヒュース氏

文豪サツカレー曰く「人には信任状を額に着くるものあり」と、紐育州新知事チャール



ス、イヴァンス、ヒュース氏は、乃ち其の一人にて、髯ムシヤクシヤなれど、一見玲瓏透徹の才を見、鼻高く唇出で、自から戰士の相を現す、彼れの鼠色なる眼は爛々として燃ゆるが如く、一たび演壇に立つや、精氣人を壓するものあり、彼れは確に亞米利加現代の一人物である。

彼は千八百六十二年四月十一日紐育州のグレンス、フォールスに生る、父は牧師なり、十九ブラウン大學を出で、後三年にしてコロンビヤ法律學校を卒業し、在

校中毎に特待生たりき、業を卒へて紐育州デリーのデラウエア専門學校、及びコーチ

四〇

ル大學法學部、及び紐育法律學校の教授又は講師となり、其の間又紐育市に法律事務所を開始せり、彼が最も其の伎倆を發揮したるは、紐育検事總長より託せられて、瓦斯トラストの大私曲を摘發したること、州上院の調査委員より特に選ばれて、エクキテール生命保險會社の大陰惡を調査し、起訴するの任に當りし事にて、其の精力と眼識の絶倫にして、剛直不撓の精神に充てるは、敵も味方も舌を捲て感歎せし所なり、之に由て彼れの名聲更に海外まで轟き渡りぬ、思ふにローズヴェルト氏がトラスト征伐を斷行するに當つては、彼れの如き手腕家の調査に待つ所蓋し大なるべし。

紐育州知事の職は、後來大統領の候補者に進むべき一階段として、最も重要視せらる、然るに彼れは其の勁敵たる新聞王ハーストと戦うて之に勝てり、ハースト亦成功の一人たりと雖も、政敵非常に多く、其の人格の比較に於て、彼は及第したり、彼今年四十六、前途頗る有望なり、其の候補を争ふ時彼れは日の出より就寢まで、一日十二回の演説を爲せしことあり、又一夜に六回も續けたる事あり、其の精力以て知るべく、紐育州知事に當選せるも偶然にあらず。

(二十一) 内務大臣原敬君



智者か、才子か、策士か、變通子か、此の數者の固形物は内務大臣原敬君であらう。君は舊南部藩の出身で、少小より秀才を以て目せられた、司法省法學校では、賄征伐の隊長で、遂に中途退學した、此數奇なる東北の一秀才は、身を新聞記者の仲間に入りて、報知新聞に入りて、矢野文雄氏の節制を受けた、其他位も低くして、犬養、尾崎氏等の下風に立つた位である、然るに君の機鋒と變通の才は此の時を以て顯れ、一方に矢野氏の統御を甘んせざると同時に、一方に藩閥との縁故を結んだ、即ち當時新聞條例立案者として自由

主義者より敬視せられし、例の渡邊洪基氏に随つて東北を巡遊した、又藩閥政府の機關

として、隠れなき大東日報に主筆となり、明治十七年井上伯の全權大使として朝鮮に赴くや、君亦大東日報通信員として長崎に顯れた、芋は芋の蔓に由りて成長する如く、君も亦芋蔓を辿るの一人となつた、其の芋は薩摩芋でなくつて、長州芋、即ち井上伯の下蔓を辿つたのである、是れより官海に浮び出で、陸奥伯の知遇を得、大刺刀の下の小刺刀として外務省に幅を利かした。

政友會に入つては策士を以て目せられ、星時代には頭も上らなかつたが、西園寺總裁の下には、君は隠然たる副首領で、遂に内閣の一椅子をも占めた、政友會にての策士は、内閣にても策士である、若し内閣瓦解の端あらば内務の一角よりすべしとは、觀測者の言ふ所、併し君は智者なり、變通者なり、斯る危機に際しては、何とか變通の道も考ふべく、今日の處案、外堅固である、時に電車問題等を起して、あられもなき浮名を立つ、其の内務大臣としては、案外に翼を收む、其の慧巧なる所、智者か、才子か、策士か、變通子か、君も亦現代のメネックス。

(二十二) 熊澤蕃山



ここに掲げた肖像は、蕃山自ら畫いた者として、河州の某家に傳へて居る、鈍栗眼と

平たい鼻の醜男だが、自筆とあれば冗談でもあるまい、蕃山名は伯繼、字は了介、尾張の處士野尻藤兵衛一利の子で、十六歳岡山芳烈公に仕へて小姓となり、宿直の日には、人靜まるを待て廣庭に出で、間を突て刀槍を舞はし、時としては屋上を疾驅し、人をして天狗と思はしめたといふ。

り、明暦二年に至る七年間で、上に明主と言はれた芳烈公を戴いて、十年蘊蓄の經綸

を實行したが、喬木風多くして、彼は遂に骸骨を乞ひ、食邑番山村に三十九の若隠居となつた、三十九で既に隠居である、彼れが一藩の政權を握り、得意であつたのは三十九以前の事と知るべし、後二年出で京師に遊び、雲卿月客と交はりを親しくし、再び幕府の猜疑に遇うて、

この春は芳野の山の山もりと

なりてこそ知れ花の色香を

の一首に残して、大和の芳野山に隠れ、其の後明石に住し、郡山に移り、又下總古河に轉じ、貞享四年、年六十九、封事を幕府に上りて旨に忤ひ、古河の地に幽墊せられた以來、復びまた時事を言ず、笙を吹き、琵琶を弾じ、香を炫き、書を讀み、雲のかよるは月の爲め風の散らすは花のため、雲と風とのありてこそ、月と花とはたふとけれ」といふ光風露月の心事を謳て、窮厄の中悠々として除生を樂しんだ、後元祿四年八月十七日、年七十三、手にせる易解の筆を、擱いて、古河大堤蛙延寺畔、青苔冷かなる一墓石の下に、長への眠に就てしまつた。

(二十三)

怪商兩宮敬次郎君

維新前、雲助なるものが東海道の村驛に群集して、



難苦楚を嘗めた末、横濱に來り、一舉洋銀相場に巨利を博したかと思ふ間に、忽ち一敗して下宿屋營業となり、再び風雲に際會したは石油の取引、折角嵐も得た數萬金は、

伊太利人デロロと共に生絲種紙三十萬枚を買収して、伊國に渡つて一舉に失ひ、加之歸國の旅費さへなき迄の赤貧に陥りしが、轉々して麥粉製造に巨萬の富を累ね、東京市鐵管事件には、百餘萬圓の財産を差押へられ、剩さへ鐵窓呻吟の身となつた、近くは東京市街鐵道を創設して、三錢均一制を執つて動かす、殺氣滿々たる神田青年會館の株主總會に、猛然として會長席に立ち、虎視爛々として、雲の如き株主重役を睥睨し、二百萬市民の味方となつた時の英姿は、今尙人の眼底に存する。

彼れは株屋である、相場師である、決して紳士の典型にはまる着實の實業家とは言へない、然れども尋常の株屋相場師とは大に選を異にす、彼れ曰く「余は死生窮達の外に超然たり、何ぞ致富を以て最上の目的となさんや」と、死生の外に超然たるは知らず、彼れは確に窮達の外に超然たる現代の快男兒である、彼れの銀行論を聞け、曰く「我が國の銀行は金融機關といふよりも、寧ろ高利貸なり、今日の急務は銀行家の退治に在り」と、而も彼れは日夕銀行との取引を廢すべからざる地位に在るなり、彼れの面目此の一語に在て躍如たり。

雲助は婦人小兒に怖れられたりと雖も、その天真流露なる發快の氣は、大井川の涸れざると共に遺された、天下比々偽善と虚飾とを以て覆はるゝの時、君の如き大にして醇なる雲助ある、亦以て珍とすべし。

(二十四) 獨逸參謀總長モルトケ中將



ビニロー宰相早晩辭職すべく、其の後任者は現參謀總長モルトケ中將ならん、この歐洲電報は何處かに達したり、而も附言してモルトケ中將の宰相となるも、無能爲すなく、單にカイゼル陛下の高等ボーイたるに過ぎざるべしと、何ぞ其の評言の酷なるや。

評の當否は知らず、モルトケ中將とは何人ぞ、有名なる故モルトケ伯の甥にして當年五十九歳、其容貌は本寫眞の示す通りにして、一寸カイゼル陛下にも似、又我故川上天將にも似たり、中將にして參謀總長たるは餘程の力倆なくては叶は謀臣雲の如くである、イヤ多少缺けたに

ぬ、軍事に懸けては獨逸は世界一で、宿將謀臣雲の如くである、イヤ多少缺けたに

せよ、マンザラ力倆なくて獨逸の參謀總長たるには出來ぬ、左れば中將も鏘々たる武人に相違ない。中將が參謀總長に爲つたのは昨年一月の事で、其れまでは待從武官と、近衛第一師團長とを兼ねて居つた、中將が皇帝と仲善きことは、其の久しく待從武官を勤めて居ることも知らるゝが、今の如き聰明の陛下に懸つては、何人もボーイたらざれば其の職を全うする能はじ、ピエーロー宰相の御氣に入りなるも、其の應揚にして寛和的なるに由る、鐵血宰相の如きは直に衝突して、火花を散らすに至る、故に高等ボーイと評せらるゝも、強ち中將の人物を輕重するに足らぬ、唯從來は元帥か大將か參謀總長を勤めたりしを、中將にして一躍其の地位を占め、今度は大宰相に擬せらる、前途有望の政治家たるは知るべし、因にモルトケ伯が全盛で、普佛戦争を遣つたときは、中將はホヤ／＼の少尉殿であつた。

(二十五) 大藏大臣阪谷芳郎君



輪廓ばかりでは分らぬが、御本人は好男子で、才子で、二十二で大學卒業と來て居るから、理想通りの花婿、其處で濫譯家の選に中つたは尤も至極、人が羨むは羨む方の無理である。

文學士で出て、今は法學博士、其の間官吏生活と學校教師を兼ね、資性淡泊、書生氣の多い、而も事務の才に長じ、好箇の大藏官吏、其遂に大藏大臣となつたのは、時勢の運とは云へ、運を作り出したのは、君の手腕である、往年渡邊無邊が大藏大臣で、田尻博士が次官で、添田阪谷二氏が局長を勤めた時は、大藏省の花であつた、添田阪谷二氏は二秀才を以て目せられ、早や今日の大藏とならうとは思ひ懸



なかつたが、大臣も曾禰アラ助君となり、君の手腕に待つもの多く、鬼才田尻博士は居らず、頼才添田壽一氏は居らず、年は若くても順は君の大藏大臣たるべきに至つた、尤も君が骨つばき人間ならば、其迄に躰いたかも知れぬ、又大臣とならぬかも知れぬ、なつても無邊俠禪の如く、大衝突をするかも知れぬ、然れど其處は阪谷君なり、元來が養子男、人に可愛がられる所がある、又寺内君などの爲には便利に出来て居る、無理な陸軍擴張でも遣り易い、然るに意外にも阪谷君は怒つた、正直な丈怒つて見たが、仲裁が出て折衷的陸軍擴張となつた、是れが若し無邊俠禪なら斯う丸くは治まらぬ、俠禪も心機一轉の妙を得て居るけれど、其の前に失敗る、君は然うでない、怒つても憎まれぬ、元來が段違ひの相撲でもあらうが、同情が君の方に多いからである、斯て六億一千万圓てふ豫算は、君の手で議會に投げ出された。

議會も先づ無事である、閣員の折合も無事である、斯うして一二年も立てば、男爵は眼の前にチラついて居る、男の榮一君と同格になる、エライ立身である、縦に貫目の足らぬといふも、老人許り見慣れたからである、今日の時勢は二十代で總理大臣になつても好い、君の四十五にして大臣たるは當然である、君は岡山の人、有名なる朗廬翁の第四子、翁も亦後ありと謂ふべし。

(二十六)

西本願寺法主大谷光瑞君

先代の光尊法主は堪能なる歌人であつたが、現代の光瑞上人は有名な地理家である、



明敏なることは、光尊師も光瑞師も共に譲らぬが、歌人の資性濃厚なりしに反して、地理家は磊落不羈である、昔の生佛としては六條御殿の深窓に、花鳥風月を友としたことが似合はしかりし如く、今の生佛には歐亞大陸の山川を踏破して、精神界の地理の開拓に努めることが似合はしい、昨秋來裏方を伴うて南清地方を漫遊し、數日前には夫妻相携へて、清國皇帝に謁見し、今は早や歸途に就くこの事であるが、君の清國旅行はこれが二回

目で、卅二年中に一度同國を視察して歸朝し、同年の十二月に歐米漫遊の途に就き、

五二  
歸途中央亞細亞より印度大陸を巡つて佛蹟を探検した、宗内には彼此の評判もあるが、一般の信者は  
運如上人の再現ごまで崇めてゐる、旅行中に先代の光尊法主が遷化して、歸朝後直に官長の職を襲  
だに就ては、如何な旅行好きな御上人も、暫しは足を内地に駐めたが、その豪氣堂々たる英雄肌は、長  
く紫の法衣に緋の五條をかけて、開祖上人の前に跪くに堪へず、昨夏樺太の新領地を跋渉し、今亦南  
清の山河に無聲の看經を爲しつゝある、來年あたりは御門跡北極探検など、破天荒の宗令が出るか  
も知れぬ。

元來開山が肉食妻帯の宗風を開いたは、在家往生の先達を示したものの、その血脈相承たる御門跡様  
ごも言はるゝものが、花唇柳腰の尤物を蓄へて、公然内妾とするに於ては沙汰の限りであるが、百萬  
の信徒は寧ろ之を當然としてゐる、かういふ事情もあり、旁英雄色を好んでも致方ないが、光瑞法  
主は嚴正なる一夫一婦論者、イヤ實行者である、殊に其の裏方は宗祖の親慈上人が、七百年の昔に婿  
君となつた九條公僧家の令嬢、東宮妃殿下の姉君で、また男優りの女丈夫、樺太にも随ひ、清國にも  
伴はれ、崎嶇たる山路を晝夜馬で駆け通すといふ意氣、法主が運如上人の再現なら、裏方は玉日姫の  
後身かも知れん、畫傳子は別段關係はないが、この平民主義に一步を進めて、宗祖當時の草鞋竹杖で、  
全國を巡化したらば、噂ばかりでなく、門末は運如上人の再生と喜ぶであらう。

### (二十七) 工學博士下瀬雅允君

もし日露戦争に於ける我が陸海軍の戦勝が、今日の我が國運の發展に係る所多しとせ



ば、此の下瀬博士の力は、亦以て今日の  
我が國運に最も與る所多しと云はねばな  
らぬ、何となれば我が陸海軍の戦捷には、  
下瀬火薬の効力が至大の關係を有して居  
るからである、而して下瀬火薬の發明者  
は、即ち此の下瀬博士其の人であるから  
である。

博士は廣島市の人、安政七年鐵砲町に生  
れた、今日火薬の大發明をなすに至つた  
のは奇因縁である、子供の時は病身で、  
他の悪太郎もが盛に腕白をする間に、  
博士は常に一室に入つて小細工をして遊んで居たさうであるが、不思議な事には二三

歳の頃から、酒が乳よりも好きであつた云ふ、少年時代は藩の學問所で英學などを修めたが、明治十一年工部大學の入學試験を受けて、第三位で入學したのでも、其頃のよい事が知られる、大學に入つた事は入つたが、家貧うして度々學資に差支へ、非常に苦痛を嘗めたが、さる人の助力に依つて十七年卒業、工學士となつた、學生時代から非常な勉強家で、論文などは教授連を驚かした事は、度々であつたさうな。

世間の人は只博士を火藥發明家としてのみ知つて居るが、博士が學士となり、初めて印刷局に技師となつた時、紙幣の眞偽を容易に知る事の出来る、一種特殊の印刷インキを發明し、多大の利益を與へた、博士の發明の才は早く此時から顯はれたのであつた、二十年初めて海軍省技師となつたが、其の火藥の不完全なるを見てはデットして居れない、直に研究して、翌二十一年初めて一種の火藥を造つた、之が即ち今日英國のリダイト、米國のセラチン、佛國のメリニット以上の最好火藥たる下瀬火藥である。

三十年英米獨へ出張を命ぜられ、三十二年歸朝し、同時に工學博士を授與され、爾來下瀬火藥製造所長となり、日露戰爭によりて博士の偉大なる發明は、世界到る所に認められたのである、博士資性質朴謙遜、嘗て功を誇らず、人の其功を云ふものあれば、また試験中で、如何程の効力あるか判明しませぬと云ふを常として居るさうな、其の高風誠に欽すべきではないか、下瀬火藥の効力などは今更ら云はずもがな、もし戦時の有功者を賞するならば、第一番に先づかういふ人を賞すべきであらう、博士の如きは實に現代の一代産物である。

### (二十八) 田能村直入翁

翁初の名は松太、後に癡と更む、小虎散人、直入山樵、竺翁、青灣茶寮主人等の別號あり、豊後國直入郡竹田の寺町三宮傳右衛門の第三子、文化十一年甲戌二月十五



日を以て生れた、幼にして書才あり、始めて九歳、田能村竹田の門に入りて南嶺の正法を學ぶ、或る時人の需めによりて鐘馗の圖を描いたが、その貌極めて温恭なりければ、その人これを怪みて、俗間傳へたる所に異なるを詰つた、然るに翁襟を正して、均しく是れ終南山の進士、怒髮衝冠の狀を寫すとも、筆に生氣なくば鍾馗何ぞ怖るゝに足らん、之を寫して

温容の中に、二片の生氣侵すべからざるものあらば、以て百鬼を潛伏するに足るべし

と説いた、竹田紙門を隔てゝその所説を聴き、尋常人ならざるを知り、深く之を愛し、遂に養うて義子となし、こゝに始めて田能村氏を冒したのである。

翁、蛋蕨諸國を遊歴し、名山大川を跋渉し、文人墨客の間を周旋し、二十六歳にして浪華に入り、學を篠崎小竹に受け、武を大鹽後素の門に講じ、繪事益技に進み、京攝の間に往來して名聲漸く揚り明治の初め京都に卜居し、首唱して畫學校を創建し、推されて攝理兼教頭となりて、各宗派の畫學生徒を養成した、今の京都市立美術工藝學校は即ちその後身である、曾て皇室御用を以て拜寫したる絹本少からず、博覽會、共進會等の審査委員となり、又賞牌を受けたる事も亦枚舉に遑あらず。

翁平日衛生を重んじ、老後は粒食を斷ちて液體の滋養品に由れり、弱冠の頃、岡藩老職の讎に侍し、酩酊して敬禮を失せしかば、是れより深く自ら悔悟して酒を禁じ、常に門生を警むるに酒失を以てした、翁の丹青外の嗜好は演劇と淨瑠璃で、俳優珊瑚郎(伯園)の如きは門下の名手である、翁の義子小齋、孫小算皆畫界に名を馳せ、家聲を墜さず、翁老後若王寺畔の講神堂に優游して、竟に天命を終へた。

翁は終始一に正宗を守りて、時流の依傍又は折衷を事とせるに従はず、巋然魯殿の靈光として存したるを、今や凋落に遭ふ悼むべき哉。

(二十九) 文部大臣牧野伸顯君



世間では君を朦朧組の一人に紐込んで居るが、大臣となつて以來、世間の想像の中つて居らぬことを、着々證據立てた、朦朧組といはれては乃父大久保甲東の靈に申譯がないとて、奮勵一番した次第でもあるまい、西園寺の和尚が外交官たりし君をハルト、埃國から呼び戻して、文教の椅子を與へたは目が高い、君の評判のよいのは、前文相の久保田氏が、底光の氣味の悪い目で風僚を壓伏し、滿腹低氣壓を氣遣はしめた後を受け、村夫子然たる容貌を以て、藹然として人に對するの確に一割方の徳であらう、併し種が種だ

けあつて、君には他の成り上りの企て及ばざる、ドッシリとした重みが備つて居る、勿

論裁決流るゝが如く、多々益辯するといふ才子肌ではないが、寡言沈黙、大局を達観し、事に當つて周到なる所、宛として乃父の面影を存するのである。

其寡言沈黙村夫子然たる文相が、就任匆々、薄志弱行の青年を叱咤し、變哲學者を排斥し、ハイカラ女學生を訓戒し、眠るが如き教育界を驚かしたのは、頗る愉快であつた、文相が言つた位の事は誰でも言ふが、久しく伴食宰相を以て繼續した文部の下に、教育界は一種沈鬱、厭倦の情を以て満たされ居つた曉、一聲ゴーンと遠寺の疎鐘を銜いたから、朝寢の坊主どもが俄に眼を覺ましたやうなものである、處が此和尙、一衝き銜いた許りで、其の後は復沈黙、平々凡々の達磨の如くなつて仕舞た。君は茨城縣に知事たり、文部内務に次官たり、埃國に公使たり、今歸來して文教の權を握る、願くは今少し活潑に教育界の情弊を一洗し、教員共の魂から入れ替へさせて、世の囑望に副うて貰ひたい、斯くなれば華嚴の瀧に飛び込む青年や、理想の良人を需むるてふ女學生も、自然に無くなるであらう。

(三十) 鑛業家安川敬一郎君

筑豊の山は幾多の運命兒を産出したが、こゝに新しく安川敬一郎なる、一人の精神的

富豪を産み落した事は、聊か他國の山川に誇るに足るべし。



鑛山王の古河家が、百萬圓の三大學建設費を寄附したと言つて、世間の賞賛止まざる間に、其の名さへ餘りに高からざりし君が、突如として三百萬圓を擲ち、高等工業學校を建設したに就て、今日此の頃、君の頭の上に降つて來る賞揚讚嘆の聲は、必ずしも溢美の言ではない、君は筑前福岡の藩士、始め實兄松本、幾島の

兩氏に從つて炭鑛販賣の事に當つたが、年少氣鋭、未だ商機を解せず、一舉失ふ所甚だ多く、次兄幾島氏が、佐賀征討軍に隨ひて戦死した後は、長兄松本氏と心を戮せ

六〇

て専ら鑛業に従事し、或は坑夫と儼寒を共にし、或は一敗地に塗れ、幾多の艱難困苦と戦ひ、百折不撓、遂に明治炭坑にて一日約一千噸、赤地炭坑にて一日約五百噸の石炭を掘出し、全國産額の約廿分の一弱を占有する今日の成功に達したのである、君の他の鑛業家と異なるは、斯る難境に陥つても、決して他の資本家の力を借らず、飽迄獨力を以て歩一步を進めて、其の基礎を鞏固にしたことで、俗に所謂山師とは大に趣を異にして居る、其平生に於ても、亦一般の鑛業家が、豪奢一世を睥睨するの快を求めず、何處迄もチミにやり通したので、寧ろ今日迄の君は、冷たい男として、餘り善くは言はれて居らなかつたのである、毀譽褒貶は必ずしも當らず、不鳴不蜚卅年、一たび蜚で、三百萬金の聲を放つ、君も亦快男兒たるに恥ぢず。

故平岡浩太郎氏は君の親友なり、一日君に謂ひて曰く、足下の富我に倍す、何を國事に竭さざるやと君答へて人々各好む所ありと、又多くを言はず、平岡氏靈あらば、今や始めて君の志を知るべく筑豊一の冷めたき男は、こゝに日本一の温かき男として、幾多の子弟より仰がれんとす。

(三十一) 海軍技師木村駿吉君

無線電話は未成品である、目下西洋各國の中で一番進歩して居るのが獨逸式で、八海里乃至十海里に達する、處が電氣術の本家本元たる西洋各國よりも、進歩した無線電話が吾國に於て發明された、その研究は以前からあつたのだが、海軍省が發表したのは昨年の三月で、其の内容は秘密に屬するから、容易に知ることが出来ぬ、縦し知つても言ふことは出来ぬが、只此の發明は目下西洋各國が、競うて研究中の者とは全くの異式で、又西洋諸國のやうな小規模小距離のものとは違ひ、發明當初の試験の際ですら、既に其の通



信距離が最優の獨逸式よりは、ズット優れて居つたといふことだ。

この名譽ある大發明をしたのは、海軍技師の木村博士である、博士は有名な攝津守木村芥舟の次男で、今年は四十二、教員出身で、第一高等中學、第二高等中學の教諭として、専ら物理学の擔任であつた、海軍に關係したのは近く三十三年の三月で、海軍大學校教官となり、同時に無線電信調査委員を命ぜられた、ところが元々物理学に堪能な博士は、其熱心非常なもの、電氣の試験は飯よりも好物といふ有様、海軍部内では電氣狂といふ綽名さへ取つた、翌年の十月に研究の爲め英國に出張したが、其歸朝を待て、海軍省では三十六年の一月に始めて横須賀の長浦に無線電信所を開き、博士はその詰切となつた、さうかうする内、日露戦争は始まつて、君の研究の結果を應用して見た所が、頗る好成绩であつた、かういふ勳功者に勳三等年金三百六十圓は、少々案外だつた、人間生れて須らく劍を佩びるべしかね。

其の後君は相變らず長浦で、其の教育の任に當つて居つたが、君の教授法は頗る變つて居る、普通ならば、分つて居る事から順に教へるのだが、君は分らぬ事から逆に教授して、遡つて分つた處に達するといふ遣り口である、或は日、例の通此の變法教授の眞最中、卒然或る動機に觸着した、それが無線電信から一步を進めて、無線電話を發明する基となつたのである、科學進歩の今日では、不思議でも何でもないが、若しこれが五六世紀の前なら、スグ天啓とか、啓示とか言つて、一宗開闢の開山となつたかも知れぬ。

(三十二) テキサス米作家西原清東君

寫真では鬚が濃くて、豊かに肥えて居るが、これは渡米前ので、四年間の月日をテキサスに送つて、先頃一旦歸朝した君の眉



宇の間には、歴々たる勞苦の跡がよまれる、君は少壯自由黨の志士として、随分過激の運動もした、大阪神戸で辯護士にもなつた、郷里高知より選ばれて代議士にも出た、同志社長に推されて、教育の實務にも携はつた、其の間に君は基督教を信じて、思想性行に一大變動を來し、同志社長となるに及び、益修養の急なるを感じ、學に志し、所謂四十の手習ひをなさんと決したのは君の一轉機である、それより断然代議士の職を抛つて、英國に航し、轉じて米國に渡り、ポストン附

近で語學を修めつゝ、専ら大學入學の準備をしたが、偶腦を患へて、廢學の止むべからざるに至つたのが、君の第二の轉機である、然るに此の轉機は甚だ卓見であつた、即ちテキサス州に土着して、農業を経営せんと決心したのである、そこで家族を東京より呼び寄せ、三百エーカーの處女地を買ひ入れ、井を鑿り、蒸氣唧筒を裝置し、大農法の組織に依て米作を試みたのが、即ち今より四年前である、爾來毎年豫想外の豊作を得た結果、始めに投じた資本は既に今日迄に回收し、今では既に年三萬圓の純益があり、漸く同地に於ける大地主たらんとしてゐる。

テキサスには君の米作着手以來、陸續日本人來住し、ウエブスターやヒューストンには、日本村が出来て、而も一致和合の實が揚り、日本人の信用重く、白人から尊敬を受けてゐるのは偏に君の力による、君には七十餘歳の老父母がある、君は先頃此の老親を奉じ、多くの勞働者を率ゐ、多大の抱負を抱いて再び渡米した。

君の自任は、まことに輕薄才子の頂門の一針である、君曰く憲政の創業時代には、余の如きものでも聊か用に足りたが、今日の守成時代には多士濟々たり、然るに世間海外發展を口にする者多きも、自ら之に當るもの少し、敢て魄より始むるの意であると、踴躍たる日比谷原頭に蛙鳴蟬噪する四百の頭顱よ、君の意氣に對して懺ぢよ、奮へよ。

(三十三) 摩洛哥アブデル、アジズ

右にコーラン、左に劔の教祖を真似る譯でもなからうが、摩洛哥といへば常に騒動が絶えない、この比もアルジラの知事ライズリーと戦つて、頻に外電を賑して居る、この蠻勇の國王はアブデル、アジズと云ひ、胤を洗つて見ると



餘りに感心しない事が出て来る。今を去る三十幾年の昔、一人の奴隸婦人を、時の摩洛哥大王に獻じたものがある、此の婦人天性の麗質に加ふるに、猾智を以てし、倏ち大王を

醜弄して寵幸を一身に鍾め、間もなく男子を擧げた、是が今の摩洛哥王

である、然るに大王には正腹の嫡子にムライモハメットといふ獨眼兒がある、それに



も拘らず大王の歿後、宰相バ、アーメット權を専らにして、遂にアブデルを立てた、是に於てムライは出奔して徒黨を集め、密に王位の篡奪を企つるといふ、宛然たる御家騒動が持上て居る。アブデル、アジズは賢なるが如くして愚、痴なるが如くして猾、變幻出沒、人をして端倪に苦しましむる人物で、野心も亦頗る大きく、古今の大王と比肩すべき王たらんことを期し、嘗て重臣メン子ビを英國朝廷に派遣し、制度文物の視察をなさしめたが、其の出發後佞人の讒を容れて、彼れの歸來を待つて之を獄に捕へんごしたこともある、時としては國庫の財物を私する奸臣を重用し、時としては些末の小事に逆鱗して、臣下を手討にするなど、殆ど定見を缺いて居る、随つて外交の方針も此道口だから、之を眞受にして楯組折衝する列國は、時々よい馬鹿を見ることがある。

(三十四) 憲政本黨領袖犬養毅君

前年朝野新聞の紙上に、犬養宿禰、尾崎朝臣など署名した紀元節の祝詞があつた、文體は六朝の駢體、文辭は壯麗絢爛、見



る者皆漢學大家の作なりと爲す、何んぞ料らん、是れ犬養木堂が彫琢銑鍊の末に成りたるものならんとは、又改進黨時代に於ける犬養木堂は、快利鋭敏の雄辯家として推重され、短槍の綽名さへ附けられたことがあつた、然るに今や彼れは、其の絢爛の文を斂め、其の快利の辯を禁じ、謀を帷幄の内に廻らし、勝を千里の外に決する、隅伯門下唯一の好策士となつたのである。

君、備前岡山の人、明治七年笈を負うて東京に遊び、藤田鳴鶴の食客となつて慶應

義塾に業を修め、鳴鶴に知られて報知新聞に重要な地位を占め、明治二十二年の頃、矢野龍溪の屯田策と議論合はず、尾崎學堂等と共に退社し、朝野新聞に楯籠りて報知新聞に拮抗したが、其以前彼れは東海経済新報といふ雑誌を發刊して、田口鼎軒の東京経済雑誌に對立したこともある、亦其の間に秋田の新聞記者となつたこともある、西南戦争の通信員となつたこともある、尤も此の前後には多少の官歴もあるが、其の初めは大隈伯に見抜かれて、統計院の權少書記官になつたので、此れが今日迄殆ど三十年間、大隈伯の股肱として、切つても切れぬ縁となつた抑もの發程である、大隈の冠を挂くるや、君も又直に官を辭し、伯を助けて立憲改進黨を組織した以來、今日迄の政界は、その裏面から見れば、全く君と林有造、君と伊藤巳代治、君と星亨の智慧較べ、度胸較べと言つてよい、文部大臣にもなつたが、三日で内閣が倒れてしまつた、表面に立つたは三日だが、憲政黨内閣時代には寧ろ實際の首相であつた、宜なるかな、當時世彼れを稱して無冠の宰相と呼びしことや。彼れは今會心の妻君をもつてゐるが、彼れの青年時代、友人が彼れに妻を世話せんとして、彼れは一日先づ其の婦人の弟と或る所に會見した、弟といふのは十七八の少年だが、話して見ると中々面白い、早速話はきはまつて少年は辭し去らうとする、彼れは一寸と呼び留めて、僕は金の無い時は一夫一婦主義、金が出来れば多妻主義だとやつたので、少年驚いて遂に破談になつた、此の少年は即ち徳富蘇峰であつた、破談が幸ひ、若し此の時話が纏まらうものなら、夫れこそ犬と猪、年が年中親類揉めは絶えないだらう。

(三十五) 商傑淺野總一郎君



顔を見れば平々凡々、而も今日の事業界彼れの名を列せざるはなし、姑く彼れをして

彼れ自身を語らしめよ。彼れの談に云、自分は自分の力の及ぶ限りを盡して、確かと思ふものだけをドンドン起して居るつもりです、今ザット自分やらねばならぬ事業を勘定しても、彼れ是れ一億以上の資本に達して居が、私はドウにかして自分の事業のみで、年々少くとも五千萬圓位の利益を収めたと思ふのである、目下大理石にしろ、セメントにしろ、將又硫化鐵などにしろ、外國より随分澤山の注文があるけれども、

如何せん此等の注文を満足せしめやうとすれば、差當り萬噸以上の船がなくてはなら

ぬけれども、目下萬噸以上の船は不足勝であるから、私は萬噸以上の船を八艘新造する計畫を立て、着々實行してゐる次第です。

一年五千萬圓の利益を狙つて居る彼れの前身は、何であらう、家業の醫者が厭やだと言つて、郷里富山より飛び出し、横濱にておでん屋を始め、氷水屋となり、竹の皮屋となり、薪炭屋となり、瓦斯コイルタールにて儲け、遂に東京汽船會社社長、淺野セメント會社社長、何々會社重役十數箇を兼ね、新事業中彼れの名を見ざるなし、彼れが成功の秘訣何にかある、唯彼れの居室の扁額を見れば足る、即ち『來三福運一從下勉強』の六字。

(三十六) 陸軍少將有坂成章君



下瀬博士を掲げ、木村技師を載せた人物畫傳は、順序として有坂砲の發明者たる有坂少將を記述せざるべからず、君は周防國

岩國の人、嘉永五年を以て生る、君の實父木部右門氏は藩の鐵砲掛で、有坂家の養父長良氏は、時の將軍の前で、和蘭式大砲の試験射撃を行つた程の砲術家である、彼の鐵砲掛の血液を脈管に流して生れ、此の砲術家の陶冶を腦漿に刻んで生ひ立つた君が、世に稀なる造砲家となつたは、偶然ではない。

君の初陸軍に出たのは明治六年で、十年の西南戦争の前には、眇たる十一等出仕の身を以て、戦争の勝敗に大關係ありし雷管填替器を創製し、十三年には些々たる

一 小文官を以て、東京灣の咽喉たる富津海堡の設計を完成した、蒼龍終に池中の物に非ず、十五年一躍して砲兵大尉となつた、が君が不朽の名を止めたのは、三十年式銃と、卅一年式速射野山砲の發明である、此間に於る君の苦心は、決して他の窺知すべからざる者で、又其大成迄には攻撃もあり、妨害もあり、冷評もあつたのである、されど其實力の優勝は何者にも打克つて、最後の成功を完くした。君の造砲家たるは、小學生でも知つて居るが、君が豊富なる思索力は、其の他の兵器にも及び、今日迄に偉大の功を奏したことは知らぬ人もある、其の中で一番重なのは、輜重車の改良と、信管の發明である、殊に日露役の戦勝は、君が血肉を絞りて、千辛萬苦の末に工夫し上げた、各種の火砲彈丸に共通する信管に負ふ所甚だ大きい、金鷄勳章を胸にぶら下げる軍人には、一も二もなく隨喜渴仰の涙を流す浮調子の國民は、少しは、かういふチミな軍人の信者にもなつたがよからう。君が發明の天才たるは出生と生立ちにもよらう、が今日までに、成功するには並大抵の苦心經營ではない、その少時大阪の陸軍幼年學校に在學中、校則違反で百日の營倉になつたことがある、君はこの監禁中佛語辭彙を精讀して、一々各種の意味を暗誦した、これが他日造兵の蘊奥を窮むるに最も必要なる諸學科の基となつたといふ一事を以ても、其の全般を推し測ることが出来やう。

(三十七) 奥國駐劄大使内田康哉君

外交官も専門となつて來て、雛兒より育て上げられたものでなくちや、間に合はぬ世の中と爲つて來た、日本は蓋を開けてから四十年に過ぎないので、外交官も速成や變則が多かつたが、追々新式の外交官が出来て來た、内田康哉君の如きは其の筆頭である。



好き分別である、君は明治二十年、歳二十二で大學を卒業し、直に交際官試補となつ

て華盛頓に赴き、時の公使陸奥宗光の知遇を得た、是れから君の立身出世の基、頗る順境に、頗る好運に、一たび既に總務長官をも經、今は全權大使となつた、是れが人間の花である、年はマダ四十二、若し一たび大臣と爲れば前途は浪人のみ、墓場のみ、爲らぬ中が樂みである、君の同級生中、一木喜徳郎が首席で、君が二番、早川千吉郎、林權助、鈴木馬左也の諸氏が其の次である、一時秀才赤門に集り、而も君の級に萃る、其の中君と林權助君とは外交界に入つて、孰れも頭角を顯した、陸軍に於て乃木川上が相競争し、一進一退相競争して立身した如く、君と林權助君とは兩々相并んで進んだのである、乃木川上は或る意味にて軋轢したが、君と林君とは莫逆の友である、其の初め外交界に身を入る時、君は歐洲を仕上げて東洋に廻ることを希望し、林は東洋を研究して歐洲に向はんとを希望し、孰も其の徑路を取つて、今は其の再度の徑路に向つて來て、林は北京公使となり、君は埃國大使となつた、其の門出の徑路を異にした如く、其の性格に於ても少々異つて居る、林は東洋的分子多く、君は西洋的分子が多い、容貌風采も其の通りで、言語動作も其の通りである、其の年若き西洋風の君が、東洋的老猾の鼻祖たる李鴻章と如何にして折衝したかを愛ひ、之を君に問へば曰く「ナア二と二と合すれば四といふ工合に、理と數とを并べ、事務的に推して行けば李爺も譯はない」と、成る程是れぢや李爺も困らう、併し東洋風とは丸ツきり違ふ、君が寧ろ歐洲に向ふ所以だ、君は豊類圓顔、今様の坂田金時然たる風采に大眼玉をキヨロつかせ、寸時も油断せぬ如き面魂は、君の慧敏機才を露はし、其の人に會ふ時、直に懷中時計を窺は、君の心神の活動息まざる證據にて、強ちに「歸れ」といふ謎にあらざるも、知らざるものは妙に思ひ、之を君に忠告した、友人もありとか、何れにしも君は新進有望の外交家である、昔し楚の項羽は重腫であつたといふが、君も乃ち重腫である、然らば異相を備へたるハイカラ耶非耶。

### (三十八) 哲學家ラッド博士

亞米利加は世界の怪異國と稱せらる、モネー主義に於て大成功したものが澤山ある、人間を裸のままにして自由の天國に放ち、腕力次第、智恵次第で、ブルータルの競争をせしむる所は亞米利加で、舊式の道德觀念より觀たら驚くべきものがある、然るに此國に飾り氣のなき武士道若くは純哲學を講ずる豪傑や大家を生ずる所、流石は亞米利加で、所謂深山大澤龍蛇を生ずるのだ、哲學家ラッド博士は即ち其の怪異の一である。



シ、トランブル、ラッドと稱し、明治十五年以來エール大學に教鞭を執り、聲名字内

に高し、今は富豪カーネギー氏の年金を受け、同大學生名譽教授たる榮譽を擔ひ、悠々自適、モネー主義に對して無形の精神界を支配しつつあるのである。

博士は大の日本最負にて、エールに入學する我が貧書生の爲に、獎學資金制を創め、日露戰役中は屢次有力の論文を新聞雜誌に寄せて、對日本の同情を喚起せられた、博士が千里を遠しとせずして我が國に來朝せしは、明治二十五年及び三十二年の兩度にて、孰れも東京帝國大學の招聘に應じてゐる、其の間京都の同志社其の他に於て、該博なる見識を發表せられたが、戰後の日本は如何なる状態にあるや、片時も早く精細なる視察を遂げたいと云ふ所から、今度三度目の來遊を見るに至つた。

今回も東京にて既に講演を開き、京都にても文科大學其の他に於て講演せらる、我が 聖上陛下には博士の日本に貢獻する所多きを多とせられ、曾て謁見の榮を賜ひ、勳三等旭日重光章を授け賜はれり、博士年六十四、矍鑠として壯者の風あること、肖像の示す所の如くである。

### (三十九) 京都の富豪藤原忠一郎君

藤原忠一郎君のみでは知る人少かるべきも、京都のカギ忠といへば、廣き京都府下にも五本の指に折らるる富豪で、一面には多額納税者たり、一面には木綿問屋の主人であるの知らぬものは殆どあるまい、然も爲人素朴、打見たる處田舎のボツと出どより見えぬ中に、一種の光明は包まれる、一種の教訓は藏される、その云ふ所、行ふ所、一寸奇しく、爾うして確乎な信念がある。



忠君、愛國の四箇條を主にして自らその實行者となつたのである、忠一郎さんは此の

人の手に背てられて、永久に此の家訓を守らうとするのである、それで小供の時から大家の坊ちゃんらしい扱ひは受けず、幼少の時からボツ／＼家事の手傳ひをする番頭丁種と同じやうに前垂掛で店の用をする、誰の目にも是れがカキ忠の後継者とは見えななだ、海作さん常に誠めて曰く「人間第一の肩は倣倣であるぞ、總ての失敗はこの二字から来る、男子として世に立たんとするもの、須くこれを謹むべきである」と、氏はこの訓誡を神と守つて、幾百萬の財産を有しながら少しも荒ぶつた様がない、元勳であらうが、大臣であらうが、大學者であらうが、宰相大であらうが、少しも取扱ひを厚薄にせぬ、誰に向つても詞を低く禮儀を正しく、墨に顔を書り付けて挨拶する、是等は普通の金持の眞似の出来ぬ所であらう。

明治二十三年の事であつた、一寸感ずる所があつて早稻田専門學校へ入學して、商人には不相應な政治科を専攻した、その頃は恰も二十前後の血氣盛り、木綿縞の衣服に白小倉の袴を着けて學校へ通ふ様は、宛然九州出の書生其々で、誰の目にも花の都の坊子とは見えななだ、扮装が斯うムツクなばかりで無く、氣象も坊子らしい様は見えず、誰に向つても喧嘩を吹き掛ける、教場でも下宿屋でも氣に入らぬ事があると腕力を揮ふ、酒に酔つては氣焰を吐く、財方退治の指揮者といふと、いつも此の人が交つて居る、教師も同輩生もその亂暴には手を置いたと見え、放校處分を受けるであらうとの評判が立つた程であるが、二十六年の七月やつと同校を卒業した、その中に源作さんが病死される、流石の忠一即ち忠一もその大きな家體骨を當日から自分の肩に背負て立たねばならぬかと思ふと、ダ、ばかりは担ねて居られぬ、そこで性質ががらりと變つて、今までの相暴であつたのが急に優和しくなる、世間の事には餘り意を注げななだ人が、先考の遺言といふ名義で早稻田大學へ二萬圓、京都大學へ三萬圓、都合五萬圓の寄附をした、然しこれには條件がある、元金の二萬圓へは手を付けること相成らぬ、利息だけは自由に使用せよ。

家内の生活は依然として舊式だが、商賣上にかけては頗る進歩的になつて居る、最も公共心に富んで、公共の事と言へば莫大の金をも吝まぬ、ソレで金を出した翌朝、血眼で新聞の廣告に眼を晒らすといふ筋の慈善家とは雲泥の相違、金は大抵一人で腹を痛め、名義は共同にすることが多い、こんな人格の美しい人が、今日の商人の中にあるとは誠に珍らしい、尙遺話の二三を別欄に收む。

(四十) 軍談師美當一調君

『ものゝ夫の義理よりつらきものはなし、知行に離れて妻子に別れ、戀し故郷を後に



見て、出で行く處が旅の空、張り上げる一聲の切り節に、泣かされたもの幾十萬人ぞ、げに九州男兒が出征の離盃に酔うて、尾藤先生に歌はるれば死んでも本望だと叫ぶに至らしめし、軍談師美當一調君はいかなる人であらうか。

寝ても起きても三千石、熊本の尾藤といへば、その昔島原の陣に一番槍の功名揚げし家柄、その分家に五百石を頂戴して、華奢風流の日送をした尾藤家の嫡流として生れたのが、紛ひもなき一調君、持つて生れたのが、紛ひもなき一調君、何れも目錄以上の奥儀に達したが、文事

て生れた秀才は何事にも器用で、月馬刀槍、

八〇

にかけても又凡流を抜き、殊に藩士中の漢學者を以て目された、加之、天稟の樂才、十歳の頃には、既に三絃を懐いて軍談の真似をしたといふ、明治四年常備隊を志願して東京に出たが、或る日隊長の安井といふが、枕橋の八百松に、米田與七郎、安場保和などの熊本連と共に、大小数名の美妓を招いて、飲めや唄へやの大騒ぎ中、彼れは隊の用を帯びてこゝに使つた、隊長は彼れを其の席に導いて三味の懇望をする、隊長の許しは出たり、今日こそは天下晴れての好める道、直に絃を取つて、弾くは弾くは唄ふは唄ふは、一座驚嘆、藝妓も跳足で逃げ出したとは、真に此の時の事であらう、其の後海軍省に出たが、間もなく辭表を提出して、翻然軍談師となつてしまつた、時に明治八年、親戚故舊驚くまいことか、名門の名汚れとして詰腹切らせんとするもあれば、座敷牢にと騒ぐもある、併し彼れが決心は牢として抜くべからず、今にして悟る所なくんば、士族は遂に大道乞食と成り果てんと言道して家を飛出した、其後十年の亂となり、彼れ亦高座の軍談を實地にやつた後、長崎の獄裡に數年を送り出で、懸柯落魄を極めたが、藝道改良の大目的は、遂に幾多の困難に打克ち、九州講談界の雙壁と稱せられた徳丈、作太郎と并で、漸く頭角を顯し來つた、折しも世は日清戦争の眞ッ只中、彼れは軍事教育日清戦争講談といふ、生々とした新講談を始め出し、國民の士氣を鼓舞して無上の人氣を博し、爾後彼れの名聲は其の實力と共に旭日の如く、遂に乞食藝として士人の間に齒せられざりし浪花節をして、畏くも皇太子殿下の御耳に達せしむるの榮を得たのである。

彼れ今や十萬の財を蓄へ、熊本南千段畑に瀟洒の一家を構へ、尾藤育英會を起して、常に十人以上の學生に給費し、靜に閑生涯を送つて居る、毀譽褒貶を塵埃の如く看過し、三寸不爛の舌頭、十萬金の身代をタ、キ出したる彼れも、亦一種の人物ではないか。

(四十一) 快男兒セシル、ローズ

蒲柳の身を以て南阿未開の蠻地に入り、赤手事業を経営して巨億の富を蓄積し、竟に



キンパーレーの金剛石山と、ランドの金鑛を一手に掌握するに至り、一たび喜望峰殖民地の首相ともなり、死後其の資産を私せず、遺言して之を大學獎學金、及び他の慈善事業に分割寄附したるセシル、ローズは實に近世の快男兒である。

彼れは一生無妻なりき、彼れは肺患の爲學を中道に廢して南阿に渡航した、彼れ若し英國に塾居したらんには、或は却て天死したるかも知るべからず、彼が結核菌を有しながら五十歳の壽を保ちて、曠

世の大業を成就したるは蠻地に勞働したる結果である。



彼の夢想したる南阿統一の事業は、彼の死と殆ど同時に成功した、彼の計畫したるケープよりカイロに至る阿弗利加縦貫鐵道は、既にゲキクトリア大瀑下流の架橋を了り、將に數年ならずして開通せんとする、四年に亘れる南阿戦争は畢竟彼の方寸に出でたる所で、クルーネルとの對抗は竟に彼の勝利に歸した、彼は、大英帝國建設者の隨一として、永く史上に光彩を放つべし。

彼の富を造るは、恰も詩人の詩を作るが如く一種の天才を有した、然れども富強増加するも、身を處する儉素にして毫も奢侈に流れざりき、彼の性格中最も大なるものは精力の絶倫、知力の敏活、堅忍不拔の意志是れなり、彼の友は云へり、ローズは常に明後年に爲すべき事を考へつゝありと、彼の舉動は磊落不羈にして、甚だしく外觀の修飾を惡めり、危難に瀕みても頭腦は常に冷静で、彼れ曾て「余は如何なる危機に際しても一夜として安眠を缺きし事なし」と云ふた、西班牙古哲の言を假りて云へば、彼れは毎日太陽の如く新生氣を帯びて昇り起き來るものである。

彼れの名を以て命せられたるローデシアは、彼れが事業の永久記念である、ローズ死して身を南阿マトソボスに埋む、是れ彼れの遺言に因る、同地は方數十里に亘る大石原の丘上で、人跡も稀に、鳥獸も到らざるの地なり、死して此の荒寒の地を選び、生きて彼の大事業を成す、實に阿弗利加ナポレオンの稱に負かざるなり。

(四十二) 海軍中將伊集院五郎君



日露の役、戦争に出ずして功一級になつたのは、海陸軍を通じて君ばかりである、君は

未來の軍令部長として、國內に赫赫の譽あるのみならず、歐洲の天地にも、アドミラル、イジエインの名は隠れない、君今や出で、第二艦隊の司令長官となつたが、戦争の際には軍令部次長であつた、軍令部は海軍の策源地で、君は更に軍令部の策源地であつた、三十萬噸の軍艦が縦横に海を扼して、鬼神の如き活動をした其の原動力は、一に君に在るといふも、敢て

過言とは思はない、君の邸宅は麹町永田町で、海軍省とは目と鼻の間だが、君は戦役

中その近い家門に入らず、軍令部内に、軍服の儘で起臥したといふ一事で、君が如何に海軍の策畫に心力を傾注したかといふ事が解る、梅檀は嫩葉より芳し、君は少佐時代より、前例を破りて屢御前會議に列し、少佐參謀の盛名は、今尙海軍部内の語り草に残つて居る、日清役起るに及び、此の名譽ある少佐參謀は、樺山大將の幕僚として、西京丸に乘組み得意の神算奇略を施して、中外をして其の大膽に驚かした、戦役後に少しく君の名は隠れて居たが、幾干ならずして伊集院信管は發明せられた、下瀬火薬はこの信管を得て、始めて非常なる爆發力を完うするので、伊集院信管はその完全世界に比なしとまで言はれて居る。

かゝる智謀の名將はいかにして養はれたか、君は英國育ちである、九年間の留學、前には同國太平洋艦隊ツライアムフで三年間航海士を勤め、後にはグリーンウキッチ海軍大學校の學生となつた、後年日英同盟成るの後、君はエドワード七世陛下の戴冠式に列し、日英同盟派遣艦隊を率ゐて、英國の海軍と翱翔盤旋して、日英同盟を事實の上に現した、君は實に日英同盟表彰の花形役者であつた、此の時君は英國海軍の精華たる、往年の學友より、溢るゝ如き友情を以て歓迎せられ、任終て歸朝するや、又帝國ホテルで、日英の紳士より盛大なる歡迎會を催せられた、當日君湧くが如き滿場の喝采に迎へられ、會衆に對して鄭重に挨拶し、更に英人に向つて、流暢なる英語演説を試み、列席の會員をして舌を捲かした、此の英國と切つても切れぬ武勳赫々の名將は、今度遣米艦隊司令長官として、新艦筑波に坐乗し、英國と同種同文の米國に使すべく、本日横濱埠頭を解纜するのである、八千萬の北米合衆國民は、如何に君を迎へるであらうか。

(四十三) 超世間的島田蕃根翁

今の世に珍らしいと云つて、翁の如き珍らしい人はない、翁は實に阿羅漢の現身で、慈

なく我なく、怡々如申々乎、而も學に博く、徳に厚く、今日の世實に得難き人物である。



翁は徳山藩の人、曾て同藩の大參事を勤め、藩政を改革する事が多かつた、然れど翁は實務の人でなく、讀書の人であつて、志が非常に高く、幾ど超世間的。超人間ので、自然に人間界に取殘され、八十一歳の今日、其の貧乏と云つたらお話にならぬ、然れど貧に處つて晏如たり、少しも騒がず驚かず、又貪らず求めず、例へば同郷出身の侯伯大臣乃至成金等ありて、翁に惠まんとするも、以なき金は受取

らず、現に故兒玉大將の如きは、翁の小供同様にて、其生るゝ時、翁と大將の父と若を圍み居、偶々男子出産の報を得て、翁は其の名を命じた位の關係、然るにも拘はらず、翁は故兒玉大將より無名の金は受取らぬ、然れば毎年、故大將は翁に書書の揮毫を頼み、其の謝禮として揮毫料以上の金封を贈るを常とした、之が翁の年越料で、其の他差したる収入もない、昨年は八十の賀に當るので、故大將等發起となり、一大壽宴を開き、翁の養老金をも集めた、併し其の金を一時に渡すときは、寡慾の翁の事として、直に放散するを恐れ、或る人が保管し、隨時に支出する事になつて居るさうだ。

斯う言つた許りでは翁の人と爲りは分らぬ、翁が無名の金を受けぬと云つて、何も四角張つて意地めくといふ譯ではなく、實に温平玉の如く、些の圭角なく、座には佛様を列べて其の中に坐し、自分も佛様同様の境涯で、諄々として人を教ゆる所、眞に當世の人でない、其の話は佛に入り、儒に入り、歴史に入り、世俗に入り、滑達自在、故勝伯の談を聴くが如きが、翁のは放言の裡に箴を藏し、唯勝伯の如く政治に渡り、人の悪口を叩かぬのみ、翁の逸話及び篤行は別欄に掲ぐ。

(四十四) 遞信大臣山縣伊三郎君

大臣參議といつた時分の大臣と違つて、今の大臣の相場は下落した、大の字は少々惜しい位になつて來た今日、殊に阪谷が大藏大臣でござると、氣取つた咳の一つもこ



之君は夙に佛國に留學し、泰西の制度文物に精通するといふのだから、先づ今の内閣

では新智識の方に相違ない。  
 大臣以後の君にはアマリ不可の評をきかぬが、縦し君には以上の経歴がなくとも、逓信大臣となるべき資格がある、それは君の顔で、四通八達、その面積の廣きことは到底他の閣僚の及ぶ所に非ず、果然五千哩の鐵道國有は、君の就任後間もなく決せられた、三都を始め、各地の電鐵熱も、昨春以後、著るしく昂騰したは、則ち君を逓相に戴く卦である、君には宜しく面積大臣の名を奉つりて然るべし、笑ふ門には福來るといふ、君が十字街頭的の顔を以て、逓信省の門に出入するは、同省に取つては此の上なき縁喜である。

困つたことには、取る年と共に、君の顔には皺が寄り、凹みが出来て、折角の四通八達を害するに至ることである、さうなつては、君は逓信大臣の適任者でない、併し君は大臣を廢めても決して路頭に迷ふ人ではない、君は尺八の名人で、其の技は入神の妙域に達し、尺八界のオーソリチーたる荒木古童に一步を抜くといふことだ、年壯にして一國の大臣を辱つし、老て日本尺八界の泰斗となる、また悪るくないではないか。

(四十五) 京都文科大學長狩野亨吉君

或る人が今の世に眞正の哲學者出づべきかとの疑問を發せり、成る程其は一疑問にて、功利を争ふの今日、學問も皆商賣となつ



たが、東京大學にコイベル氏あり、京都大學に狩野亨吉君あり、疑問も遂に解決され、先づ／＼安心の氣味もする。

君は秋田の生れ、九歳にして東京に出で、番町小學に學び、上田萬年、澤柳政太郎の二氏は當時の同窓にて、親交今に至る、豫備門を経て理科大學に入り數學を修む、明治二十一年卒業の後、更に文科に入り哲學を修め、二十四年卒業す、後一年餘にして第四高等學校に聘せられ、

居る數年にして飄然京に歸り、勉學三年、更に第五高等學校に聘せられ、教鞭を取り

間もなく第一高等學校校長となる、而も多く世に知られず、今回木下總長の延く所となり、來りて京都文科大學に學長となる、是れより其の人格を認められ、都鄙噴々、其の人となり語り、好學長を得たるを喜び、日本に真正哲學者ありしを喜び、狩野學長の名は人口に膾炙するに至る、老子も關を越ゆるに及び、其の吏に認めらるゝの類乎。

君は肖像の示す如く、温厚の君子人にして、顔は渥丹の如し、其の無妻主義なるに因るならんかといふものあり、家には唯書籍あるのみ、其の數幾萬といふを知らず、要するに智、情、意三者に於て優れ、圓滿熱達の人なり、別に其の逸話を掲ぐ。

(四十六) 北村透谷氏の未亡人美那子女史



若くして所夫に死別するは、女として之より悲惨な事はない、されどこは皆運命の然らしむる所で、いつまで歎いても詮なき事、賢婦は寧ろ奮つて其の善後策を講ずる、然るに世の婦人の多くは愚痴の凝固體であるから、遂に諦めがつかない、たとひ其の操は全うしても、所謂後家根性と云ふ一種の魔氣に支配せられ、徒らに嫉妬怨恨の情のみ募つて、遂に其の氣風を遺子にまで感染せしむるのである、故に斯る境遇に於て、女の偉いと偉くないのは、唯この後家根性を脱すると否に在るのだ。

北村透谷と云へば、一時文壇の一方に雄飛せる沈鬱悲壯の詩人であつたが、可惜明治

二十七年に變死をした、女史時に二十七歳、忘れ形見として唯一歳の少女英子を殘されたのである、然れども所夫の神經性なりしに引きかへ、女史は頗る快活な性質で、明治三十二年哀別の涙を振り拂つて、決然として米國に渡航し、苦學凡て九年、しかも自活の道を立て、學資を他に仰がず、されば一日中食を廢した事さへある位であつたが、女史の負けじ魂と才力とは遂に有らゆる辛酸に打ち勝つた、初めはインディアナ州のユニオンクリスチャン、カレッジに學び、進んでオハヨー州の州立大學たるリフアイヤンスに入りて、昨年六月優等にて之を卒業し、賞與の金時計と共にパチエラー、オプ、アーツの學位を得て、此の二月の二十一日に芽出たく東都に歸朝したのである。

女史は自由黨の名士石坂昌孝氏の長女である、その石坂氏は本年の一月の十三日に死去した、女史は其の事を夢にも知らないで、歸つたのである、曩には所夫に死なれて、海外行を思ひ立ち、歸つて見れば亦この始末、是ればかりは實に残念でしたと、氣丈の女史も歎いて居る、そは兎も角、女史は米國では非常に可愛がられ、日露戦争後は尙更で、諸方から講義を頼まれ隨分金も取れたさうな、殊に歸る前の三年間の如き、夏季講習會で諸州を巡り、「新日本の使命」、「過渡期に於ける日本」、「日本の習慣風俗」などの題で講義をしたが、何時も五千人以上の聴講者があつて大持であつた、されば女史は決して星や董を學んで来たのではない、勿論文學も好きではあるが、第一好きなのは植物の解剖である云ふ、女史はまだ歸朝勿々で、將來何を爲すか、其の方針は確と定まつては居ないが、割烹の事なども學んで来たのだから、詰まり女學校を起したい精神である、故に女史の本領を發揮すべきは是れからで、女子教育腐敗の今日、偏に其の成功を祈るのである。

(四十七) 眞正のハイカラー 新渡戸稻造君

世にハイカラーなる語あり、よく云へば新智識を意味する如きも、多くは翻々として、徒らに西洋がる輕薄兒に對して云はる、



學者としての博士は農業本論の著に於て現れたるも、吾人は寧ろ英文武士道の著者と

九四  
して博士を欽慕す、博士が往年白耳義に遊び、社會學者ラヴェリエに面したる折、彼れ曰く日本の學校に宗教なし、國民陶冶の大精神なき教育何をかなさんと、博士赫として怒り答へて曰く、宗教はなけれど之に代るべき大精神あり、武士道是れなりと、此ラヴェリエに詰られて心頭に發したる怒が、即ち夫の有名なる武士道の著となりしなり、博士の氣魄は此一書に踴躍す、其人物の人物たる所以も之を以て察すべく、此の一片稜々の氣魄こそ所謂ハイカラーたるに缺くる所なるか、博士の眞價は之を以て愈々貴し、然らば博士は遂にハイカラーにあらざるか。

博士は陸奥盛岡の人、八歳學に志し四書の素讀を受け且武藝を修む、後東京に來り外國語學校に入り、次で札幌農學校に入り、學を卒へて米國に遊び、ジョンズホプキンス大學等に入り、次で歐洲就中獨逸に留學すること多年、歸來札幌農學校に教鞭を執りしが、選ばれて臺灣總督府の顧問となり、次で京都法科大學の教授たり、其の第一高等學校長たるに及んで令聞益々高し、氏の夫人は米國人なるが、氏の家庭は盡く日本式にして、夫人をして自ら下女と共に襦袢がけにて拭掃除を爲さしむる等、今日此の頃のハイカラーが、女房の尻に布かれて得々たるが如くならず、勿論博士夫人の尋常ならざる人にて、西洋的内助の智識を有すると同時に、東洋的婦道を守るに因すと雖も、博士の博士たる所以のもの、其の家庭をして是に至らしむ、是れ其の形式に於て大ハイカラーたるに拘らず、世の所謂ハイカラーたらざる所以なり、然れどもハイカラーをよき意味に解して新智識と云ふならば、博士の如きは實に第一流のハイカラーにして、ハイカラーの最も粹なるもの醇なるもの、世の所謂ハイカラーを以て自ら居るの徒、大に博士に省みて可なり。

(四十八) 韓國統監伊藤博文侯

今頃になつて韓國統監正二位大勳位侯爵伊藤博文君を收むるは、御本人チト不平かも知れぬが、實の處願ひ下ぐる筈であつたのを、此の寫眞が滅切り年寄つて居らるので、可哀想に思ひ、又珍に思つて、人物畫傳中に入れたのである。



此の寫眞は昨年十一月馬山で撮影したので、大人なしく椅子に蹲まり、顔は姪子の如く、腰は鰻の如く、宛然非職前の押丁の如く、殊勝に見える處が取り柄である、元氣は中々盛んで、生來の癖も治まらぬよじなるが、自分で飲酒も攝じ、衛生に注意せらるる所老い去つた證據で、

流石飛鳥も落す威勢の大勳位侯を、公平に見舞つた歲月の所爲は争はれぬものである。

侯の履歴は何人も知る所、今更喋々するは御免を蒙るが、十四五の時は油德利を提げて、三里もある山路を使ひに行き、十七歳松陰の門に入り、無暗に叱られ、聊か才子で器量があり、大義名分も心得、二十二で士籍に取り立てられ、二十三で帆船に乗り、喜望峰を廻つて英國に行き、歸來見識を上げ、二十七で兵庫縣令、夫れよりトン／＼拍子で立身し、位は應て稻荷大明神に追つき、大勳位菊花大綬章に頸飾をも戴き、お負けに外國の勳章も澤山持つて居るから、胸一杯金ピカの博覽會、畏れ多くも天皇陛下の次であらう、今でこそ冷やかさもすれ、後世百代の後から見たら、慥に豊公以來の一人物である、殿父十藏君が「倅は存じ懸けなき立身をしまして」と驚きしも尤もで、エライはエライと云はざるを得ず、尙一つ感心なのは金銭に淡泊な事で、元老中の貧乏者たるは美德である、又思想も緻密のやうで案外疎大、例へば地價修正と地租軽減とを一緒に考へて、幾ら説明しても分らなかつたといふ談がある、斯んな處が愛嬌もの、爲に人に悪まれても井上伯や大隈伯の如く、命まで狙はるゝ事はない、言はゞ眞の處は好人物である……ア、書過ぎて失敬。

(四十九) 日本婦人矯風會幹事矢島楯子女史

日本の基督教界で、女子中の人物を挙げよと云はゞ、吾人は遠慮なく矢島楯子刀自を推さんとする、刀自が昨年七十七歳の高齡を以て、單身米國ボストンの萬國基督教婦人矯風會大會に列席したのは、皆人の知る所、その行凡そ百四十日間、歩いたのが一萬六七千哩、しかも自分は日本人で日本人を代表してゐるからとて、米國到る所、日本服に日本語で遣り透し、又丈が矮いから、その目標に悪魔征伐の旗を押し立てて、大會に臨んだなどは、正に戦勝國たる日本婦人の意氣を示したもので、會場では勿論の事、米國大統領始め



各國の人々から、大に歓迎せられたのも尤もである。



刀目は舊熊本藩士の女で、一旦嫁ぎし事あるも、仔細ありて里方に歸り、その後再び嫁せず、明治四年、中央政府に出仕せる兄矢島直方氏（横井小楠の門弟）が病に罹つたので、刀目は看病の爲に東京に於ける女教師の嚆矢ださうな、その後築地の新榮女學校に教師となり、今の明治女學院（舊櫻井女學校）を一人で引き受けたのが明治十三年で、即ち刀目は三十餘年間、教育に従事して居るのである。

宗教家として教育家として、同時に社會改善に志ある刀目は明治十九年日本基督教婦人矯風會を起し、今に牛耳を執つて居る、此の會今や世界基督教婦人矯風會の支部として、日本全國に四十餘の支部と一千七百餘の會員を有して、中々盛なものだ、かの老體を呵して米國行を思ひ立つたのも、即ち此の會の爲である、刀目は流石に永き浮世の浪を凌いで來た人だけに、些のアーメン的臭味なく、ただ天真爛漫、明治女學院の校舍の一室に居を占めて、獻身的に宗教、教育に身を委ねて居る、諷然たる温容に接しては、人は自からその徳に化せらるゝのである。

### (五十) 西 太 后

もし女流の身を以て、四百餘州の國土と四萬々の民衆を統ぶること四十餘年、よく幾



多の風雲兒を駕御し得るものありとせば、其の人は實に女傑と云はねばならぬ、世人が清國西太后を以てカザリン二世、もしくは則天武后等と共に、古今稀なる女傑となすは元より其の所であらう。古來女傑の一生が多く小説的である如く、西太后の經歷も亦頗る小説的事實に富んで居る、又女傑の多くが美人なる如く、西太后も亦絶世の美人と稱せらる、而して西太后の今日あるは、幾多の小説的事實あるが爲にして、其の小説的事實

は多く其の美人なるより來るは云ふまでもない、西太后の父君は惠徹と呼び、姓は那

拉氏、嘗て道臺であつた事がある、氏なくして玉の輿ではないが、一微臣の出として、今日大清帝國主権者以上の位置に居る、既に小説的ではないか、其の小説的事實を一々書き出せば逆も一朝に盡くす事は出来ないが、太后が初めて大権を握られたのは、咸豐帝熱河に崩じ玉ひ、太后の所生穆宗が九五の位に即かれてからである、其の間には随分小説的事實も多く、悲劇喜劇もあるが、東太后崩御の後には、愈々萬機御心一つに決せらるゝやうになつた、時恰も長髮賊の亂で、四百餘州は鼎の湧く如く、愛親覺羅氏の天下は方に一大危機を告げたが、太后は會國藩、胡林翼、左宗棠、李鴻章等の諸豪傑を操縦し、尙ゴルドン將軍など外將を聘して、よく四百餘州を戡定せられたのである。

後一時垂簾聽政を撤せられたが、夫の康南海の政變は亦端なく太后の世とならしめ、爾來尙大政の實權は一に西太后にあるのである、義和團事變の折、劉坤一は、今次の事は太后の眞意に非ずと云つた事があるが、其皇帝を擁して太原に播遷せられたのは一代の失敗であつた、女傑である丈けに内行に兎角の噂もあるが、歲月は年々御精力を殺ぎ、先達も寵臣李蓮英を斥けられたと云ふ事である、皇帝この御間柄には、尙萬民の遺憾に思ふ事の少からぬのは、清國の爲に不幸であらう、併し今日喜壽の御高齡を以て、親しく大政を料理せられ、喘々焉たる愛親覺羅氏の社稷以て寧きを爲、天は愛親覺羅氏の爲に、此の女傑を下して掉尾の美を濟さしめたのであらう。

(五十一) 司法大臣松田正久君



金持の頭は多く禿だが、君の禿頭は貧乏光りでテカ／＼してゐる、第一輪廓が貧乏然

として、目といひ口といひ、三世相では一番に見限られさうな人相である、今こそ大臣官邸から瘦馬車位は驅り出が、年來小倉の袴に古びた養生羽織を着け、幌の破れた辻車で飛び廻つて居た人である、而しそれが松田君の偉らい處で、貧に居つて志を變へず、何處かに毅然とした所がある、三十一年の憲政黨内閣には、大藏大臣となり、三十三年の伊藤内閣には文部大臣となり、政友會では總務委員となり、西園寺内閣に入つては司法

大臣となる、といふのも君が多年清節を保つた賜ものであらう。

君は其の顔の示す通りに圓滿な老人ではない、縦令實行の力はなくとも、其の禿頭には、流行感冒のやうな熱の満干がないから、自然冷静で、自信力が強い、それで屬僚の御機嫌取をするやうな非見識はしないから、司法省では孤立だといふ事だ、一體君は何が専門であらう、明治の初年に洋行して、經濟學を嚙じつたといふので大藏大臣となり、君の家が代々儒者で、君も鹿兒島造士館教頭を勤めたといふので文部大臣となり、若い時検事をしたといふので司法大臣となつた、これだけなら、誰でも大臣にはなれさうだ、只政友會に人がないので、其の禿頭の剛い骨が、チヨット凡骨にはないのである。

この親爺昔は西園寺の和尙など、東洋自由新聞を發行して、中々の元氣であつた、君の實兄某は郷里佐賀の小學教員で、其人がいつも意見をする毎に、君は『今に大臣に爲つて見せる』と煙に捲いてしまつたが、果報は寢て待て、トウ／＼棚から牡丹餅は落ちて來た。

(五十二) 中村不折畫伯



不折といふ名は何人も知らぬものはない、銚太郎といふ本名は幾んど知るものもあるまい、銚太郎の中村は、本と信州の山奥から、僅か三十餘金を懐にして、東京に飛び出して來た山猿に過ぎない、今も尙山猿のやうな様子をして居るが、其の腕前といひ、見識といひ、不折の名を以て天下に行はれ、鬱然たる大家である。

既に大家となれば大したもの、北辰の其の所に居て衆星の之に嚮ふが如く、注文引きも切らぬ、併し然う注文許りに應じて居ては不折でない、午前中は面會を謝絶して書室に閉籠り、自己の研究をする、

午後は始めて注文ものに筆を染むるといふ工合、其の研究は裸體畫で、裸體研究を以

て萬事の基礎として居る、或る人が裸體研究も好いが、日本に應用乏しき裸體書を、上手になつても仕方ないぢやないかと言つたら、日本國中幾千百といふ畫家に、僕一人位裸體研究に委して貰つても好いちやないかと、成る程斯んな位に立て前が固い、其の懐いて來た三十餘金といふも、實は獨學で文字を識り、村の學校教師となり、何年かして蓄めた大金で、之が東京に出でよの學費、少來耳が遠いので、美術家にでもなりて身を立てやうと決心し、洋畫の大家小山正太郎氏の門に入つた、其の多くもあらぬ學費を儉約に儉約し、豫定以上の長日月を支へ、遂に頭垢面、寝ても起さずとも書と終始した、正岡子規、不折の非凡なるを聞き、日本新聞に伴つて來たのが名を得るの始め、其の技倆は新聞挿畫界を驚かした、日清戦争には筆を載せて從軍し、其の耳の遠くして剛情なるため、兵站官に叱られ、此奴横着な奴、雙の眞似をして居ると言はれた、眞似どころぢやない、實際に雙である、然れば折角の叱言も人が聞くやうには鋭く鼓膜に響かなかつたであらう、不折の剛情は有名なもので、之が變じて克己心となる、佛國留學のときも滿四年半、何人とも交際はぬ、學費は自分が貯蓄したもので、ホテルの一室に閉籠つて勉強に餘念ない、恐らく留學者中不折ほど勉強したものは居るまい、其の勉強に加へて、剛情、一人坊つち、技倆は上る、自然に人に悪まれる、又其の批評の深酷なることは有名なもの、人と喧嘩することも珍しくない、不折耳の遠い代り、視覺の發達は恐ろしい程で、爛々たる其眼、猫鳥の如く蒼隼の如く、一見して萬事を悟了し、人の眼と耳との働き以上をする、佛國から歸つて來て、ソツと袂から出す徑二寸大の金牌は、不折が勉強の功を證明したので、巴里競争場裡に第一等賞を得たのである、今度東京博覽會に出した出品も、油畫界を壓して之に越すものはないとの評判、不折の逸話については尙書くべき事が多い、其の學校教員となる以前の境遇も、儒夫をして立たしむるの概がある、併し今は何も書くべき時代でない、唯成功せる、否是れより益大成すべき不折として、極簡単に筆を止む。

(五十三) 日本第一の銅山家藤田傳三郎君

現代の實業家中、忘るべからざる一人は、藤田傳三郎君である。



君は長州萩の酒造家の子、幕末尊攘の論起るに及び、勤王の大義を唱へ、高杉晋作氏の手に屬して、屢々萩を襲ひ、九死に一生を得たが、天下一變、明治維新の鴻業成るに及び、同志争うて官途に就くの時君獨り意を決して商界に身を投じたは、既に其着眼非凡なりといふべく、且當時商業に志すもの、皆東京に集るに非ずんば必ず横濱に群れり、此の時君断然世の風潮に逆流して、旗を大阪に翻へしたるもの、亦その見地の一般流俗と異れ

るを見るべし。

世に藤田組あることは小學の兒童も尙且之を知る、其の成功の初め、用達、土木受負等に於て、尋常ならざる手段は頗る多かつたが、其の機智、其の膽略、君の如きは又求めて多く得べからず、今や功成り家富み、一切を男平太郎氏に任せ、自らは唯大綱を握り、居常骨董いぢりを娛みとす、現今の業務としては、農業、林業、鑛業の三者にして、兒島海の開墾は既に一千四百町歩を得、追つて七千町歩を得べく、前途大農式一大模範場たらしむべき計畫である、林業は臺灣の阿里山を買収して經營しつゝあり、鑛業は二十四五箇所あるも、小坂銀山、瑞芳金山、大森銅山は其の大なるものにて、就中小坂の銀山よりは多量の銅を出し、一種の分析法を發明し、又世界一と稱する直徑六十尺の鎔鑛爐を据附しかば、探銅量日に増加し、昨年の産額は七百餘萬圓に達し、本年の推算は一千萬圓を超ゆべしと、是に至つて古河も住友も及ばず、藤田は日本第一の銅山家たるべし。

君の風采は寫眞の示す通りにて、何とか評するものもあるが、併し少より親に孝、今又富を私するは志にあらざるで、縁戚親類を集め、之が世話を爲せりと、此の一事尋常富豪に見ざる所、更に此の意を推擴して大に社會に盡さば、富豪の富豪たる所、以て憾なかるべし。

(五十四) 海軍大將山本權兵衛君

明治十年、西郷南洲が鹿兒島に兵を擧げた時は、山本權兵衛は海軍兵學校の一生徒であつた、氣鋭の少年、慷慨淋漓として、



り、前後になき憤りを發せしめたといふ、この傍若無人の横着な君が、天下中で怖

あつた、氣鋭の少年、慷慨淋漓として、同郷の東郷平八郎と相携へて翁の下に走り、事に従はんことを請ふ、南洲曰く寧ろ、事に従はんことを請ふ、南洲曰く、今君の學を修めて他日國家に貢獻すべし、風雨二十年、當時南洲の敵に唯々として去つた此寧馨兒は、南洲の弟君たる従道侯より、海軍大臣の事務引繼を受けただのである、其の引繼の當時煙草を吹かしながら遣つたので、流石大腹従道侯の如きをして、人を人とも思はぬ引繼ぎ振

いものは馬ばかりといふに至ては珍といふべしだ、陛下或る時君を顧みてのたまはく、世に卿の恐るべきものありやと、西郷侯座に在り、彼れの恐るゝものは馬なりと奏す、陛下笑うてのたまはく朕近く房州に遊乗し卿を供はんと欲すと、君對て、臣職を海軍に奉ず、冀くは水雷艇に乗じて海路供奉し申すべしと奏し、龍顏爲に麗はしかりこの美談が残つて居る。

君は鹿兒島に生て、郷黨の餓鬼大將を以て推され、長じて上京し、海軍兵學校に入ては、常に賄征伐の大將を以て任じ、後大尉に進み獨逸に留學するに及んでも、尙麥酒倒の名將を以て、毫も其操行を改めなかつた、然るに在獨の一日、翻然として悔悟し、これより酒を廢し、行を慎み、大に學と親しんで、その智囊を豊かならしめ、海軍省に入て主事となるや、早く既に權兵衛大臣の稱を得た、後愈々大臣となり、君の才幹伎倆は遺憾なく發揮されたのである、大隈伯爵て君を評して曰く、海陸軍部内第一等の人物なりと、尾崎行雄氏も亦君を評して曰く、未來の總理は山本權兵衛なりと、世諺に曰く、權兵衛が種時さやあ鳥がはじくると、柴山大將時に此の鳥に當りしが、君の敏腕は、鳥をして遂に十分にはじくるの機會を得せしめずして今日となつた、君既に大臣の職を退くも、尙海軍部内を壓する、以ありと謂ふべし。

### (五十五) 樂器製造の嚆矢山葉寅楠君

明治十八九年の頃、遠州濱松の小學校教員には高等師範の卒業生が二名まで備はれ、高等科の英語教員には外國人が來る、隨



つて其の頃、既にヴァイオリンやオルガンが教場に備へ附けられるといふ始末、今から見れば随分突飛な沙汰もあつた、當時同地の學務委員は樋口林次郎といふ人、非常な教育熱心家で、唯一の道樂は義太夫をうなることであつた、この頃垢に汚れた浴衣一枚を身に纏ひ、ブラリと濱松の木賃宿に流れ込んだ風來人があつたが、其三味に巧なるを聞き、樋口氏一目これを呼んで棹を取らしめ、得意の一段を語りしに、律呂能く調ひて頗る氣に入り、直に招いて食客とした、偶小學校の

オルガン破損し、音を發せざるに至りしかば、この食客は樋口氏に伴はれて學校に赴き、全く未経験のオルガンを解剖し、一二日の後修繕を加へて、元通りの音を出す様にした、此天稟の伎倆には、一同舌を捲いたといふが、此風來人こそ今は六十萬圓の大樂器會社の社長たる山葉寅楠君である、これより君は西洋樂器に興味を生じ、非常の苦心と幾度の試作の後、遂に完全の一器を作り、之を携へて東京音樂學校に抵りて、同校教職員を驚かしたといふ事だ、其の後二十二年には始めて三萬圓の合資會社を興し、三十年には十二萬圓の株式會社に改め、三十八年には二十四萬圓に増資し、更に去月の重役會に一躍六十萬圓の會社とするの決議を爲し、こゝ數日の間に、臨時總會を開いて、愈正式に之を決するといふ順序に運んで居る。

樂器會社は少くないが、日本で西洋樂器を製造した嚆矢は君で、西洋樂國を外國に輸出した始めも亦君である、君が單衣一枚の素寒貧より今日の成功を爲したは、固りその天才にもよらうが刻苦研究の勞はその成功の大部を占めて居らう、君は七八年前樂器製造所視察の爲、西洋を漫遊したが、君は一語を解せず、全く啞の旅行で、到る處に滑稽や失敗を殘しつつ、意張り返つて歐山米水の間を濶歩して來たなどは、其のさかぬ氣の性行にもよらうが、一には一心不亂の研究熱に驅られたのであらう。

(五十六) 特志家ハンナ、リーデル嬢

この間癪病豫防法案が貴族院に出た時、野田裕通男が熊本に癪病が多いと言ふのは、



我が縣を辱かしむるものだ、熊本には清正公があるので、癪病患者が諸國から集まつて來るのだと辯じて、一場の愛嬌を買つた、成る程さういふ理由もあらう、シテ此の清正公を頼りて熊本に集る癪病患者は決して少くない、聞くさへ慄然とするこの不治の患者を對手に、恵みの親となつて、日夜其救済に全力を傾注して居るのは、ハンナ、リーデルといふ繊弱き英國の一婦人である、嬢が傳道會社の依頼によりて我が國に來朝したは、去明治二十三年であつたが、一日本妙寺に詣で、時しも彌生の空

麗らかに、段階を挟める數十株の櫻花は、今を盛りと咲き匂ふその下に、見る影もなき男女數十の癩病患者が蹲つて、参詣人の恤を乞ふを見、惻憐の情頻に動き、一切の経費を自辨して、患者の救護に着手し、後故國の友人知己の賛助を得て、熊本市外黒髪村に四千坪の地所を購ひ、日本風の病院を建築し、回春病院と名づけて二十八年の十一月を以て開院の式を挙げた、降つて三十四年の五月には本妙寺境内に出張所を設けて、外来患者の施薬を始め、更に本年の四月よりは、地位ある患者の爲に、一棟の離隔病室を建築し、浮世の外間を離れて、心静かに病を養ふを得せしめんと、その設計に着手するなど、嬢が身心は凝つて、今此の救済事業に固められて居る、開院以來の入院患者、五百餘人、今日迄に費やせし所五萬餘圓、一箇年に要する經費は六千圓との事だが、此の金は總て嬢の熱心から生み出すのである、熊本縣會が三十八年の十二月に、満場一致を以て千五百圓を贈るの決議を爲し、翌年一月には藍綬褒章を授與されたるは偶然でない。

(五十七) 外務大臣林董君



今の閣臣中で、一番功名の念に薄きは外務大臣林董君であらう、君は平淡醇正、殆ど

他の奇なき君子である、而してそれが又君の人物の大きい所で、人と争はず、人に傲らず、又敢て人を抜かんことにも熱中はせぬ、随つて君の處世には無理がない故、君の歴史は緩なれども順境である、譬へば君の性質は水の如し、水なれども岩に激する谷川の水に非ず、舟を流さんとする急湍の水に非ず、怒濤澎湃たる大海の水に非ず、築山に相對し鷗鷺を泛べる

池の水なり、然れども亦其の池は風流以外何物をも解せざる小池には非ず、君會て知



事以上の抱負なと言へるも、次官となつては次官以上たり、公使となつては公使以上たり、外務大臣となりては、陸奥伯以後の外務大臣と評せらる、蓋し廣くして且深き池に非ずや、以て風あれば船を行るべく、網を投すれば大魚をも獲べし。

君は幕末の蘭醫佐藤泰然氏の子にして、夙に英語を學び、幕府の留學生として中村敬宇、菊池大麓、外山正一氏等と英國に遊び、歸朝後榎本武揚氏に従つて箱館五稜廓に辛酸を嘗め、獄裡の生活二年、赦されて陸奥宗光氏の食客となりて、紀州藩の改革に従ひし時は尙廿二歳の弱冠、此後に於ける君は伊藤侯、陸奥伯と知られて累進官歴を経、入ては外務次官となり、出ては外交官として、北京、聖彼得堡、倫敦に多年の生活を爲し、日英條約の締結者としては、特旨を以て子爵に進められ、大使に昇進して、後数月、小村男と入れ替りて外相の椅子に倚れることは、人の能く知る所ならん。試みに君の容貌を見よ、豊かなる其の頬、穩かなる其の眼、上品なる其の鬚、凛たる面容、一見戰勝國の外務大臣たるに恥ず、而してその心術亦容貌と酷似するに於て、誰れか君を新進國の紳士の典型となさざる、さば言へ、長所は短所なり、大隈伯爵て君を評して曰く、好漢惜しむらくは事に冷淡なり、是れ彼れの病なりと、君に著述あり、ミルの經濟書、刑法論綱等は世を益せしこと尠からず、近時又マキアベリーの名著を譯して讀書界を騒がしたり、伊太利史でもタントの違ひはないが、實は羅馬史論である。

(五十八)

濠洲貿易の開祖兼松房治郎氏

裸體一貫より仕上げて、濠洲貿易に先鞭をつけた兼松房治郎氏は、本年六十四歳、弘化二年愛知縣丹羽郡布袋野村に生る、赤貧



洗ふが如きが上に、幼にして両親を喪ふた彼れは、年甫めて十一、京都に出で、さる乾物屋の丁稚小僧となつた、是れ抑も其の奮闘的生涯を始めた第一歩で、非道い主人にかゝつて具さに困苦を嘗めたが、美事三年の年期を勤め上げ、其の忍耐力は更に勞働さへすればと云ふ自信となり、其の自信は此の小僧をして江戸に走らしめた、元より無一文、途中で殆ど往き難れにならうとした處を、ある旗本の武士に助けられ、雲助役の荷物持となり、幸く江戸に着いたが、更に行き所もないの

で、料理屋の出前持、酒屋の樽拾ひをする事一年許り、不思議にも再び先の武士に救ひ上げられて、その家の門番となり、進んで小侍に進められた。

かくて世は明治の新天地となつた、彼れは腰のものを投げ出して、種紙商となり、横濱商館を経て輸出を試み、當時二十四の少年としては相應の資産も出来たが、経済界の大變動で、又元の素寒貧になつて了つた、で今度は詮方なく、名古屋の三井兩換店に入つて月給八圓の腰辨となり、前後八年間辛抱した結果、遂に見込まれて其の大坂支店の支配人となつた、運命は多く忍耐より開拓せらる、かくて彼は居然として、大阪實業界の一人物となりすましたのであつた。

其の間彼は大阪商船會社創立、取引所制度改正等に特に盡力したが、彼れの抱負は此にあらすして彼れにあり、遂に去る二十年決然として其の地位を抛ち、邸宅を賣り飛ばし、妻子は人に託し、一振の太刀を伴侶に、飄乎として濠洲に去つた、居ること約二年、略成算成りて歸り來り、愈濠洲貿易を始めたのである、二十三年再び渡航し、シドニー等に支店を設け、爾來奮勵今日に至つたのであるが、其の成功の跡を徴せば實に苦辛慘憺たるものがある、而も彼れは此に厭らず、去る三十四年親ら滿洲を視察して以來、今や盛んに滿洲貿易をもやつて居る、果然彼れは尋常一様の凡物ではない、以て學ぶべき所多からずや。

(五十九) 吳鎮守府司令長官山内滿壽治君



露西亞の海軍を殆ど全滅に歸せしめた帝國の海軍は多士濟々である、而も特に記する

を忘るべからざる、最も功多き過去を、最も望多き未來を有するは、現吳鎮守府司令長官海軍中將山内滿壽治君である。

君の家は熊本の出であるが、君は東京で生れた、東京人は竹を割つたやうに、氣持はよいが意志が薄弱である、其の部下が君に走つて急を告ぐるや、君は決して首を振らない、必ずその希望通りに黄白を與へて、其の小さき心を満足させる、友人親戚の私情に對しても亦然り、其の派脆き所は隠すに隠されぬ東京氣質である。

る、君の一面は確に此の派脆き點に顯はされた、しかし之れを以て君の全幅としたら

ば、开は大間遠山は峨々たれども、濼々たる清流が、其の間に流れる、君は姓の示す如く峨々たる山である、其の派多きは山の内を流るゝ一派の清流に過ぎぬのである、君の人物の特長は度量の大きい所にある、意思の強大なる點にある、其の襲に吳鎮守府工廠長たるや、部下皆靡き、言ふ所總て行はれ、威權をさく及ぶものなく、宛然吳の殿様であつたも無理のない話、山本前海相は最も能く君を知る者である、此海相の下に海軍大擴張案を議す、實に君の意見に出るもの多く、又當時海軍製艦造兵の大方針は、海相と君との方寸より出で、且其注文は多く君の手に依つて成されたのである、是を以て時人或は製艦費に關し君を非議する者もあつた、君此笑一番、「むゝコンミッションか、ハア、取るかも知らんよ、よし取ても世間に笑はるゝやうなことはハア、一笑に附し去て意に介せず、以て其の海軍に於ける勢力を推すべく、又其の人物の一斑を測るべし。

此の如き人物の特長と相對して、君には他の眞似すべからざる伎倆の特長がある、君は出身の始めより兵器に長するを以て自己の天職とし、遂に卓然として及ぶものなき兵器家となつた、吳の工廠が今日の如くなつたは、全く君の力である、從來日本で出来なかつた鋼鐵製造を發明したのも君である、嘗ては某兵器を發明して、之を英國アームストロングに賣却し、今では年收五萬圓を得るといふは他の軍人には類例のなき事、日露の役には出征はしなかつたが出征した人に譲らぬ貢獻をしてゐる、過般齋熊本藩主細川護成侯が吳鎮守府を巡覽せられた後、君に名刀一振を贈つた、君太だ之を喜んで曰く、勳章はイクラでも貰へるが、名刀は滅多には手に入らないと、言簡なりと雖も、亦以て其の抱負が知らるゝではないか。

(六十) 攝津大掾二見金助君

大阪府平民二見金助と云つたばかりでは一寸分るまいが、竹本攝津大掾と云へば日本



中恐らく誰れ知らぬものもあるまい、彼れは今より七十一年前、天保七年大阪順慶町塗物問屋伊勢屋に生れたのであるが、故あつて五歳の時、大工の棟梁二見伊八に養はるゝこととなつた、普通のものならば、矢張大工になる所であるが養父が當時素人淨瑠璃の天狗であつた所から、彼れは親類ぢやない養子だけに、日二段も三段も聞かせられたので、此の養父の下手のよこ好きなる素人淨瑠璃は、端なくも彼れにとりては好きこそ

の上手なれど、アベコベに彼の聲曲的天才を發揮するの緒となつたのである。

六七歳の折には口巧者に真似語りをするやうになつたが、養父は之が頗る自慢で、十一歳の頃から慰み半分、三味を習はせたが、之から愈々淨瑠璃が面白くなり、上手なり、本職の大工の仕事などは手につかず、養父も大に心を悩ました。彼れは遂に決心し、三代目野澤吉兵衛の門に入り、到頭藝人となつたのである。彼れは寧ろ三味線引きとして立つたのであるが、二十二歳の時吉兵衛に見込まれ五代目春太夫の弟子となり、竹本南部太夫と云つて出ることになつた。是れ彼れが藝人として社會に出た初めである。

後四國九州諸方を巡興して江戸に抵り、同時に二代目越路太夫と改名して寄席に出たが、其の天來の美音に江戸八百八町の子女を恍惚たらしめ、此の時よりして二代目越路太夫の名は漸く高くなつたのである。併し此の間の彼れの苦心は非常なもので、毎夜人氣なき廣場に出て稽古し、辻番に狂人と間違へられたる事は度々であつたと云ふ、かくて又大阪に歸り、一時住太夫と名乗つた事もあつたが、直に又越路となり、後又九州邊を廻つて、技倆は益々上達し、慶應三年始めて文樂座に出勤することとなつて、名人玉造、紋十郎の人形と相待つて、其の盛名益々揚がり、去る三十六年の春先師春太夫の名を襲いたが、間もなく小松宮家から攝津大掾の名と共に、素袍と烏帽子を賜はるに至つて。此の寫眞は即ち彼れが此の素袍を着け烏帽子を被つた大掾の正装である、其の山寺の和尚然たる秀でたる眉毛、其の豊なる顔面、親しむべき眼元、其の容貌の名人に恥ぬ如く、其の人物に於ても亦一頭地を抜いて居る。師を敬ふこと深く、出勤の時必ず其居室に掲げある春太夫、吉兵衛兩師の像を三拜すると云ふことで、其弟子に厚いのはもとより、素行の謹嚴なるは誰も感心せぬものはない、殊に宗教心に富み、早くより無住教を信じて、少教正の教職に居ることは一寸知るものはない、尙文筆の嗜みありて墨畫を好くすることは、何處まで器用に生れたのであらう、彼はたしかに大阪の一大産物である。

(六十一) 駐英大使小村壽太郎君

體格偉大の歐米各國公使の腰巾着のやうな風采で、北京の外交界を、抜目なくチヨロ



人物畫傳

で、入京後參内 陛下に咫尺して和戰の機を奏上した、此の謁見が頗る開戰説に力を

與へ、間もなく砲聲を聞くに至つた、是より彼れの名は隆々として外交社會に頭角を顯はした。  
 日露の大役は、ともかくも彼れに依て料理された、しかし鼠は機敏には相違ないが、年數を経た悪性  
 のドラ猫に遇つては頭が上らない、けれども窮鼠却て猫を噛むといふ譬もあるから、小村は或は奇手  
 を用ひてウキツテを斃さぬとも限らぬと思つたが、ヤツバリ悄然として霞ヶ關に引揚げて來た、しか  
 し此の一事を以て彼れを葬つてしまふのは公平でない、彼れは固く日英同盟の反對論者であつたに拘  
 らず、一旦時局の必要に際會するや、善く形勢を誤らずして、林公使と内外相應じて日英同盟を締結  
 したは、確に没すべからざる功である、彼れは今林氏と入れ替つて同盟國の大使たるを見るも、内外  
 彼に囑するの如何なるかを知るに足らん。  
 彼は其の容貌に似ず、磊落快澗で、座談はアマリ巧ではないが、淀みがなくて氣持がよい、外務省  
 の屬僚時代は首も廻らぬ借金で、日夜高利貸や執達吏と樽俎折衝してゐたが、今は全くなくなつた様  
 子、その機敏の外交術も此の間に得たところ少からざるべしとは、必ずしも悪口ではなからう。

(六十二) 俳人としての大谷光演君

近三四年、日本派の俳句界に、一人の出色の俳人を出した、姓は大谷、名は光演、俳  
 名を句佛といふ、世間では位正五位を辱  
 うする大谷伯爵家の令嗣、出世間では昔  
 生佛と崇められた東本願寺の新門主、  
 どういふ動機が俳句に志したかは知らぬ  
 が、本願寺の政治舞臺に於ける失意は、  
 その嗜好を驅りて三昧に入らしめたので  
 あらう、俳句に趣味を生じた始めは明治  
 三十二年頃で、此の間物故した奥村五  
 百子に「散る時が浮む時なる迷かな」の  
 句を書き與へた頃は、まだ月並の臭味を  
 脱しなかつた、其の後盧子に添削を乞ひ、



碧梧桐に指導を受け、三十七年頃よりは四明等と共に悪葵を發行した、本願寺の門跡

様といへば素破らしい權勢のものだが、君は一體平民主義で、少しも様體振るやうなことがない、時に、星ヶ岡の茶寮などで句會を催したこともあるが、大抵は五目飯位な御馳走で、簡素な句會を開かれる、年に二三度は北陸關西九州などを巡教するが、此の時には常に詩藝を充たして歸山するのが例で、汽車の中などでは殆ど俳句三昧に入て、俗物の隨行僧を驚かせることは珍らしくない、得意の句には傑作がない、これは自我の混じる故であらうとは君が常に言ふ所である、講傳子は俳人でないから、君の句を監誦するの明はないが、君が他力眞宗の本領を詠じた左の四句は、恐らく注意に値するものであらう。

安心 船人の應と答へし臆哉 報謝 海一里耕にくる小島哉

師徳 音なくて湧井戸溢る春の水 法度 蒲公英によけて通りし轅哉

碧梧桐等にきくと、君の句の特長は其の俊美な點にあるとの事、こゝまで徹到するには随分苦心したものだ、殊に蕪村句集は、その最も愛誦する所で、殆ど全部を暗記して居るといふ、今年の元旦の句は

朝家の御爲の念佛四方拜 元日にめでたきものは念佛哉

の二句である、宗教家の句として精神がある、西本願寺法主の豪邁瀟灑と比して善きコントラストであるが、本願寺の法主としては、此上人の方が徳があること、門葉信徒は渴仰の首をうな垂れて居る。

### (六十三) 人界の怪物頭山満君

『九州より己れ一人ならば代議士に爲らう』と言つた頭山満君は、終始其の抱負と見識を失はず、常に其の乾兒を代議士に出

して、自分は酒呑童子の如く、大褌袍で大江山ならざる江戸の大俗の市井に隠れて居る。



彼れは玄洋社の頭領で、子弟三千を養ひ、大西郷の二の舞をやつて、何時でも謀反する氣構へをした、其の初め前原の時には江藤の時にも色めき、西郷の時には遂に捕はれて三年幽囚の身となつた、或る人が彼れの人相を觀て、劍難の相があるといつたさうだが、自分には劍難がなく

て、人に劍難を負はするの相なのだ、來島恒喜も彼れの門生で、高田早苗に斬りつけ

たも彼れの門生、其の外刺客と爆裂弾なら、何時でも彼れの門から飛び出るといふので、彼れは表面政界に立たなくも、其の勢力といふものは非常なもので、藩閥者流を震慄せしめたのである。彼れは山に入りて薪を採り、自ら擔うて之を市に賣つた事もある、安場保和氏が知事として赴任したとき、一番に訪問したのは彼れで、深夜手を握り、胸襟を披き互に相許した、彼れは陽明學を修め、禪を修め、頗る手に入つて居る、途中物賣りの行く後から、思はず識らず其の擔つて居る梯實一つを摘み取り、伴れのもの驚いて戯譚じちや不可ないと注意した事がある、注意されて自分も始めて気がつき、全く機を忘れて居つたとの事。斯んな工合で、彼れは物に頓着しない、故に一貧洗ふが如き時もある、巨萬の財を懐き、誰れにでも撒いて遣る事がある、或る人が彼れに金の無心を言つたら、十圓札を束ねたまゝ袖から出して、幾干要るかと言つたので、只指で重ねたまゝの札を測り、何の位の厚さを要るかと言つたさうな。

彼れが風流豪奢の遊びも有名なもので、鳥森濱の屋は彼れが宿陣である、下女に祝儀を遣るにも、袖から手あたり次第であるから十圓中るものもあれば、五圓もあり、一圓もあり、乃至は鼻紙一枚もある、彼れは堂々たる偉丈夫、寡言沈黙、一見山賊の親方の如きも、其の實高尚な氣品を有し、治平の世には用ゆるに所なく、亂世より取殘され、誤つて今日に生れ出たもの、近時其の名を聞かざるは、彼が慢性の胃病に悩まされるに由らんか兎に角一世の怪物なり、豪傑なり、而して眼の小さくて涼しき所、非常の智を藏するに似たり、之を物に譬ふれば、獸にもあらず、魚にもあらず、而も巨大の魚族獸族たる鯨の如きものならんか、然り彼れは犬器犬材を有し、遂に用ゆる所なき人間界の巨鯨なり。

(六十四) 陸軍名物の島川文八郎君

食ふことも一番、飲むことも一番、遊ぶことも一番、喧嘩することも一番、從つて罰



喰ふことも一番、其の癖學課の出来ることも一番で、最優等の成績を得、士官學校を飛び出した一番盡くしの名物男は、當年の島川文八郎君である。

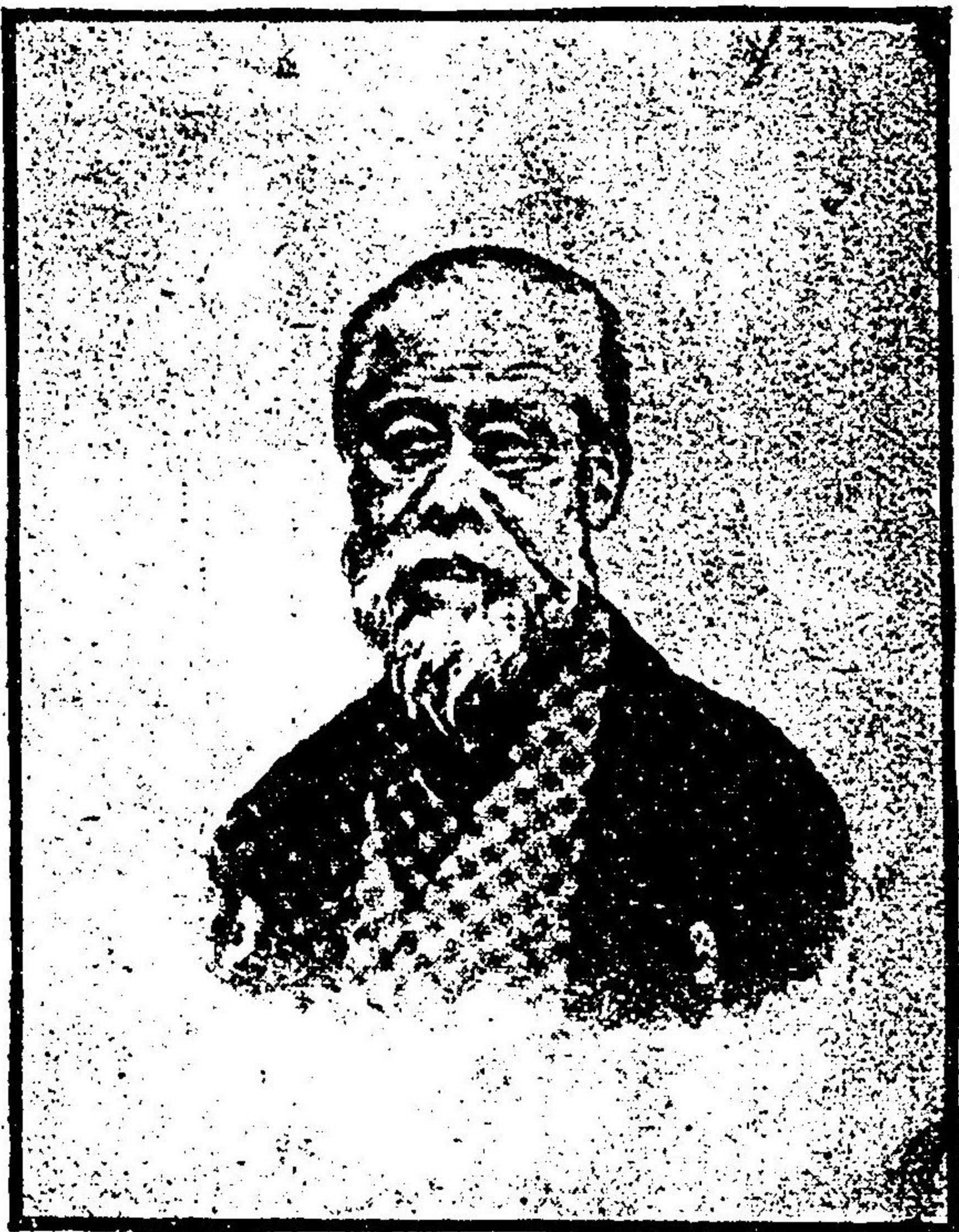
君は勢州津の人、士官學校を出たとき直に中尉に任せらる、之は頗る異例である、性豪放磊落、而も頭腦明晰緻密、頗る計數に富み、技術上の發明に長ず、然れば卒業後、隊附にはせられないで、常に砲兵工廠技術審査部在職を命ぜられた、後佛國に留學し、一種の無煙火薬を發明し、

歸朝後目黒の火薬製造所長を命ぜられた、時宛も日清の變端を啓き、同僚皆出征す、

君の性質として内地に留るを欲せず、屢次出征を願ひ、駄々を捏ること夥し、時の陸軍次官兒玉源太郎氏、やつこの事にスカシ慰め、之を引留たりといふ、斯な工合であるから、日露戦争と来ては、何條内地に留るべき、偶留守師團參謀長に任せられんとしたる時、參謀なんぞは馬鹿の爲る仕事ぢや、この奇言を吐き、到頭砲兵第三聯隊長として出征した。

出征後大得意の状は、時の從軍記事にも見えたるが、君戰場に在りて常に大言奇語を放ち、同僚より「又島川が饒舌つちよる」と言はれた、敵の進み來るも悠然として動かす、指揮命令の能く中りしは陣中の評判なりき、或時支那人に金を遣つて藥莢を拾はせたなど、他人の思ひつかぬ周到の點もある、奇なことには毎朝敵に向ひ、一發の大砲を放たねば氣が濟まぬとて、對陣中にも聯隊長専用の大砲一つを設け、砲壘を築き、自ら照準して敵に向ひ、一發ズドンと遣るを娛みとせりと、其の部下を愛すること兄弟の如く、一兵卒とも卓を興にして酒を飲み、其の腕力の強きことは有名なもので、其中尉時代に時の全盛なりし横綱小錦(三十二貫)を抱き上ぐるもの全隊中君一人で、今日も尙腕力を忘れず、戦地にても内地にても、兵卒を對手に角力が何よりの樂み、角力の次は酒が第一の樂み、今は病氣で飲めぬと云つても、二升位は平氣なものだと、斯んな鹽梅だから、島川は別人物と云はれ「世界の五大人種の外の島川人種」と噂さるゝさうだ。其の發明した無煙火藥は、我が陸軍の専用である、又有坂砲と云つても、發明は有坂少將だが、之が審査委員たりし島川氏の改善補修を待ち、有坂砲の今日あるに至つた、して見れば其の功は有坂氏一人のみではないのである、兎まれ五大人種以外の一人種は珍の又珍、陸軍の名物ではないか。

(六十五) 紳商森村市左衛門君



紳士紳商といふ語は、今や一箇の通用語となつて居る、濡れ手で粟のつかみ取り、一夜に仕上げた成金大盡でも、大きな顔して紳士と稱し、紳商と呼ばれる、明治の社會の寛容の美德に富むには感々服々の次第だ、そのゴロ／＼箒で掃くほどある紳士紳商の前に、特に紳商と銘打て森村君を掲ぐる所以は、聊か紳といふ字を復活させたい、所謂紳士連から見ても迂濶の沙汰の説法だ。

決して勘定ちがひはありません、人ばかりを當てにして、人から禮をいはれやうとか、



人から褒められやうとか、是れだけの事をすればかうして呉れるだらうとか、骨折損になりやしまいかとか、そんなケチな考へで仕事をして居るやうでは、決して大きな者にはなれません、又曰く私は一切頓着せず、唯何かなしに天に貸すのだ、天に預けるのだと思ひ込んで、今日迄働いて来ましたか、天は如何にも正直です、三十年間貸し續けたのが、今日現にどん／＼歸つて来るやうになりました。君の人物は、この一語で盡くして居るが、尙少しく附加したい、森村組といへば、日本第一の貿易業、誰知らぬものはない、紐育の支店には百名以上の店員を使つてゐて、其三分の二は米國人である、而してその米國人の中には勤積二十年の者がある、この一事で森村組なるものが、只利の集りに非ざることを説明して餘りあらう、君が直輸出業を始めたのは明治の八年、令弟豊氏を米國に送つて紐育に一小店を開かした時である、豊氏も亦兄の氣象を受けて、公共の精神に富み、兄弟異郷同狀、兄が東京の真中で草鞋穿きに尻端折りで、大風呂敷を背負つて商品の仕入に奔走すれば、弟は紐育の停車場に荷車を挽いて出張し、送品の受取、荷ほごき、賣込を一手で取捌く、といふ有様、惜し哉豊氏は中折したが、君は三十年の久しき、遂に今日の盛運を來したのである、君の今日あるもの、蓋し君の所謂「金の所在は外ではない、人の利益になる、その影に蔽れて居ります」といふ積善の餘慶である。

(六十六) 東京市長尾崎行雄君



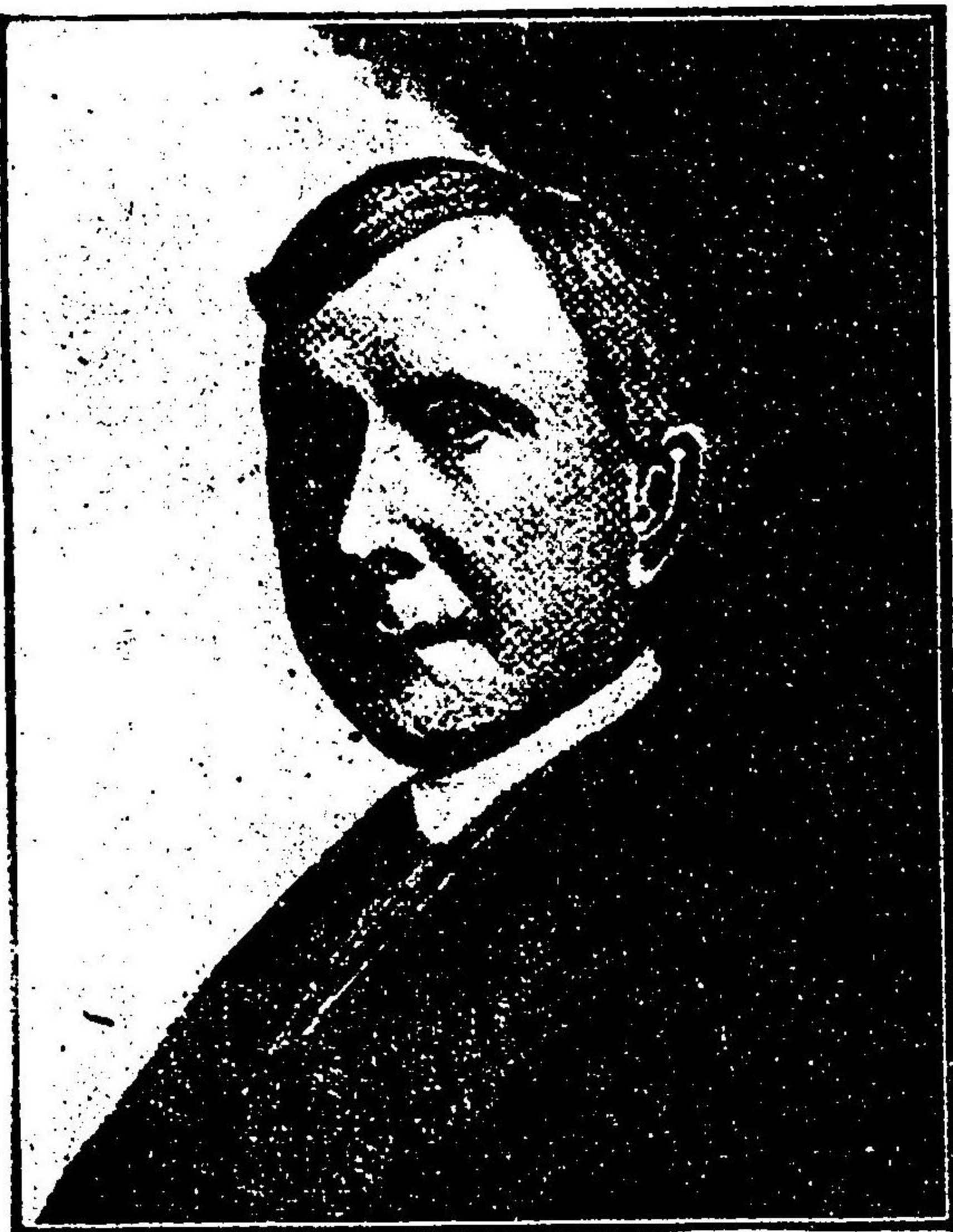
日本一の豪傑は我輩でござるの大氣取には、少々中てられざるを得ぬが、此の男元

來無邪氣で、潔白で、雄辯で、能文で、そして案外骨が硬いから、いつも政治界の人氣役者として持て囃されて居る、しかし議會で官紀振肅の大演説をやつた當時の尾崎と、飛入の外様で院内總理として切廻した當時の學堂とは、今日に見ることが出来ない、マサカ、君が人の中てゝ如くに、テオドラ夫人に中てられたといふ次第でもなからう、君自身はチヤリを氣取て居るが、世間では却てチヤムパーレインに較べるものがある、チヤムパーレインは、パーミングハムの市長をしたから、市長といふ點は似て居るが、性

格に至つては少しも似てゐない、チャムパーレーンは目先の早い、時代精神に推移する事にかけては、殆ど天下第一品の政治家だが、君の頭ではソナ器用な融通は利かない、君が廿年苦節の政友をふり棄て、政友會に加はつたは、變節でも、無操守でもない、間もなく政友會を脱したのは氣變りでも變心でもない、要するに君には前後一貫の理想があつて、その理想を餘り大事にし過ぎる爲に、屢境遇の變化を來たすのである、是れは無節操でなくて、却て君の節操であらう、只不思議に感ずるのは、東京市長として、君が幾多の我利々々旨者に苛められながら、意氣地なく辛抱してゐることである、電鐵市有案の撤回などは、君に取ての大侮辱ではないか、學堂とも言はるゝものは、モチツト、骨ツ節を硬くしても、いえてえと腕を振してゐる江戸ッ子もある、君嘗てかういふことを言つた、我が輩の生涯は恰も隧道の多い鐵道旅行をするやうなもので、時々暗黒の處に差掛つては、再び前途に光明を認めて、ヤツト安心することがあると、君は或は隧道に怖氣がついたのかも知れぬ、しかし隧道の先には光明があるが、隧道を怖れてゐると汽車は脱線する、君のやうな主義の人は、ドコ迄も大道に敷設してゐる鐵路に據つてもらひたい、暗黒と光明とは寧ろ關する所でない。

### (六十七) 石油王 ロックフェラー氏

米國第一の金満家にして、第一の不人望家は、石油王ロックフェラー氏其人なり、其の



不人望なるは、金持ちにして吝嗇坊だからである、ロ氏よりも金力に於ては下位に居るカーネギー氏が、ドシノノ公共事業に財を抛ち、其の高既に二億八千萬圓以上に上るに、ロ氏と云つたら十四億以上の富を有し、其公共事業に投ずるものは、年々シカゴ大學へクリスマスの贈物として僅かに二百萬圓を寄附したのみ、日本でこそ二百萬圓は大なれ、米國の社會にして、而もロ氏の富にしては、人の指彈を招く所、其の不人望なるも勿論で

ある、然るに近五六年以來、ロ氏は何を感じてか、他の公共事業に寄附する事を始め、

地方高等教育資金として、一度に約我が六千四百萬圓を投じたことあり、流石は世界の大金満家の事として人の耳目を驚かし、人氣も大に回復した、氏が今日迄寄附したる金額は約我が八千六百萬圓に達し、シカゴ大學のみにも合計三千四百五十萬圓餘に上る、又近頃米國よりの電報に據れば、ロ氏は死後二億五千萬弗(我が五億圓)を教育及び慈善會に寄附するの遺言書を作製しつゝありとあり、流石はロ氏にして名譽回復も勿論、決して尋常の守銭奴にはあらざりしなり。

氏の富は米國一と稱へられ、昨一年の収入のみにも無慮一億二千萬圓ありしことは、氏の親友にして亦金満家たるロージャー氏の語る所、此の一億二千萬圓の収益を一月に打算せば、一千萬圓となり、日に三十三萬三千餘圓となり、晝夜を通じての一時間に一萬三千九百圓となり、一分間に二百三十二圓、一秒間に三圓八十五錢を儲けつゝあり、ア、一分間一秒間、職工の何人前、何十人前乃至何百人前分を取つて居る、エライと云はんか、馬鹿らしいと云はんか、日本には斯る偏傾な金儲けは望ましくなきものなり、ロ氏以て如何とす。

(六十八) 新井白石

明暦三年の振袖火事は、江戸市中の大半を焼燼し、人心洶々、鼎の沸くが如き間に、



内藤右近太夫、柳原藩邸の長屋内で、一人の火の兒は生れた、康熙帝に同じ千支と、由井正雪に似たる容貌とを以て。

火の兒とは藩侯土屋民部少輔が附するの、幼名謙を爲し、彼れは火の如き性格を以て、火の如き一代を選じた、蒼顔如し鐵髪如し銀、紫石稜々電射し人、五尺小身渾是膽、明時何用畫麒麟、一篇自讚の詩以て彼れが全幅を説き明かして居る、火の兒、字は在中と呼び、號を白石と稱す、姓は新井、名は君美。

蛇は寸にして人を呑む、彼の少時、富豪河村瑞賢、三千金を積んで、彼を婿に求む、

一三六  
彼傲然答へて曰く、昔靈山の小蛇は人の爲に微傷を蒙りしが、一朝一丈餘の大蛇と變じ、一尺餘の大傷となりて斃れたり、今の三千金小なりと雖も、此の微傷の爲に、子の後來の大名に大傷を被らせんことを欲せずと、かくて彼は甘んじて世路の艱難を嘗め盡した末、三十七歳の老窮措大を以て、俸米四十人口の小祿に甘んじ、甲府公に出仕する身となつた、され、彼れが雲蒸龍變の機會は、この時に孕んだのである、やがて甲府公綱豊は將軍家宣となり、彼れまた殿中の人となり、のち、進んで、從五位下筑後守に任せられた、雲を得し龍の、思ふさまに風を起し、雨を喚び、鬼と稱せられて殿中を震駭せしめたが、正徳元年の朝鮮聘使の應接は、恐らく彼れが一代を飾る花の舞臺であつたらう、進見の式終りて賜宴の一段となるや、聘使白石を辱めんと、銀管を推し獎めて、那用此煙管、蓋我錦繡之屬と、言はせも果す、白石、試用此煙管、融我鋼鐵之屬とやり返した、火の兒は飽くまで火の兒である、惜哉、家宣の中折と、家繼の早世とは、前途海の如き希望を葬つて、内藤新宿の拜領屋敷に世事を抛ち、「わかき時よりの名譽ふつゝあきはて候」との遺懷を残し、享保十年五月十九日、六十九歳を一期として本來空に歸してしまつた、進莫、九年の殘生は、白石をして、死して死せざる人たらしめたのである。



(六十九)

東京音樂學校技術監督幸田延子女史

實際の技術較べをしたたら、藍より出でる藍よりも青きがあるかも知れぬが、ともかく

も今日では、幸田延子女史は、日本女流音樂家のオリソリチーといふことになつてゐる、ソレは女史の天才及び技術が非凡であることは言ふまでもないが、東京音樂學校技術監督といふ位置が、少からぬ援護者であらう、東京音樂學校は現今日本に於ける唯一の音樂學校で、亦頗る金のかゝる、そして亦最も難物の學校である、その難物の源泉は女史で、代々の校長が女史の鼻息を窺ふやうな形勢があるのは男らしくない、音樂學校の御備外國教師の内、一番有力で、一番勢力あるのはエンケル氏であるが、巧慧なる氏は、此機微を洞察して、早く女史と結託したから、鬼に金棒、今暫くは尙女史の時代は去らぬであらう、然るにオルガン専門の島崎赤太郎氏が、昨年海外留

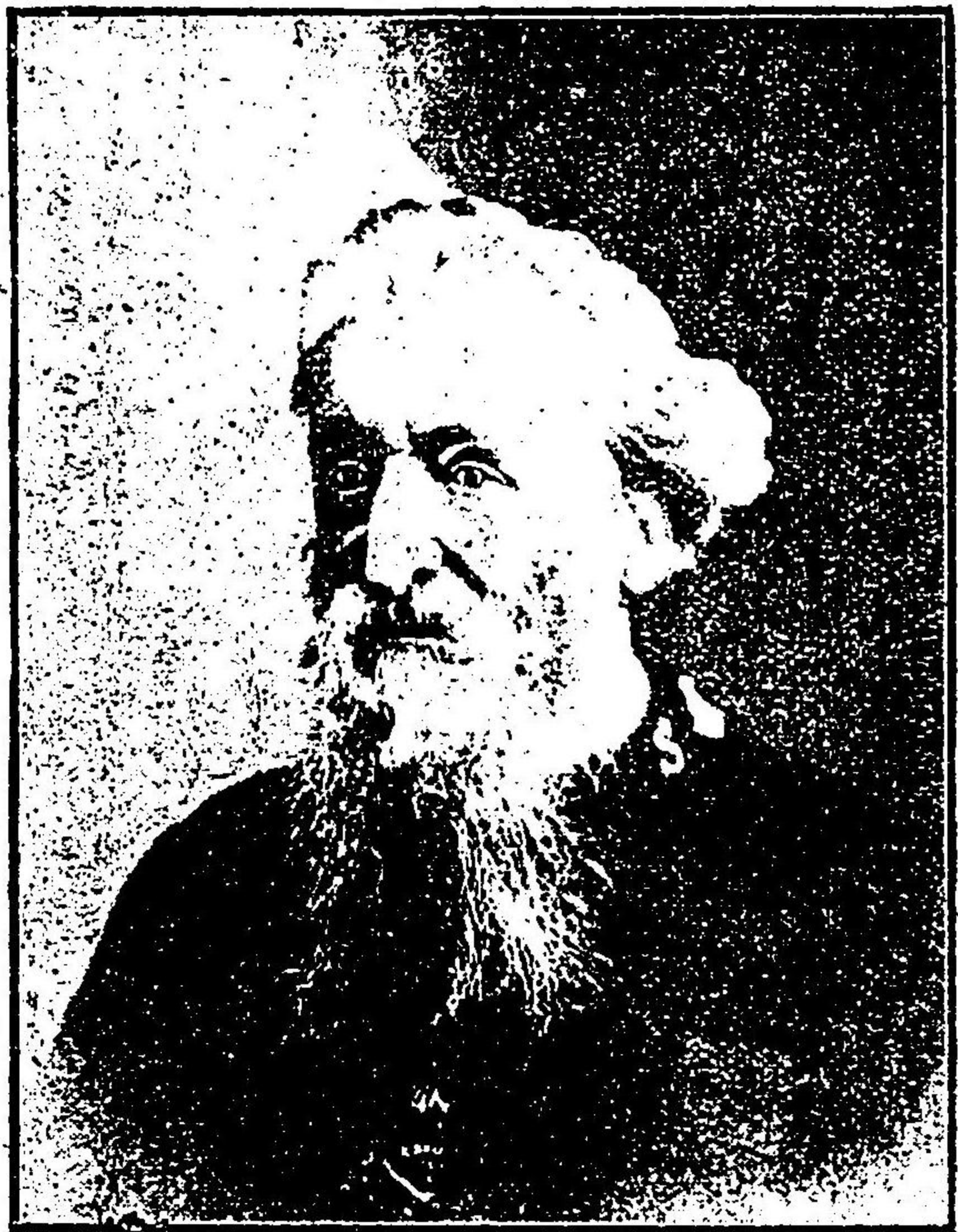
學から歸つて以後、上野のホールは、どうも暗澹たる陰雲に蔽はれ勝たぬのは、どういふ次第かしらぬが、今年の春季のオーケストラすら、此が爲に未だに開かぬといふ始末、音楽家の感情に強いのは無理もなき話だが、こんな處にまで強い感情を利用されては、日本音楽界の爲に甚だ惜しまざるを得ない。

女史はヴァイオリンの専門で、獨逸留學歸朝後、シット音楽學校校務總監の椅子に固着してゐる、一昨年妹の幸子女史が海外から戻つてより、ヴァイオリンは妹に譲つて、重にピアノに倚り始めた、姉妹仲のよい事は他の目も羨むばかり、幸子女史がヴァイオリンを執り、延子女史がピアノの伴奏をする時は、入神絶妙、天女が天降りて天樂を奏するかと疑はる、この天才の兄には郡司大尉あり、幸田露伴あることは人の能く知る所。

さて追々世の中が開けて、婦人の月給取も今では珍らしくない、ソコテ誰れが一番の月給取かと調ぶるに、各方面に御覺え目出度き、從五位下田歌子女史は別物として、その次に位するはこの女史である、女史が斯る高給を取つて、何不自由なき堅固な獨身生活を爲すことは感服仕らざるを得ぬが、女史は自身の經驗を以て妹の幸子女史に強ひず、却て配偶を勧めて英文學者の好迷たらしめたは、流石に女史の豪い所であらう。

### (七十) 救世軍總督ブリス大將

花の盛の四月十六日を以て、横濱に着せんとする、救世軍の總督ブリス大將は、如何なる人であらう、南阿の豪傑セル、ロ



ーズが歸英の途次、ブリス大將を訪ふたことがある、ロイツのちに語りて言ふ、余はブリス大將と會見して、案外我輩と意見の、よく符合する點あることを發見した、只こゝに一つ、我輩の意見と、根本的に齟齬する所がある、といふは、余が帝國といふ時、大將はいつも救と言ふことであると、この一語はよくロイツとブリスとを説明してゐる、ブリスの言に余は元來外國といふ語を好まぬ、只便宜

上、英國以外の話をする時、假に之を用ゆるのみと、げに救世軍の立場は茲に在る、

否世界の宗教たるものは、總てこの觀念を忘れてはなるまい。  
 ブースの家は貧乏で、君は十四歳の頃或る商家の丁稚となつた、その一夜友人と散歩し、圍らすウエ  
 スレヤン教會堂の前に出た處が、アイザック、マースデンといふ有名な説教者の説教最中で、彼れが  
 諸君、時計の音がコチ〜と響く度毎、世界の何處かに、現世を去て永遠に旅立つ人がある、恐らく  
 斯く言てゐる今も、其の平生の罪惡の爲に、地獄に墮ちた人があるかも知れない、といふ最も沈痛な  
 一句が、ブースの胸を抉つた、これ君が後年迄も深く腦裏に刻みついて、忘るゝことの出来なかつ  
 た一句で、救世軍の芽はここに萌したのである、君は二十三歳基督教の傳道者となり、到る處に成功  
 したが、三十六歳の時、倫敦市東部の貧民間に傳道中、大に感じて、今迄の一切を抛つて、爾後専心  
 貧民傳道に従ひ、東倫敦傳道會といふものを創立した、これが救世軍の創始である、爾來七十九歳の  
 今日に至る長年月の間には、反對もあり、困難もあり、迫害もあつたが、一たび貧民の友となつた君  
 は、堅忍不拔、凡ての迫害困厄に打克つて、歐洲大陸は勿論、米國、加奈陀、濠洲、印度及び我が國  
 にまで支部を設立し、盛んに其の事業を擴張して、近世の宗教史上を賑したのである。  
 君の精神と人格とは歐洲各國の帝王、宰相に認められ、今日では到る處に敬意を拂はれてゐる、倫敦  
 市が、グラットストン、ヂスレリー、サリスバリー、ネルソン等極めて少數の人の外には與へなかつ  
 た、自由市民權を君に許し、又君の郷里ノツチンガム市でも、同じく自由市民權を與へ、且君が誕生  
 の家を表彰した一事で、いかに君の過去が、有益なる公人であつたかゞ知れやう。

(七十一) 介類學者平瀬與一郎君

別に専門的教育を受けたと云ふでもないが、熱心と眞面目とを資本に、自ら學び自ら



見て、類に興味を感じたが、其の後間もなくある米人と知り合つたが、其の人が、亦

偶然にも米國の介類學者ギニリーキ氏であつたのは不思議と云はうか、彼れは之から愈介類に興味を感じ、蒲柳の質なる彼れをして、遂に一生之が研究に身を委ぬべく決心せしめたのであつた、爾來大に介類の採集に務め、追々世界の學者と、互に學術上其他の連絡も出來、參考圖書も整頓し、其の熱心と眞面目なる研究は、遂に今日學者としての、彼の地位を造り出したのである、これまでに日本全國の介類は盡く研究し盡し、今は専ら清韓の介類を研究中だが、彼れの發見に係る新種類は、約千種以上もあるさうな。

彼れの名は我が國では極めて知るものも少ないが、世界の介類學者間では誰れ知らぬものもなく、平瀨の姓を冠せて命名されたる介類が、陸産に二屬十七種、海産に十種あり、就中ヒラセーラ、ヒラセニアの二屬は尤も著名で、ワイ、ヒラセの名は今や全く不朽となつたのである。

彼れが此の研究に従事してより二十年、今日では標本の賣買などで多少収入はあるけれども、元より收支の償ふ等はないが、苟も他人の補助を受けることを屑とせず、先年も外國のある學者が、彼れの熱心に感じて金を贈つたが、彼れはスグなく之を斥けた事がある、萬事此の風で、此の間から月々介類雜誌を發行して、其の趣味と研究の結果を公にしつゝあるが、此等の事業も苟も人に依頼せず、總て獨立獨行でやつて行く所は頗る欣すべきである。

彼れ常に人に談りて曰く、亞細亞の介類全部を研究し盡くし、日本産介類圖説の出版と介類陳列館の建設が出來れば死んでもよいと、其の熱心實に感すべきでないか、類稀なる學者として、岐阜の昆蟲先生名和靖君と共に、此の京都の介類先生平瀨與一郎君は正に當代の二異彩であらう。

(七十二) 文部次官澤柳政太郎君



政治家を以て狼とじし、商人を以て狐とすれば、教育家は貉である、貪婪なる狼惡むべく、狡猾なる狐厭ふべきも、善を装うて

擧動の曖昧なる貉位不快なやつはないその豁然たる教育家の中に、嶄然異彩を放つて、キビしく心持のよいのは澤柳君である、君は普通學務局長の時代から、文部省の澤柳か、澤柳の文部省かと言はれて居つた位、一體敏腕には相違ないが、意志が強固で、毀譽や褒貶には顧着せず、ドシ／＼と思ふた事を斷行するのが君の長所である、元來文科大學の哲學科の出身だから、頭は頗る系統的で、

随つて仕事にも自から順序がある、冷たいと言て憤るものもあるが、其の實冷めたい

のではなくて、御追従がないのだ、世間でよく意顔といふ事を言ふが、君は即ちその意顔である、けれども鳩山のやうな曲線的の意顔でなくて、至極行儀のよい直線的の意顔である、マア何の事はない地球玉を轉がしたと思へば大した間違はなからう、その地球玉の中から、ヤッパリ圓い目の玉を光らせて、日本の文教を一睨みにしてゐるのが君である、西園寺の和尚が内閣寺の本坊を引受けて、牧野の村長サンが文部院に直つた時、この地球玉は英國から一萬何千里を轉がつて来て、文部院の副任職になつた、もう一轉がり轉がると、今度は愈同院の大僧正となるか、但しは他に狙つて居る場所があるか、一寸預つて置かう。

君は信州松本の生れ、信州にはどういふ者が教育家が多い、辻の親爺あり、伊澤の疇齋あり、けれども到底君には及ばない、辻は昔は彼れ是れと言はれたが、今は川中島の古戦場となつてしまつた、伊澤の疇齋玉の破裂は淺間山の噴火に似てゐるといふまでのこと、そこにゆくと君は千曲川の急流が、滾々として氣味よく、百物を流して喝さざるが如くである。

(七十三) 刀劍鍛冶名人月山彌五郎貞一君



日本刀は武士の魂、武士の魂は凝つて日本刀となる、其の切れ味は元より此の日本魂

にある、されば之を造るにも此の魂が打ち込まれねば、同じく刀ではあるが、未だ日本刀と云ふ事は出来ない、今日此の頃の我が國に、此の日本刀を造り得るものは極めて少くない、イヤ造り得るものはあらうが魂を打ち込み得るものはないのである、今日月山の刀が珍重がらるゝも即ち是に在るのである。

世に名人と云はるゝ程のもので、所謂名人氣質のないものはないが、月山は其の最も多くを有つて居る一人であらう、恐

ろしい酒好きで、一寸の間も酒の氣の絶えた事はないが、其の代り又仕事にかけたら



恐ろしい熱心で、一つ刀を鍛ちかけたら、誰れが何と云はうが振り向もしない、又仕事場には決して人を入れない、地獄に氣に入つた色が出ないと、何度でも焼き直す、元より時間などは構ふ事でない仕舞には鐵を抱いたまゝでウトウトと眠り、眠が覺めると又やる、で氣に入つたと思ふと、直ぐトントンカンを始める、其有状は外目には全く狂人とか見えな位であるさうな。

もと江州犬上郡須越村の生れ、姓を塚本と云つたが、七歳の時刀工月山貞吉の養子となつたのである、貞吉は出羽の人、其先は鬼王丸に出づ、貞吉は文政の頃江戸に出で、水心子正秀について斯道を學んだが、水心子歿するに及んで遂に大阪の住人となつた、彼れが鍛刀を學んだのは十一の時からで、其の後益勉強の結果、別に貞一一流を創むるに至り、家聲益高く、安政二年から常陸土浦藩、出羽上の山藩、同新莊藩、攝津大州等諸藩の用達を命せられ、明治二年には天朝の御命で、御太刀一振と御短刀一振を奉鍛するに至つた、明治十八年湊川神社に楠公五百五十年祭のあつた折、古今の名刀で巻藁の試斬をした事があるが、其の時月山の刀が非常に切味がよかつたので、爾來益々名聲を博し、諸方の博覽會で表彰された事は勿論、先年帝室技藝委員を命せらるゝに至つた、陛下の御軍刀を奉鍛中、此の六月中には工を竣はる筈で、此の頃は寢食を忘れてやつて居る、斯る名工を有する大阪は一の誇である。

(七十四)

炭鑛王貝島太助君



餅屋は餅屋、酒屋は酒屋とすれば、また炭鑛屋は炭鑛屋といふ推理が出る、而して畫傳子は茲に貝島太助君を拉し來て、この言に魂を入れたい、太助君筑前直方町の貧家に生れ、七歳の野菜賣、九歳の坑夫といふ、頑是ない苦しい奮闘を経て、其の後鍛冶屋の丁稚ともなり、武家の若黨ともなり、又寺男ともなつたが、十七歳父に死別し、一家の生計に餘儀なくせられて、稚い折覺束ない経験のある炭坑々夫となつた以來、今日迄君の經歷中には浮沈昇降、七顛び八起きがあつたが、ツマリは炭鑛で日を暮らし、夜を明かし、

體を働かすか、心を働かすかしたのである、而して其の結局が一萬人内外の人員を使

つて、居然として炭鑛界の王となつたのである。

井上伯は君に取つての大恩人である、しかし抜け目のない伯をして、君の恩人たらしめたのは、君の率直の態度と、剛勇の膽氣と、且蹉跌にめげぬ不屈の精神とである、君が大膽の一二例を挙げれば、嘗て某炭坑に弟の文兵衛と共に作業中、俄然坑内の天井陥落して、其一部は君等の頭上に落ちて来た、君從容 弟を警めて曰く、一步も動く勿れ、動かば我等は壓死せんと、徐ろに他の坑夫を呼んで支柱を立てしめた、又君が直方坑開掘監督中のある日、轟然一聲、坑内に只事ならぬ響が起つた、君は大膽にも直に坑内に入り、その陥落の箇所を實視して恙なく出て来たが、殆ど之と同時に、坑口は龜裂崩潰してしまつた、若し之等を匹夫の勇といふならば、更に近年に於ける一例を挙げん、去三十三年霖雨の時である、君が新に巨萬の財を以て買収した大辻香月坑浸水し、今や一坑の安危に罹るといふ場合、坑員は上を下への大狼狽、大混雜、然るに君は悠然此の中に在て社宅の奥座敷に鉦聲雷の如く、其日又直方の本邸に歸つて、熱心に淨瑠璃を語つてゐたといふ。

今や世に時めく鑛山家、鑛山の鑛と共に多しと雖も、一介の鶴嘴から成り上げたる者君の如きはあるまい、成り上りも茲に至つては亦大に望むべし。

(七十五) 陸軍少將梅澤道治君



誰かは武功あらざらむ、中にも花の梅澤と諺はれし少將梅澤道治君は、殊勳中の殊勳にて、功二級の金鷄勳章は君の胸間を飾る、此の寫眞は其の最も新しきものにて、ゼームスタウン行の爲寫されしもの、畫傳子が是れを得たる、亦榮と謂ふべし。

君は仙臺の人、十四のとき會津戦争に加はり、官軍に追ひつめられ、走つて五稜廓に據る、海軍砲の洗禮を受けたのも此の時が始めて、小銃劔刃はお茶の子である、亂平ぐの後、君は大阪の幼年學校に入り、卒業して士官となり、身を陸軍に投じた、十年戦争には銃傷を蒙り、二十七年の日清戦争まで昇進頗る遅々、藩閥の牽引あるではなし、純粹の士官學校を出たではなし、生れながらの軍人として一意隊附をやつたまで、左れど聯隊中では隠然重きをなし、梅澤が居るからとて、聯

隊長も誇りとする位であつた。日清戦争の時、大隊長で、勃然頭角を顯し、是れから少將の世の中、流石は梅澤、戦は強い、智は抜群、性は温厚、人は篤實、毫も軍人の軍人臭き所なく、親切丁寧而も戦ひに臨むや、平然自若、士卒を愛することを如く、威海衛戦争中では、後衛よりながら前隊との聯絡切れし爲、獨立戦闘を開いて最先頭に出で、瞬間に海岸砲臺まで占領し、逃げ来る敵を殺たすに、海上より来る海軍砲、砲公島より来る海岸砲を全身に浴びながら、士卒には「危い、危い、敵を出すな」と喊めつつ、自身は全身を顯して戦線を経過り、其の大膽と勇氣とに何人も舌を捲いた。此の名將は日露戦争となつて花々しく功を樹てた。鴨綠江戦には緒戦として最も名譽ある九里島占領を遂行し、五月一日には哈蟆塘會戦に出陣した。遼陽戦には例の本溪湖を襲つて之を取り、更に猛進して煙臺炭坑に出で、敵をして大軍の迂迴かと思はしめ、左しもに危かりし遼陽戦を根底より覆へして、我が全捷に歸せしめた。沙河戦には敵が大軍として来る難衝に當り、本溪湖を死守して、僅か一旅團を以て敵の三軍團に當り、若し此の一角崩るれば我が軍の全敗に歸する所を、少將ありて漸く喰ひ止め、戦機を轉じて攻勢に移り、是れも亦全勝に歸す。奉天戦には第一番に鐵嶺に進出し、我が軍との聯絡断へ、報告に不便なりし爲、其事詳かならざるも、君は平然として功を争はず、人の君に問ふれば笑つて答へず、謙恭温良、眞に君子人なり、近衛は全軍中實は餘り評判宜からざりしもの、後備は兵卒中亦餘り評判香しからざりしもの、其の近衛の其の後備を率ゐて、斯くも勇戦せし秘訣を問へば君曰く「何の奇もなし唯早く自ら死地に入り、兵卒をして死を覚悟せしむるに在るのみ」と、然ればにや君は當時四十度の病熱を醫し、自ら戦線に立ちて指揮し、兵卒ともより幾たび塹壕内に引込まれ、而も晝夜を通じて奮戦し、其の乘馬二頭を斃し、身には一丸を受けず、又軍醫より彼の熱に倒れざりしを不思議がらる、其の功二級に叙せられ、今度陸軍を代表して萬國陸海軍祝典に赴く、決して偶然にあらざる、雷傳子は之を古への名將に求めて、蒲生氏郷、佐々成政の亞流かと思ふ、其の智と勇と人品と得難き武人中の武人、其の昇進の案外運きを問へば曰く「陛下の軍人ですから、少尉でも中尉でも一兵卒でも好いです」と。

(七十六) 銀釜正宗柴田幸三郎君

銀釜正宗に舌鼓を打つ人は多いが、銀釜正宗の苦心を知る人は少い、之を知つて、而して之を味はゞ、更に一段の風味を生ずるのであらう。



以て米飯に代へ、織ぎ刺ぎの衣類を纏うて空樽を擔ぐといふ極度の節儉をなすつゝ、

銀釜は出放題に附けた商標ではない、柴田幸三郎氏が一代の心血を凝いだ産出物である、柴田の家は父の代から酒商であつたが、二朱と二百文の家賃に住んで居た位、固より餘りある身代ではない、加之二回まで火災に遇ひ、次で父を喪ひ、家産彌が上にも傾く中に、更に織母は精神病を發した、弱冠十六歳の幸三郎君、この難局を一身に荷ひ、一方には豆粕を

他方には世間の口端に上るにも頓着せず、自ら病母を負うて、共に女湯に入浴するといふ、通常男子の爲し能はざる孝養を盡した、刻苦二十年、此の間彼れは酒の改良を以て、狂瀾を既倒に回さんとし灘の名酒にして尙且年中香味を保つ能はざるに想ひ及び、火入の改良に就て苦心の結果、従来の鐵釜以上の金鳳を以てせば、必ず鐵以上の利益あるべしとの自信ある斷定と共に、銀釜發明の成算熟したるは、彼れに取ていかに愉快であつたらう、然るに當時彼れ尙一貧商、發明はしたが製造の資金なく、空しく寶玉を懐いて、暗黒に埋れんとせり、天なる哉、この時帝室技藝員加納夏雄氏は、彼れの熱心に感じて七百圓を貸與せしかば、宿願茲に成就して、彼れは直に五斗二升入の銀釜を製造し、酒造界に一新天地を拓いた、時は去る二十七年の九月である。

彼其後灘の櫻正宗本舖山邑太左衛門を訪ふに及び、老練太左衛門をして、享保開業以來こんな發明はないとの讃辭を發せしめた時の得意察すべく、家運はこれより開け、遂に翌年には三千圓を投じて、第二の銀釜を製造し、十二月を以て御影の酒釀事務所で、第二銀釜の披露をした、が彼れはこの小成功を以て甘んぜず、更に百尺竿頭一步を進め、五萬圓を投じて金釜を製造し、今茲花の三月、灘の新在家の花木酒造場に於て、火入の試験を行ふた、東郷大將題して曰く『太平釜』。

(七十七) 岡山孤兒院長石井十次君

ジミな事業がジミなだけ其の經營も困難で、其の困難なだけそれだけ誇るべき値もあるわけである、孤兒院事業の如きは云ふまでもなく最もジミな事業の一つである



の孤兒を養うて居た位である、明治二十年卒業試験の準備中、不圖巡禮が子供二人を

つれて困つて居る惨状を見て、非常に心を動かさし、友人親類の忠告も聞かず、断然醫書を焼き棄て、全生涯を孤兒救養事業に盡すべく決心したのである、爾來殆ど寢食を忘れての苦心經營の結果、今日遂に盛なる創立滿二十年記念祝典を舉行する迄になつた、其の間彼が熱誠天應に達し、兩陛下より御下賜金の榮譽を膺ふた事も數次あり、又其の事業の功勞を嘉みせられて藍綬褒章を賜はつたのは、世人の普く知る所であらう。

されば彼れが二十餘年來の經歷は即ち岡山孤兒院の歴史で、彼れが人物如何は直に岡山孤兒院の經營振を示すものと云つてよい、今茲に岡山孤兒院の歴史と、今日なつてある經營振如何を語るのには容易の事でないが、世上往々にして見る所の慈善の名の下に自家の名を賣り、孤兒を以て自家の衣食の道具となす如きは、彼が根本の信念に於て出来ぬ所で、彼れが孤兒院の一大方針として滿腹主義、里子主義、勞働主義を執り、單に孤兒を養ふに止まらず、進んで彼等が社會に獨立し得べく教育しつゝあるに見ても、直に背き得らるゝのである、彼れ居常自ら奉ずる飽くまで質素を旨とせるは勿論、世の所謂慈善事業家と稱するものが、人に遣へば直に嘔々喋々、自らの事業を吹聴するが如きこと毫も之なきは、以て彼れの人格を察すべく、其の人に接して何の奇なく、只黙然、而も眉宇の間自から犯すべからざるものあるは、其いかに意志の堅きを見るべし、彼れ常に其の理想とする所を談つて曰く、將來財政の基礎、及び孤兒の救濟機關と教育機關とが、共に理想の如く完備したる曉、もし許さるゝならば其の全部を擧げて皇室に獻納し、之を皇室の事業とし、我が日本の孤兒は均しく永遠に陛下の御恩澤に浴び、以て天賦の材能を發揮し、忠良なる日本臣民として、各々其の所を得せしめた

(七十八) 鐵道王ハリマン氏

北米合衆國の鐵道は、約二十七萬哩の延長を有する、これを我が約五千哩に比すると



始めとして、十大鐵道の大株主であるが、彼れが此の十大鐵道を通じての、所有株金

ザット五十四倍である、其の株主が又我が國のやうなものではなく、大小の差が甚だしいが、其の中で、ヒル氏、ロツクフエラー氏、ヴァンタビルト氏、ハリマン氏の四人は鐵道王として名高いものだ、しかし昨年末の調査に據ると、眞に世界の鐵道王たるべきはハリマン氏で、彼れの鐵道に依て得る一箇年の収入は、今や石油王たるロツクフエラー氏を壓せんとして居る、彼れはユニオンパシフィック鐵道會社、サウサンパシフィック鐵道會社を

は、八億三千五百七十二萬九千弗で、之を我が貨幣に換算すると、十六億七千一百四十五萬八千圓となる、此の株金に對し、一箇年五分の收益ありとすれば、我が約八千三百五十萬圓といふものは、彼れが毎年其の懐ろに收むる金額である。

此の十大鐵道の中で、彼が一番多くの株を有つて居るは、サウサンパシフィック鐵道會社で、實に全株の百分の八十を占めて居る、殆ど彼れが獨占といふべき勢力である、これは誰も知つて居らうが、此外、ユニオンパシフィック鐵道會社では、百分の七十を占め、セントジョセフ、グラランドアイランド鐵道會社では、百分の六十三を有し、チカゴアルトン鐵道會社では、百分の五十を占領して居るに、米國人ですら一驚を喫したとの事である、彼の勢力此の如く、殆ど敵するものなきにも拘らず、彼れは益々肝膽を砕いて、米國中の鐵道を一手に吞噬せんとしつゝあるのである。

十六億の株金を有することや、毎年八千萬の收入あることや、只人をして聊か驚かしむるといふのみ、未だ天を驚かし、地を動かすに足らず、其の堅忍と其の大膽とは大に學ぶべしだが、由來獨占は頗る研究物である、殊に交通機關の獨占は最も惡むべきもので、米國でも弊害百出、今日は之を抑ゆるの方法中である、學ぶべきは彼れの膽氣、學ぶべからざるは彼れの事業。

(七十九) 大和の土豪土倉庄三郎君

富豪が公共に盡すと云ふ事は、今日でこそ随分思ひ切つてやるものもあるが、つい先達までは中々此う云ふ人物は少なかつた



其の時分から大和の土倉、伊勢の諸戸と云へば有名なもので、殊に此の點では近畿の雙壁と稱へられて居た、彼れも亦一種の人物に違ひない、彼れ常に人に語つて云ふ、予の希望は全財産を三分し、一部を子孫に、一部を國家の有用事業に、一部を教育事業の爲に、最も完全に使用するにあると、大和國の山與吉野郡大瀧村の一土豪に過ぎない彼れの言として、頗る珍重するに足るではないか、而して彼れは、此の言を着々として事實に現はしつゝあるのは見上げたものである、彼れは此の主義から、此れまでも少からず人材の爲に資を擲つたものである、人もし大和大臺ヶ原山の附近に往つて見よ、コンな

山奥によくコンな立派なと思ふ位の小學校が、あちこちにあるのを見るだらう、是れ皆彼れが、彼れの事業の爲に衣食しつゝある樵夫等を教育する爲に建てたる學校である、尙又彼れは不思議にも、早くから女子教育の必要を認め、女子教育の爲に金を出した事は少くない、成瀬仁藏君が女子大學を創設する時、其の遊説費を負担したのは即ち彼れであつた、是等の事は何んでもないやうだが、一寸並一通りでは出来難い事であらう。

別に新しい學問をしたわけでもなく、祖先から土豪の家に大きくなつたばかりであるが、頗る權力を嫌ふと云ふ美德を以て居り、細民を勞はるのは言ふまでもなく、自由黨の創立時代には多大の費用を出し、随分當年の民権自由論者を養つたもので、たしかに自由黨の一恩人である、彼れは當年の民権論者今日の状を觀て何と觀じて居るだらう、先年全國の功勞ある實業家に、叙勳の御沙汰のあつた事がある、其の時彼れは勳五等に叙せられたが、どうしても之を拜授しない、其の後河野前奈良縣知事は態々彼れを訪問して、其の拜受方を諄々説く所あつたが、どうしても承知しない、其の勳記勳章は今も尙奈良縣廳に保存してあるが、實は縣廳でも持て餘して居るさうな。

第二回の總選舉の時、推されて代議士となつた事もあるが、爾來は専心本職の林業を經營し、其の經營振は最も進歩したものゝ一と稱へられて居る、彼れの性行は随分思ひ切つた事をするに似ず、人に接して極めて腰の低いのは欣慕すべきである、彼れ本年六十六歳、珍らしい子福長者で、先妻には十二人あつたが皆亡くなり、今の妻君に、男七人女五人と云ふ大勢の子がある、彼れは誠に幸福兒である。

(八十) 憲政本黨領袖大石正巳君



其の頭腦は十九世紀的、其の行動は三國誌的、識慮足れども意思弱く、爲に始め脱兎

の如く、終り處女の如くなることがあるとは、彼の友人中江兆民が彼を評した言である、或はさうかも知れぬ、しかし今日在野の政治家では、何と言つても君と犬養木堂だ、犬養は機智に富んで鋭鋒當るべからずであるが、大石は臆臆として不得要領の處がある、餘り鋭いものは惡まれ易く、不得要領のものは却て人望がある、犬養の要領を得過ぎるのと、大石の不得要領と相待て、憲政本黨の權衡を保つてゆくのが妙でないか、彼れも嘗て一度農商務大臣と迄なつたが、その始

め中學校の英語教師を勤めた事もある、又政界に頭を持上げかけたは自由黨創立時代の幹事として、當時自由黨の幹事といへば、田舎者などは非常に蒙いものと思つて、

一六〇  
ペコ／＼頭を下げて来たが、其實月手當僅に七圓、これには流石の三國誌的豪傑も少々へコタレたものゝ、苟くも一黨の幹事ともあらう大政治家が、腰辨で政黨本部に出勤も出来ない、とつ、おいつ、考へ出した妙案が、晝飯は抜き、その代り朝と晩とに入り合せて、下宿屋泣かせをしたといふ情ない時代もあつた、兆民の言ふ通り、東洋豪傑流で随分謀反氣もある男だから、時々思ひ切つたこともやつて、それが亦案外成功する事もある、嘗て朝鮮公使の時分、防殺令の爲、韓國政府から十一萬圓の償金を取る事に成つてゐたが、例の政府、一向に埒が明かない、君は本國政府に打電して、一切を己に任すとの承諾を得た後、十一萬圓を八萬圓にまけるからとて手詰の談判に及んだ、彼れが宮廷に奴鳴り込み、例の眼鏡問題の韓人間に起つたも此の時、君の遺方には内外とも膽を潰し、又愉快であつた、遂に奮然公使館の屋上の國旗を捲ぎ上げしめ、即時引揚げの擬勢を示すに至つた、朝鮮政府驚くまいことか、大狼狽、大恐慌、到頭八萬圓を返して了つたなどは手近い一例である、併し個人としては涙多く、友人の急に赴くことも少くない、頭腦が系統的でない代りに、かういふ美性もあるのは、ともかくも人に長たるの器と言てよからう、他日イヤ今日でも憲政本黨を率ゆるは君で、此の上ボケさへ爲なければ立派な總大將であらう、何大臣にしても立派なものである。

### (八十一) 桃中軒雲右衛門

幾たび出さうかと思つて幾たび願ひ下げ、幾たび願ひ下げて又出さうかと思つた桃中軒雲右衛門、人が攻撃すれば可哀なる、人間は妙なもの、自然に弱きを助け、強きを挫きたくなる。



士道の何のと説明を聞いた、是れまでは左程の意味もなく語つて居つたものが、少し



の手引で魂が入つた、魂が入つた許りで大繁昌、人氣は雲の上衛門である、左れど眼は半分開いた許り、周圍が未だ必すしも道を知らぬ、炭酸瓦斯で育つたものは山林の純酸素を吸ふことが難い、此處今一息と云ふ所である、道に入れば權助も釋迦も同一である、凡そ一藝一能の蘊奥を極めんと欲せば容易の事ではない、大發憤、大忍辱を要する、苟も蘊奥を極むれば皆豪傑である、雲右衛門此の大念願あるや否やを知らず、然れど彼れ程の力あるものは實に惜しいものなり。

世は欺き易くして又欺き難し、普通の術策や虚名で一生を繋ぐことが出来ぬ、慈善興行の名を賣りて、却て慈善商賣を助くるの嫌ひもある、心さへ本に復れば未は問はずして可、又曷ぞ其の前半を問はんやだ、畫傳子が雲右衛門を此處に收むるも此の意で、本人には意外かも知れぬが、望む所は重いのである、其の名が雲右衛門、雲つく許りの男かと思つたら、案外に小さき若者、桃中軒とは其の桃を好くからこの事、本名は岡本峰吉、當年三十四。

(八十二) 栃木鎮臺田中正造君

田中正造といへば栃木鎮臺を想起し、栃木鎮臺といへば鎮毒事件を聯想す、國會開設以來、彼れが日比谷の原頭に立ちこ



十餘年、每期恐らく彼れの鎮毒演説を聞かぬことはなかつた、足尾の鎮毒は渡良瀬川に流れて、沿岸一帯の田畑をして荒蕪に歸せしめたが、栃木の鎮毒演説は涙ある同胞の血管に流れて、世をして鎮毒熱を沸騰せしめた。

下總下野に於ける多數の被害民は彼れを視ること神の如く、彼れは亦死を以て被害民に誓つた、議場に於ける殆ど狂に近き語氣と態度とは、彼れが先天の性にも

因らうが、一面には責任を重んずるの飛沫である、しかし黒木綿の牡丹餅大五所紋、

口角沫を飛ばして叱咤怒號する傍若無人の振舞を見て、彼れを直情勁行の人としたらば、少しく觀測が違ふであらう、彼れは粗放なるが如くして、其の實精密なる算勘あり、直角的なるが如くして、實は曲線的の世渡りをする、獅子奮迅の勢ひ、議席を蹴て議長席に駆けつけるところは、何うしても感情一遍の老壯士、去りながら彼れは決して左程の無智ではない、のみならず其の進退懸引はなかなかに巧妙である、先回の選舉に彼れは斷然政界に念を絶つて、帝國議會は遂に一人の名物を失つてしまつた、随つて彼れの名は近三四年、アマリ話題に上らなくなつたが、彼れは鎖毒の爲に身心を傾注しつゝあることは、今も昔に異ならず、久し振りで此のごろ東京控訴院の訟廷で、その破れ鐘が撞かれたは、腐つた空氣に不意の振動を與へたやうな心地がする。

三四年前前橋地方裁判所の公判廷で、判官の取調べを受けつゝあつた彼れは、突然大欠伸をして、官吏侮辱罪に問はれたことがある、彼れは平氣で説明すらく、欠伸は、所謂出もの腫れものゝ一種、之を法律に問はるゝ所以なこと、彼れは又邊幅を修飾するに念なく、鎖毒問題に熱中する時分は、一枚の衣服の外着替を有せず、臭氣は人の鼻を衝く、虱は襟のあたりを行列する、それで遠慮會釋なく政友を訪問するので、これには何れも困却したとの事である、彼れの顔は山猫の如く、彼れの勢ひは破竹の如く、而して彼れの問題は鎖毒に在る、この動植鎖物を一身に集めた栃木鎮臺田正將軍は、また明治年間の一珍ではないか。

(八十三) 川崎造船所副社長川崎芳太郎君



近來我が國造船業は長足の進歩を來したが、其の經營者として記憶すべき三人物がある、即ち三菱の莊田平五郎君、川崎の松方幸次郎君及び此の川崎芳太郎君である

が其の中川崎君が最も少壯で最も經歷が面白い、今日川崎造船所の經營者として、元より松方君を無すべからずであるが、彼れが餅賣の貧乏小僧から仕上げて、今日一大造船所の經營者たるに至つたのは、頗る珍ではないか。

彼れは明治二年鹿兒島市に生れ、西南戰爭の時は恰も八歳の子供であつたが、家は頗る貧しく、殊に兵燹に罹つて、今日を送るにも困ると云ふ有狀であつたので、彼れは一家糊口の爲に、彈丸雨注の戦地に餅を賣り歩くべく思ひ立ち、夜は餅を搗き、

晝は之を賣り歩るいたが、天性伶俐なる彼れは兵卒間に大に愛せられ、不思議な程によく賣れて、戦争の終る頃には二百五十圓と云ふ貯蓄が出来たさうである、物事に一心不乱、不撓不屈の精神は、此小僧の商賣をして案外の利潤を得せしめたのであつた、戦争後はコンな事も出来ないで、薩摩焼工場に雇はれ、畫工見習小僧となつて、大枚三圓の月給取となつた、一生懸命に勉強はしたが、何分前途の見込がないので、大勇猛心を起して東京に飛び出し、當時三十軒堀に造船店を開いて居た叔父庄藏に泣きついて、其の丁稚に住み込んだ、處が其の不撓精勤の結果、間もなく書記に採用され、其の後庄藏翁が其の筋の拂下を受けて、今の川崎造船所を開くに至つて、初めて神戸に來たのである、これが抑も彼れが立身の初めで、先の餅賣小僧は是に於て到頭見込れて、川崎の養嗣子となつたのである。

普通のものなら、川崎家の若主人で御座ると濟まし込む所だが、彼れ常に往年餅賣時代の精神を失はず、後米國に留學し、ボキープシー商業學校を卒業してからも、自ら好んで森村組荷庫掛となつて、文明的實業振を實地に經驗したなどは、誠によい心掛と云つてよい、日清戦争と同時に歸朝したが、早速宇品出張員となり、往年西南戦争の餅賣式に、遺憾なく其の奮闘的精神を發揮し、益聲望と信用を高め、二十九年川崎造船所が株式會社となつた時、擧げられて副社長となつたのである。

爾來も相變らぬ其の不撓の精神を以て、清韓暹羅と諸方をかけ巡り、我が國造船所に、初めて外國船の注文を引受くるに至らしめたのは、今更云ふまでもない、畫傳子は今日に於ける彼れの月旦をするには餘りに多忙であるが、此の立志傳的經歷を聞いても其の人物如何を察すべきである、只畫傳子は將來益此の餅賣的精神を以て、愈我が造船業の發展に貢獻せられんことを望むのである、同時に世の青年諸子に向つて、成功唯一の資本は、此の不撓不屈の精神であることを記憶してもらひたい。

(八十四) 明治の仇討者白井六郎君

仇討は皆小説的傳記となつて仕舞つたが、之を明治の世の中に行つたものがある、誰れあらう、即ち白井六郎氏である。



時は慶應三年の五月で、壯士二十餘名白井邸に打入り、熱睡中の亘及び其の配キミ子一派を悪むこと甚だしく、遂に干城隊の首領一瀬直久等をして亘を刺殺せしめた

を刺し、鋒刃餘りてキミ子の抱ける少女梅雨の左脇を傷く、少女は六郎氏の妹で當年三歳、六郎氏は六歳である、巨の父儀右衛門、遊翁と號す、巨の横死するや孫六郎を鞠育する願つとむ、明治八年六郎氏が十六歳の時、短刀一口を授け、東京に遊學せしむ、六郎氏は山岡鐵舟の門に入り、文を學び武を練る數年、其間一日も仇敵を狙はざるなく、一時高崎裁判所書記となり衣食の資に充て、七十餘金を蓄へ、仇敵一瀬直久を窺ふ、直久時に山梨縣判事たり、十四年直久伊香保に入湯せんとし、東京を過ぎり、秋月藩邸に泊す、六郎氏乃ち祖父の驢する所の短刀を持し、藩邸に潜み、機を見て直久を刺す、直久は屈強の偉丈夫、六郎氏は僅に二十歳の一青年、直久の抵抗甚だ力むるにも拘らず、一念の徹する所、再三胸を洞して目的を達す、六郎直に警察署に自首す、當直警部見て以て孝子とし、血衣のまま訊問するは禮にあらすとし衣を改めしめ以て復仇の顛末を糺す、後終身懲役に處せられて入獄し、河野廣中、大井憲太郎等諸氏と同檻にて、經義を質し、詩文を學び、呻吟十年、明治二十三年の大赦に逢ひ出獄す、是れより氏、山中に一寺を營み、父母の冥福を祈らんとせしも果たさず、流浪落魄、一時臺灣に渡らんとし、門司に至り縁戚に沮まれ、遂に留る。

(八十五) 文學博士三宅雄二郎君



往年松岡某が犬養木堂に決闘を申込んだ事がある、此の時の介添人が三宅雪嶺と志賀

重昂の二君で、大分世間の話題に上つた、スルと志賀君は大人ぶつて介添を辭するといふやうな長文を發表した、雪嶺君は中々辭せぬ、男が決闘を申込む以上は遣るべしだ、一旦介添となりし以上は辭するに及ばぬと、此の眞面目は頗る雪嶺君の器量を上げた、君は唯學者といふ許りでなく、男の意氣地がある、此の意氣地は學者の江戸ツ子肌である、學問といふものに身を堅めて、チャンと安心立命の地を作り、威武も屈する能はず、貧賤も

移す能はざるの概を有し、骨硬の學者、明治の哲人である。

口は吃々として語る能はず、而も能く演説會に出て、一句々餅をちぎるが如く、聴者に投げつけ、奇想奇言、ポツリ／＼口角の泡と興に飛ぶ、聴者も聴くに骨折れ、思はず拳を握る、君も亦満面に朱を濺ぎ、容易ならざる苦心である、其の苦心の中より如何に激烈なる語を吐くも、而も尙温順玉の如く、少しも悪く気がない、是れ慥に君の徳なり、徒歩は君の得意とする所、兩脚を持ちながら歩かぬ奴は兩脚を侮辱するものなり』と演説した事もある、此の徒歩主義は妙な處にも應用せられ、先年君が洋行したとき、伯林の真中で、馬車と徒歩は何れが速きといふ争ひが出て、君は徒歩を早しとし、遂に試験することになった、坦々たる大道を馬車は人を滿載して驅ける、君は人道を徒歩で馳せる、雨は降る、人は混雑する、馬車が少し止まるを機とし、君は一目散に驅ける、生憎や君の靴紐が解けて馬車は勝ちを占める、君尙屈せず、徒歩の負にあらず、靴紐の解けたるなりと言ふ。

君は此の外に一の藝當を有する、何ぞや、室内で鐵棒を打振る事である、此の鐵棒は大分重いが、一時は革包にして往來を杖いて歩いた事がある、今は家に秘藏して一人で打振る、其處で腕力は中々強い、人に角力を挑む事もある、是れだもの、決闘の介添をして、何處までも決闘を遣らせんとした事、當然であらう。

### (八十六) 能本山貫首石川素童君

曹洞—騷動—素童—そんな悪口をいふものでなし、併し不思議なことには、素童師が出る、屹度曹洞宗が騷動宗になる、これは佛者の所謂宿世の因縁と結論しておく方が無事だらう、只困るのは、素童師が社會の鏡に寫し出されたのは、先年の能越兩山分離問題と、今度の能本山移轉問題とである、而して曹洞宗を騷動宗にしたのは、亦此の兩問題であるから、マルキリ其の消息に對して知らぬ顔の半兵衛も出來ぬ次第である。



年交代に曹洞宗の管長となるのである、今よりは殆ど二十年も前であらう、一宗の

英傑瀧谷琢宗師が越山の貫首を辭し、その後董選舉の開票に當り、君は立會人であつたが、得票多數の能山派の西有穆山師を落して、越山派の森田悟由師を擧げん爲、越山の開票係は小刀細工の不正をした、さうと見て取つた君は、臆面なく之を詰責したれば、開票係は君の立會を停止して了つた、君が越山に含んだ始めは此の時、それから間もなく能山分離獨立を唱へ出した、これは失敗に終つたが、一宗の上下は靡然として之に向ひ、此の時以後の曹洞宗は殆ど君の掌中に在つたのである、不鳴不費十年、昨年西有師の引退に當つて、五千七百七十四票といふ同宗未曾有の得票を以て、一躍能山貫首となり、直に宗門六百年の靈場たる總持寺をして、能登半島の一角より、武州鶴見の形勝に移すの大計畫を立て、先づ越山派の膽玉を塞からしめ、ヌッタモンダはあつたものと、遂に其の目的を達してしまつた。

一體ソナ事は俗僧の仕事で、禪宗の貫首とも言はるべき禪師の事とも覺えぬと言ふ人もあらう、素より君は俗僧に相違ない、けれども其の經綸的手腕は非凡で、若しアノ頭に毛を生やして政黨にでも飛込んだら、差し當り星亨といふ格であらう、マア素童の目の黒い内は、曹洞宗は結局騒動宗だらうが、越山派は頭が上るまい。

### (八十七) 海軍兵學校長島村速雄君

未來の軍令部長として海軍部内に令名噴々たるは、現海軍兵學校長島村速雄君である、今は兵學校長だが、元は聯合艦隊參謀長



として東郷大將の腰巾着たりし事は、人の皆知るところ、參謀と云へば多くは圓轉滑脱、新式ハイカラ然たれど、君は頗るの武骨で、嚴格で、一見したところ寧ろ戰鬥武士である、是れで智謀雄略、文

明の智識に包滿せらる、是等が眞の武將、眞の參謀官であらう。戰爭中は聯合艦隊參謀長が最重要の地位で、戰爭濟んでからは未來の將校を製出する海軍兵學校が大事である、君は重要

の地位より重要な地位に移る、而も海軍省などの俗務多端なる所に出ぬ、是れが望ま

こき所で、いよく武人たるの資格がある、他日第二の東郷大將たるものは斯の人であらうか、併し餘り賞める許りも能でない、何とか一點を打ちたいが、何うも打てない、其の何處までも武人たる所が頼もしい、平生自ら持する嚴に、人を待つ寛、部下の過ちを正すに是れを責めずして自ら覺らしめ、生徒に與ふる訓諭の如き、機を利し節に合ひ、言々適切にして皆是れを尊重せざるなし、曾て對馬艦長たりし時、石炭積入れに對し、軍醫や主計までも引出して其の役に服せしむ、他艦なりせば不平も起るべきを、孰れも氏の下に働くを喜び、進んで勞に服せしむ、又練習艦隊司令官として濠洲某港に到りしとき、某社員慈善金募集に来る、君司令官として金若干を義損せしに、某之を少しとし、何艦長は幾何、何艦長は幾何など眩しければ、君は徐に其の金を收め、大喝一聲出て往け(英語にて)と遣つ附けしかば、其のもの恐懼勿惶として出で行けりとか、内地でならば誰でも遣る事なるも、他國の港に行つては一寸出來ぬ真似と話した人もある。

斯ういふ風で。寛嚴宜しきを得、前途頗る有望の人である、少壯英國の地中海艦隊に乘組みて、練習したる手並もあれば、人物智識申分なく、今度萬國平和會議委員に任せられたも、實驗の中心者として勿論であらう、我が海軍も人ありと云ふべし。

(八十八) 紀州蜜柑の功勞者上山英一郎君

紀州蜜柑は日本國産の一つである、その紀州蜜柑を安東縣、大連より浦鹽斯德の方面に賣捌て、紀州蜜柑の聲價をして近來著



るしく上らしめたは、紀州有田郡保田村宇山田原に蜜柑山を有つ上山英一郎氏である、浦鹽は氣候が寒いので、冬期蜜柑の凍ることがあるが、紀州蜜柑に限りては何回凍つても、少しも甘味を減せぬといふので、大に露人の嗜好を招き、上山蜜柑の名は、今や露人清人の間に隠れなきに至つた。

又近年蜜取粉の需用非常に多く、殊に日露戰役では軍用として幾千萬の兵士を助

けたが、この蜜取粉をして今日の如く必要なるに至らしめたは君の功である、その原

料の除蟲菊の種子が、埃國より始めて輸入されたのは去る二十年で、當時は只一の珍草として賞玩したまでだが、君は此の草が昆蟲類の殺滅に、非凡の効力あるを認めて製粉したのが、抑も此の蚤取粉の始めで、爾來年と共に發展し、今日では其の販路、清、韓、南洋、布哇、西伯利亞、新嘉坡に及び、今や原産地の埃國をも凌がんとする形勢である、而してその原料の除蟲菊は概ね和歌山縣に栽培されて、是れ亦同縣特有物産の一となつた。

君は慶應義塾の出身で、頗る進取の氣象に富み、浦鹽のアレウツスカヤ街の角に、三階建大建築の支店を有し、その店には五間大の蜜柑の看板をかけて居るなどは愉快でないか、一昨年韓國慶尙南道を旅行中、右頬に銃創を被つたこともある、昨年戒嚴令の執行中、大膽にも西伯利亞を旅行して、ニコリスクで捕はれたこともある、近くは去月上旬バルチカ號で敦賀を發し、大風雨に遇ひ、日本海の真中で氷塊に衝突し、船體に徑二尺もある三箇の大穴を穿たれたといふ災難にも遭遇したが、君はこんな事には屈せず、當期には紀州蜜柑を以て、浦鹽斯徳の道を埋めてやるといふ意氣込みで、今や西伯利亞旅行の最中であるとは面白い。

(八十九) ボイコツトの張本人曾少卿

何處かに間の脱けて、何處かに勇氣を含み、愚なるが如くして愚ならず、豪傑の如くならずして豪傑の如きは、上海の曾鏞、字は少卿である。



多年上海に棲み、聲望隆々、今は飛ぶ鳥も落す許りの勢ひで、南清地方一切の事業、



例へば鐵道なり、大會社なり、彼れの名を列せざるなく、皆重役の地位を占む、往年上海の商務總局總理を勤むるとき、偶米國にて支那人排斥の舉あるや、彼れ勃然として怒り、同胞の屈辱默視すべからずと、起て米國品拒絕の總大將となり、電檄を各埠に傳ふるや、海内靡然として之に應じ、例の八釜しきポイコットとなる、支那人彼れを呼んで救世主となし、兒童走卒と雖も彼れの名を知らざるなきに至る、其の舉動、矢張支那的にて、義和團當時の董福祥の氣味がある、其剛復與に熹すべきものがある、彼れは斯る勇氣あるのみならず、又慈悲心に富み、公共心に厚く、千萬金を擲ちて學校を維持し、若くは孤獨を恤む、江北饑饉の救済にも、率先して士商を勧誘し、其の勢力旺盛、日として支那新聞紙上に彼れの名を見ざるなし、彼れ富巨萬を有し、勢力斯の如く、昨年上海居留地外に總工程局(市會)創設さるゝや、彼れ直に選ばれて總董となれり、彼れ年六十、近日一大壽宴を開くの計畫あり、其子澤森、上海にて秀才に及第し、今東京早稻田大學に學ぶといふ。

(九十) 大和の老農式田喜平君

大和國磯城郡東村大字檜垣に、式田喜平といふ老農がある。



これを自分の畑で試作したものである、それが明治の初年にはもう百五十種の多さに

及んで居たといふ、三年五年試作をした後、自分が良いと信じたもの、良いと極つた物は誰人へも無料で分配して、その耕作を顧ますのを唯一の樂みにして居たのである。

けれど其の頃はまた一向に開けて居ない、國家の爲社會の爲力を盡すのを却て冷笑したのもあつた、喜平さん狂氣したのちや無いかと云つて嘲弄したのもあつた、それで爺さんも甚く考へて、明治六年には植物果物野菜米穀その數百三十種の試作をして其の成績を官公吏へ申し出で、更に官署學校へも寄贈した、それで大分世に知られるやうになつた、農事試験が普く全國に行はれるやうになつたのは、この喜平さんの熱心が原動力となり、参考と成つたのである。

明治十年には神戸横濱をほつき歩いて、甘薯其の他西洋苗を試作することにした、十五年三月二十日、時の農商務大臣西郷從道氏から、米穀に對して同人へ賞品を與へて居る、又同十七年二月十日、同人は畏くも大日本農會總裁宮能久親王殿下より、褒状と米國式の鋤鍬を頂戴して居る、爺さんの熱誠が漸く上下に知れ渡つた時である。

爺さんの宅地は四百坪ばかりあるが、母屋と炊事小屋と、コナシ納屋とがあるのみで、他は悉く農作物の試験場に當て居る、この宅地で作られてゐる果物、植物雜穀類が百八十種ばかりあるそうなので、昨今は米國種の綿、パンヤの栽培、并に公衆に對する綿種の頒布に熱中してゐる、爺さん常に曰く、農夫が作て悪いのは罪だけだと、數年前還曆の際に詠じた歌に曰く「花見とは稻の花こそ花見なりよしの龍田をあどさきにして」。

爺さん、今年六十七、明治十五年より本年迄の間に受領せし賞状、褒状、謝状等實に三十六回に及ぶといふ、大和は春日山の杉よりも、月ヶ瀬の梅よりも、乃至は芳野の櫻よりも、此人を有して居るを誇るべきである。尙別欄を見よ。

(九十一) 模範村長田村又吉君

下田、網代、稻取は昔から伊豆の三難村と稱へられてをつた、その稻取村が二三十年



意専心村治に努力した田村又吉翁の功勞であることは申すに及ばず、翁は明治十一年

始めて村長に人選されたのだが、役場に席の暖まったことはなく、日夜各戸を廻つて、村民の世話を焼く爲、懈怠癖のついた村中から悪まれ、翁の一族は心配して、親類會議を開き、持佛堂から亡父の位牌を持って来て、此の位牌に對して戸長はやめてくれとまで切諫したが、決心の堅い翁は、田村の家に狂人が出たと思つて宥めて下されといふ工合で、村の興廢を殆ど一人で脊負て立つて居つた、長い間には色々な話もあるが、或時日清戦争の祝捷會が開かれ、老若男女が飲めや唄へやの眞ッ最中、突然起つて、軍隊には常備豫備後備があつて戦争に勝つ、我が村にも是れだけの用意が必要だと叫んで、桑の植附を勧めた、村民が成る程と感心する、扱村人が桑を植を出す、今度は一々それを見廻つて、木は手で植ゑては可かん、心で植附けなけりや根は附かぬと言ひつゝ、一本一本の木の側に杭を打つて、何年何月何某植うと書き附けた、村民等はいやでもその木を丹精する氣になる、萬事かういふ調子に、百方致富の方法を講じて、一村の財政を豊かにしたが、明治二十五年の春豁然として悟る所あり、今迄村長顔をしてゐたのが恥しいと、断然羽織袴を焼き棄て、一個の農民となつて、村民の徳化に努め出した、今や國を擧げて人間の骨まで腐らさうとする時、豆州半島の一角たる此稻取村に、腐敗の風が吹附けず、嶄然として全國一萬二千有餘の町村中に卓歩して居るは、決して一朝一夕の事ではない、今の代議士などは翁の爪の垢でも煎じてのませたい。

(九十二) 法學博士岡松參太郎君

鏘々たる若手の法學博士、京都大學教授、而も其の法科全部を一人で背擔て立ち、東京の梅博士等と對抗し、一部の人からは、



確かに東京以上であることまで云はれた岡松參太郎君、誰が聞いても純然たる學者である、處が先生願ふる學者らしくない、學者らしくない學者として、恐らく博士の如きは少ない、しかし此處が博士の價値である、妙所である。

博士は精力の強き人で、遊ぶか勉強するか、何ちらか遣る人で、中ぶらの愚圖愚圖を遣つて居らぬ人、其の紅燈費が年千五百圓と極まつて居る所も法律的で、遊ぶ中にも極まりある所が珍ではないか、毎夜十時までは放膽に遊ぶが、十時後は洋燈

と首引きで、午前五時まで、側目も觸らぬ勉強、五時過ぎると始めて寢に就き、十二時に起き出づるといふ規則である。

博士は豊後鶴崎の人、岡松龜谷氏の長男、第一高等學校時代から秀才で、二十七年東京大學を卒業し、間もなく歐洲留學を命ぜられ、歸朝匆々三十二年京都法科大学の出來ると同時に、其の教授となり、次で博士となつたのである、何しろ精力の恐ろしく強い人で、何でもかでも自分の主張を押し通すと云ふ質なので、臺灣舊慣調査員となつてから、故兒玉伯、後藤男の知を得るに至つたのは決して偶然でない、今度又後藤男の引きで、満鐵の理事となるこの説がある、理事には誰れでも爲れるが、學者には容易になれぬ、學者は學者として大學に本據を据ゆるも可からずや、聞く往年兒玉内閣が出來たら、法制局長官となるこの約束であつたさうだ、兒玉伯も死んで仕舞つたので、流石の博士も、あの世での法制局長官は眞平であらう。

(九十三) 教育家井上偃水翁



水を渡り又水を渡り、雪を踏み又雪を踏み、日暮翁を船枝の山莊に訪ふものあり、翁迎へて座に延き、茗を烹、來意を謝す、曰く「唯長く教育に従事したといふ次第す」と。

翁年六十有六、澹如眞率、樸實寛宏、醇乎たる郷先生なり、年二十二(元治元年)にして寺小屋を創め、子弟を教育す、新庄小學起るに及び、之に校長たる十五年、園部高等小學起るに及び、之に校長たる十九年、其の前後を通じて教育に従事すること四十餘年、實に得難きの事たり、然れど教育は唯年數の長きを以て貴

ことせず、抑も翁は如何なる人ぞ、身は農家に生れ、讀書を好み、一郷の學者となり、